

# 若手研究者成果論集

## A Collection of Essays on West Asian Studies by Young Researchers

---

平成 17 - 21 年度 文部科学省科学研究費補助金  
特定領域研究

**Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Area (2005-2009)**

### セム系部族社会の形成

－ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究－

研究領域番号：124

Formation of Tribal Communities

in the Bishri Mountains, Middle Euphrates

---

平成 22 年 1 月

January, 2010

領域代表者 大 沼 克 彦

(国士舘大学イラク古代文化研究所教授)

Director: Professor Katshuhiko Ohnuma

(The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University)

# 若手研究者成果論集

**A Collection of Essays on West Asian Studies  
by Young Researchers**

## 序 文

平成 17 年度に発足した特定領域研究「セム系部族社会の形成 - ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」(平成 17～21 年度文部科学省科学研究費補助金、研究代表者：大沼克彦・国士舘大学教授)では、研究目標の達成のため、これまでシリア国ビシュリ山系を対象フィールドとした総合調査を実施してきた。その成果は、各年度の成果報告書やニュース・レター(年 4 回発行)、公開シンポジウム等で発信してきている。

本特定領域のプロジェクトの目標には、現地での調査研究とは別に、プロジェクトの遂行を通して、次代を担う若手研究者の育成もその柱の一つに掲げている。その一環として、2009 年 4 月 18 日に、東京・池袋のサンシャインシティ文化会館を会場として、若手研究者による研究成果公開発表会を開催した。当日は、考古学・言語学・人類学等の 7 人の若手研究者による意欲的な発表が行われ、活発な議論がたたかわされた。

本論集は、そこで発表された研究成果のうち、4 人の研究者の研究成果を盛り込んだものである。いずれも力作揃いであるので、ぜひご講評・ご批判いただきたい。

本研究プロジェクトは、本年度をもって終了することになるが、その研究成果を将来さらに発展させる試みを続けていきたいと考えている。同時に、将来の西アジア研究を展開・発展させていくであろう若手研究者を育成していく試みも継続していきたい。皆様方の応援を、ぜひともよろしく願いいたします。

特定領域・総括班

佐 藤 宏 之

# 目 次

## Contents

1. 「シリア、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓地遺跡における墓群構造」  
Structures of Grave-clusters at the Early Bronze Age Cemeteries near Tell Ghanem al- Ali  
on the Middle Euphrates.  
久米正吾 (国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員) ..... 1  
Shogo Kume (Co-operative Research Fellow, The Institute for Cultural Studies of  
Ancient Iraq, Kokushikan University)
  
2. 「シリア・ユーフラテス川中流域の事例に見る『部族』ガバナンスの様態と『遊牧民』概念の変容」  
The Transformation of the 'Tribal' Governance and 'Nomad' in the Middle Euphrates, Syria  
高尾賢一郎 (同志社大学大学院神学研究科・博士課程) ..... 14  
Kenichirou Takao (Ph.D. Student, Graduate School of Theology, Doshisya University)
  
3. 「南メソポタミア都市文明に貢献したマルトゥ」  
Martu: Its Contribution to the Urban Civilization of South Mesopotamia  
堀岡晴美 (国士舘大学大学院グローバルアジア研究科・博士課程) ..... 36  
Harumi Horioka (Ph.D. Student, Graduate School of Globalising Asia Studies, Kokushikan University)
  
4. 「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落変遷に関する一試案—第4次発掘調査の成果を中心に—」  
The Chronological Sequence of the Site of Tell Ghanem al-Ali  
長谷川敦章 (筑波大学大学院人文社会科学研究科・博士課程) ..... 62  
Atsnori Hasegawa (Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba)

# シリア、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の 前期青銅器時代墓地遺跡における墓群構造

久米 正吾（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員）

**Abstract:** Immense extramural cemeteries are distinctive mortuary practices during the Early Bronze Age on the Syrian Euphrates, but they have frequently been plundered in modern and antiquity. Recent Syro-Japanese archaeological investigations in the surroundings of Tell Ghanem al-‘Ali also attested several massive Early Bronze Age cemeteries which seriously disturbed by robbers. One approach to such damaged mortuary data is to extensively collect available common attributes through the graves, which also allows us to demonstrate a facet of the massive cemeteries in a relatively short time. For example, examination of types of graves is a considerable candidate of modes of the investigations, since plundered graves currently allow us to recognize their types to a great extent. In this paper, I present the results of 2008-2009 field seasons at Wadi Shabout and Wadi Daba cemeteries adjacent to Tell Ghanem al-‘Ali. Through the examination of types of graves, I demonstrate that four unique associations of different types of graves are defined at the cemeteries, and that those associations or grave-clusters contain particular land-use pattern. Based upon the results combined with other courses of resources, I attempt to argue the individual grave-clusters represent socio-political units like descent groups, suggesting the associations of different types of graves and the distribution of the grave-clusters across the landscape illustrate changing relationships between the living and the ancestors and diverse group identities in time and space.

## はじめに

ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代（前 3200- 前 2100 年頃）においては、大規模な墓地遺跡が遺跡外に数多く確認され、当該時期を特徴付ける指標となっている。しかし、その大半が盗掘の被害を受けており、未盗掘や残存状況の良好な墓の事例は必ずしも多くはない。2007 年度より開始されたテル・ガーネム・アル・アリ（Tell Ghanem al-‘Ali）遺跡周辺の考古学調査においても、直近に複数の大規模墓地遺跡が確認されたものの甚大な盗掘の被害を受けていた。

本稿はこのような損傷を受けた考古学データを、分析対象として最大限に活用する試みである。まず、2008 年度から 2009 年度にかけて実施された二つの墓地遺跡における盗掘墓の分布、クリーニング、試掘調査の結果について概略する。これらの調査では、盗掘墓であるがゆえに視認可能な墓室形態の変異や分布を探ることに重点が置かれる。また、その結果に基づきつつ、他の証拠も援用しながら被葬者間の関係についての予察と今後の研究課題について論じる。

## テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の墓地遺跡と調査結果の概要

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、現在のラッカ（Ar-Raqqqa）市から東に 50 km 程、ユーフラテス川中流域南岸に位置する前期青銅器時代の遺跡である（長谷川ほか 2008; 大沼・長谷川 2009 など）。遺跡は現在の河岸から約 2.5 km 離れたユーフラテス川の低位段丘面上に立地しており（Hoshino et al. 2008）、その周囲は現在畑地として利用されている。遺跡の後背約 1km のところにはビシュリ台地縁辺を構成する

急崖が形成され、遺跡が立地するユーフラテス低地との間にはその高低差が鮮明な印象を与えている。

2007年に実施された予備調査 (Tsuneki 2008) 及び2008年から2009年にかけて筆者らによって実施された本調査 (久米・沼本 2009a, 2009b; Numoto and Kume in press) において、遺跡周辺には二つの前期青銅器時代墓地遺跡が見つかっている (図1)。一つは、ワディ・シャブート (Wadi Shabout) 墓地遺跡で、ビシュリ台地上に数千基規模の盗掘坑が確認された。この墓地遺跡は台地上の崖際から約1.5km南に位置するやはり前期青銅器時代の墓地であるアブ・ハマド (Abu Hamed) 遺跡

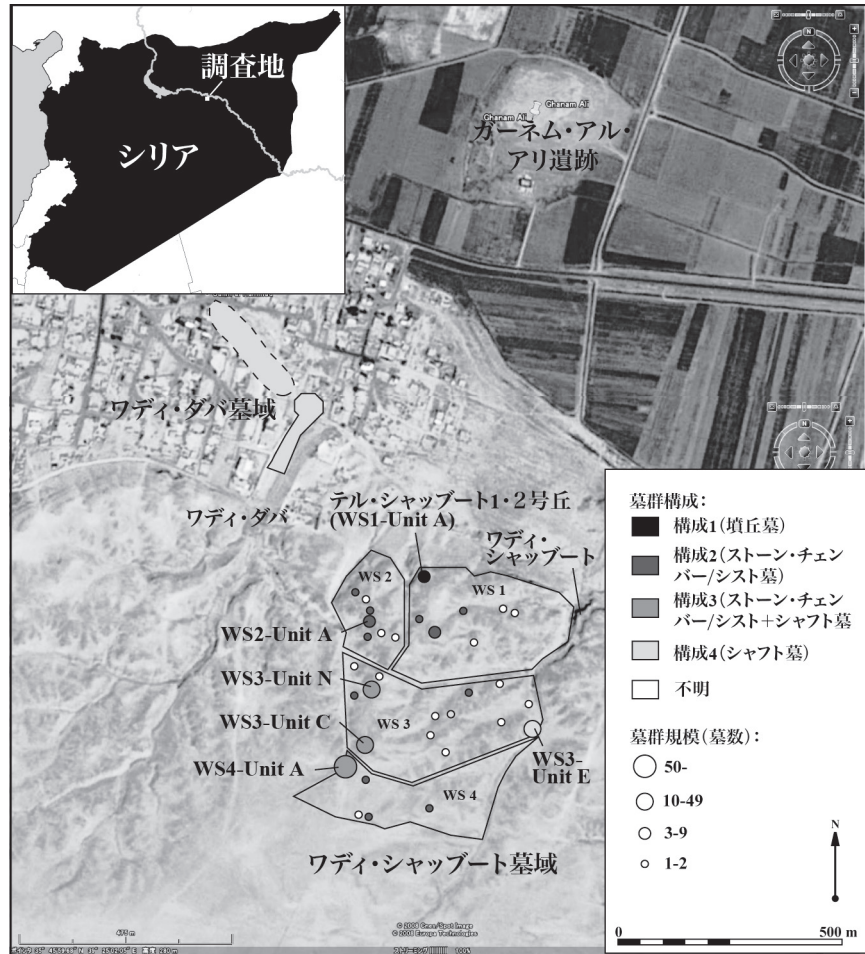


図1：テル・ガーネム・アル・アリ遺跡と直近の墓地遺跡 (衛星画像は Google Earth より引用)

(Falb et al. 2005) の一部を構成するものと想定され、この墓地遺跡が少なくとも約1.5kmの広範囲に広がっていることが示唆される。もう一つは、ガーネム・アル・アリ遺跡の南東650m程、現在のガーネム・アル・アリ村内に流れ込むワディの河口斜面及びユーフラテス川段丘斜面にひろがるワディ・ダバ (Wadi Daba) 墓地遺跡である。この墓地遺跡は村内での家屋や道路の新設に伴い、墓の多くが失われてしまっているが、それでも数多くの盗掘坑が視認できる。

これら二つの墓地遺跡は、高地 (ビシュリ台地上) と低地 (ユーフラテス河谷内) という対照的な立地のみならず、展開する墓の構造にも大きな違いが認められる。L. クーパーによる墓室形態の分類 (Cooper 2006: 206-239) にしたがって記述すると、河谷内のワディ・ダバ墓地遺跡がシャフト (Shaft) 墓のみで構成される一方、ワディ・シャブート墓地遺跡には、シャフト墓に加えて、シスト (Cist) 墓、ストーン・チェンバー (Stone Chamber) 墓、墳丘墓 (Tumulus) などの多様な構造の墓が認められている。

2008年度以降の本調査では、主に盗掘墓を踏査することによって墓の構造を記録する調査手法を採用した。いずれの墓も盗掘による破壊が著しいため、通常であれば分析の中心となるはずの副葬品や人骨資料の回収がほぼ期待できない。一方で、盗掘により墓室が露出しているため、墓の構造であればほぼ確実に記録することができる。これに加えて、いくつかの特徴的な遺跡では試掘やクリーニング調査を実施し、より精度の高い情報が得られるよう努めた。

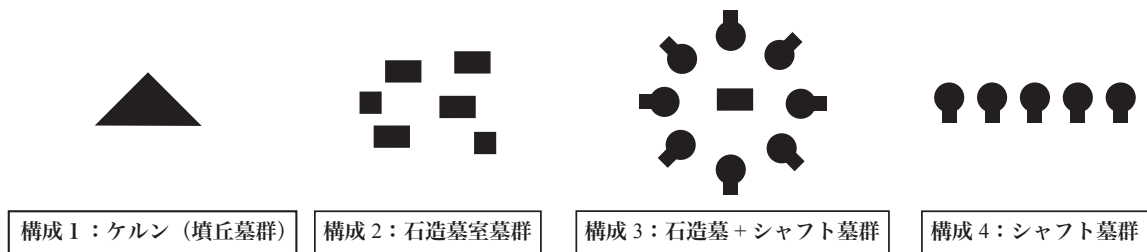


図2：ワディ・シャップート及びワディ・ダバ墓地遺跡で定義された墓群構成の概念図

2008年から2009年の調査で、ワディ・シャップート墓地遺跡において計33の墓群、総数151基の墓を記録した。一方、ワディ・ダバ墓地遺跡の調査はまだ継続中であるが、少なくとも3つの墓群に40基以上の墓が存在していた。これまでの調査での成果は、ワディ・シャップート及びワディ・ダバ墓地遺跡に分布する墓群が異なる形態の墓の組み合わせから成る4種に類型化されることが明らかとなってきたことである（図1、図2）。

第一は、台地突端に位置するケルン墓である（墓群構成1）。以前の出版物（久米・沼本 2009a, 2009b）では墳丘墓群と記載していたが、2009年春の試掘調査によって、墳丘はいずれもおそらくヘレニズム期からローマ期に帰属するものの、その内の一基の直下に前期青銅器時代のケルン墓（図3-1）が存在していることが判明した（Numoto and Kume in press）。これまでのところ、調査地におけるケルン墓はこの一例しか確認されていない（WS1-Unit A）。

第二に、台地上でたやすく手に入る石膏の平石を用いたシスト墓及びストーン・チェンバー墓といった石造墓室を有する墓のみで構成される墓群（墓群構成2）である（久米・沼本 2009a, 2009b）。3基以上を含むこの構成の墓群はWS2-Unit Aの一例のみである。この墓群はビシュリ台地縁辺部を急峻に切れ込む2つの名称のないワディの間に位置している。先のケルン墓のように台地突端ではないものの、崖を大きく切り込んだ東側のワディのため、ガーネム・アル・アリ遺跡をよく望むことができる。WS2-Unit Aでは盗掘坑のクリーニングを実施し、ストーン・チェンバー墓3基、シスト墓2基、ストーン・チェンバーとシストの折衷形態1基の計6基の墓で構成される墓群であることを確認した（図3-2）。

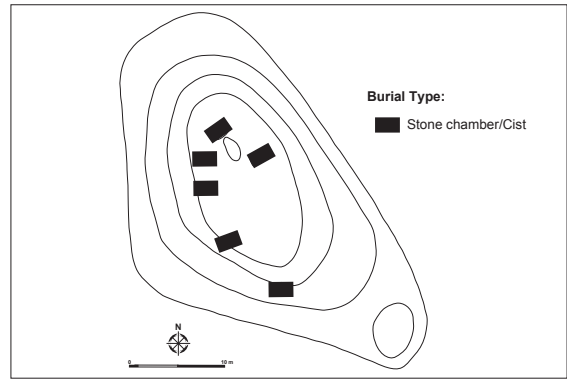
第三に、ストーン・チェンバー墓ないしシスト墓の石造墓とシャフト墓で構成される墓群である（墓群構成3）。これは、WS3-Unit CやWS3-Unit N、あるいはWS4-Unit A等で確認されている。この墓群は、台地上を流れるワディや自然丘の斜面部にシャフト墓を掘り込み、やや高まった段丘面や丘陵頂に少数の石造墓が確認される点に特徴がある（図3-3）。このタイプの墓群は、WS3区と4区の台地内陸部で見つかり、台地縁辺の1区や2区では認められていない。

第四に、シャフト墓のみで構成される墓群がある（墓群構成4）。台地上では、ワディ・シャップート本流とその支流の合流点に位置するWS3-Unit Eがある。この地点では、比較的急峻な支流の左岸斜面に10基のシャフト墓が掘り込まれていた（図3-4）。また、ワディ・ダバ墓地遺跡の墓群はすべてこの墓群構成に含まれるものである。

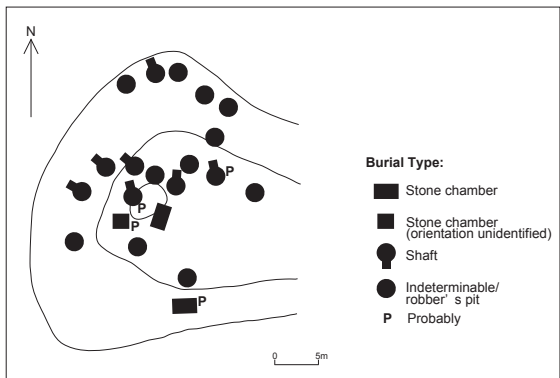
このように、調査地には異なる墓室形態の組み合わせで構成される墓群が四種存在していることが示された。また、この四種の墓群構成は墓室形態の組み合わせが異なるばかりでなく、それぞれ固有の立地特性もある（図4）。例えば、ケルン墓（墓群構成1）と石造墓群（墓群構成2）は、ビシュリ台地の突端の崖上、ガーネム・アリを見下ろす位置を占める。一方、石造墓+シャフト墓群（墓群構成3）は台地上のやや内



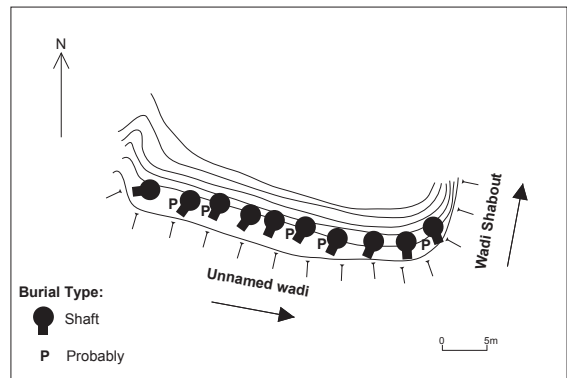
1



2



3



4

図3：(1) 墓群構成1のケルン墓（WS1-Unit A テル・シャブート1号丘下部。北より）、(2) 墓群構成2の平面図（WS2-Unit A）、(3) 墓群構成3のスケッチによる平面図（WS3-Unit N）、(4) 墓群構成4のスケッチによる平面図（WS3-Unit E）

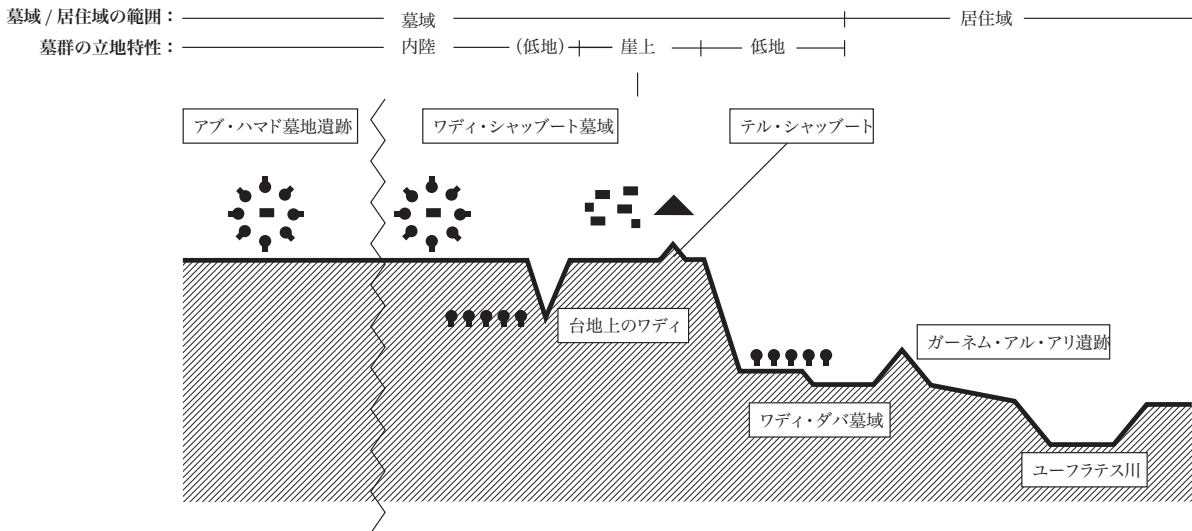


図4：各墓群構成の立地概念図

陸に入った地点に立地する。シャフト墓群（墓群構成4）は台地上を流れるワディ底の斜面やユーフラテス低地の段丘面などに立地している。



## ワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地の墓群構造に関する予備的考察

2008年度から2009年度にかけて実施したガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代ワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地遺跡の踏査、試掘、クリーニング調査により、異なる形態の墓の組み合わせから成る4種の墓群構成が定義できることが示された。また、その4種の墓群にはそれぞれ個別の立地特性があることもわかった。それでは、これら4種の墓群構成が生成された背景にはどのような要因を想定することができるだろうか。

近年、最も積極的にユーフラテス川中流域における前期青銅器時代の埋葬に関して発言しているクーバー (Cooper 2006, 2007) が指摘するように、そもそも個々の墓の構造に多様性が認められる背景には様々な要因が想定できる。例えば、墓の構築年代の違い、被葬者の階層やジェンダーの差違、あるいは帰属する民族集団の異同等である。クーバーは、個々の墓の形態がその中でも民族集団の異同に密接に関連すると示唆し、ユーフラテス川中流域北方に顕著に分布するシスト墓がフリ人を、南方に主体的なシャフト墓がアムル人を反映すると暗示する (Cooper 2006: 247-250)。その指摘は重要な示唆を与えてくれており、前期青銅器時代における多様な集団の社会関係を埋葬の証拠からアプローチする道筋を切り開いている。その一方、盗掘により破壊されている事例の多いユーフラテス川中流域の墓地遺跡においては、個々の墓の副葬品や出土人骨等を含めた詳細な分析がなされた例が少なく、実証的な研究が実施されにくい状況にあることもまた事実である。

筆者らが調査したワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地遺跡の事例も、盗掘墓の分布調査による墓室形態の記録という手法により得られたデータのため、個々の墓に関する情報は極めて貧弱である。したがって、基礎データが整備されない段階での考察であることは承知の上で、クーバーが挙げた「年代」、「階層」、「ジェンダー」、「民族集団」という四項目をもう一度筆者なりにここでは吟味してみたい。その四項目を整理すると、時間軸を検討する「年代」と当時の社会構造を検討する残りの三項目とに大きく分けられよう。そこで、以下では1) 墓室形態の編年的考察、及び2) 前期青銅器時代ユーフラテス川中流域における社会の特質と墓地の位置づけ、という観点から検討を加え、3) ワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地の墓群構造についての予備的考察を示したい。

### 1) 前期青銅器時代の墓室形態の編年

ユーフラテス川中流域における前期青銅器時代の個々の墓室形態を編年的に整理する試みは、まだ十分に達成されたとは言い難い。盗掘墓が多く年代の決め手となる副葬品の情報が不十分である、そもそも墓の報告が十全になされていない、複数の世代にわたって墓が繰り返し利用されるため異なる年代の資料が混在する、等の事情があることによる (例えば Carter and Parker 1995; Porter 2000)。このため、A. ポーター (Porter 2000: 403) のように墓室形態の編年を設定すること自体に否定的な意見を持つ研究者もいるが、多くの研究者は特定の墓室構造が編年的位置づけを持つことを認めている。

例えば、先駆的研究を行った W. オルトマン (Orthmann 1980: 104) は、いずれの墓室構造も紀元前3千年紀を通じて認められるものの、ストーン・チェンバー墓はその前半の方に、シャフト墓は後半の方に年代付けられることを示唆している。このような見方は、オルトマンが論文を執筆した当時よりもデータが蓄積された近年の総論においても大筋として踏襲されている (Cooper 2006: 207-220)。最も体系的な研究は、E. カーターと A. パーカー (Carter and Parker 1995: 110-111) によって実施されている。彼女らは紀元前3千年紀を三時期に区分した上で、前期にはシスト墓やストーン・チェンバー墓が卓越すること、中頃

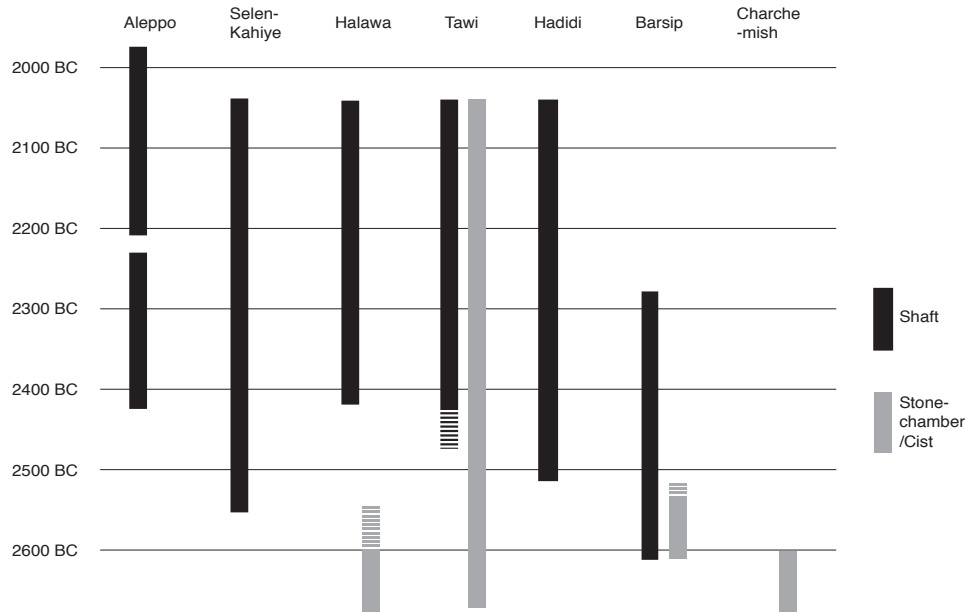


図5：シリア、ユーフラテス川中流域における墓室形態の編年 (Carter and Parker 1995: Table14.1を基に作成)

に入るとシャフト墓が初めて出現すること、後期には、シャフト墓が卓越し、シスト墓やストーン・チェンバー墓がほぼ認められなくなることを示した (図5)。ただし、いずれの研究者も指摘していることは、これらの墓室構造の変化が必ずしも発展過程として捉えられる訳ではなく、多様な墓室構造が同時に併存することである。したがって、前3千年紀のユーフラテス川中流域において卓越する墓室構造がシスト墓やストーン・チェンバー墓などの石造墓からシャフト墓へと移行していく過程は、現時点ではあくまで一般的な傾向を示しているにすぎない。しかし、仮にシスト墓やストーン・チェンバー墓といった石造墓とシャフト墓の間に時期差を考慮することができるとしたら、筆者らが調査している異なる形態の墓室が混在する墓群構成については、より複雑な様相が想定可能となる。それについては、後に予察する。

## 2) ユーフラテス川中流域における前期青銅器時代の社会

前3千年紀のユーフラテス川中流域の社会を特徴付ける際に、しばしば「部族」的という形容がなされる。ポーター (Porter 2002)、クーパー (Cooper 2006) あるいはペルテンブルグ (Peltenburg 2007) が簡便にまとめているように、そのように形容される背景にはまず、ガーネム・アル・アリ遺跡を含めたユーフラテス川中流域の多くが年間平均降水量 200 mm 程のいわゆる「境界 (marginal)」環境 (例えば Wachholtz 1996) に位置することがある。この環境では天水農耕が不可能ではないが安定して営めず、牧畜を始めとする多様な生存戦略を採用する必要がある。次に、前期青銅器時代において集落間の階層性が明確な、例えばハブール地域 (Ristvet and Weiss 2005) とは異なり、ユーフラテス川中流域では遺跡間の規模に顕著な格差が認められないこともある。

文化人類学の立場から、赤堀は近現代アラブ系部族社会の諸特徴を「領域的」、「分節的」、「父系」、「出自」と定義した (赤堀 印刷中。西秋 2009 による論評も参照) が、前期青銅器時代の「部族」社会を裏付ける考古学的証拠は、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺で最近実施された遺跡分布調査からも、わずかではあるが得られている。この遺跡踏査では、ユーフラテス川の低地部に位置するテル型の前期青銅器時代集落遺跡とビシュリ台地上に位置するほぼ同時代の大規模墓地遺跡の鮮やかな組み合わせが示され

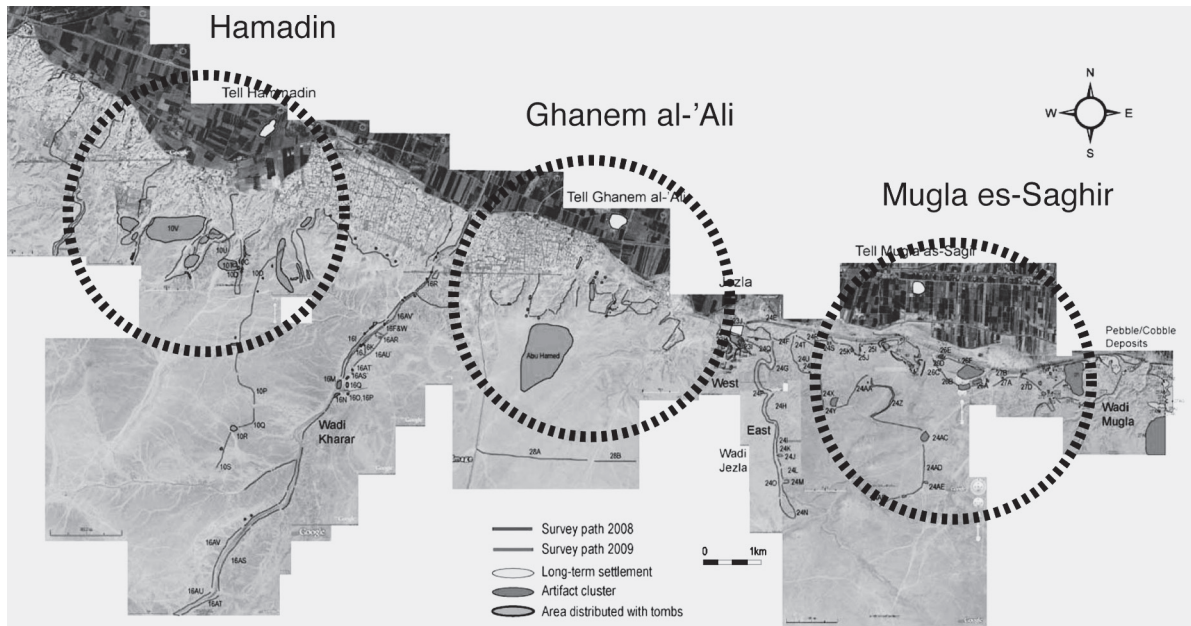


図6：テル・ガーネム・アル・アリ遺跡及び近隣の前期青銅器時代二遺跡（ハマディーオン及びムグラ・アッザギール）と大規模墓地遺跡との結合関係（西秋ほか 印刷中を基に作成）

た（図6）。しかも、その組み合わせはワディなどの自然地形を境界として一定の空間的隔たりをもって分布し、一つの集落に帰属する領域を暗示しているように見える（西秋ほか 印刷中）。この結果は無論、墓地からの採集標本の微細な年代同定あるいは人口動態学的分析を通じて、集落の居住者と墓地の被葬者との関係を詳細に詰めていくという課題を残している。墓地の被葬者が必ずしも近接する集落の死者とは限らないからである。例えば、先にふれたアブ・ハマド墓地遺跡の発掘者は、その規模が一集落の墓地としては甚大なことから、ガーネム・アル・アリ遺跡のようなユーフラテス川低地部の定住的集落ではなく、ビシュリ山地を利用していた遊牧民による埋葬の可能性が高いことを示唆する（Falb et al. 2005）。

この二つの見方、つまりワディ・シャップートやワディ・ダバ、そしてアブ・ハマドの被葬者の具体的な実像については、現在手元にある資料で実証することはおそらく難しい。踏査や盗掘墓のクリーニングによる散発的な採集標本だからである。それは今後、保存状態の良い墓から発掘された良質なデータに基づきつつ、人骨の形態・遺伝学的分析、あるいは食性分析など理化学的手法を交えて解明すべき課題であろうかと思われる。ただし、現時点で重要と思われることは、当時の墓地が遺跡として考古学的に顕著に認識されている点である。埋葬の考古学においてしばしば引用されるサククスとゴールドスタインの仮説8（Saxe-Goldstein hypothesis 8）は、民族誌の通文化的研究を通じて、ある集団に固有な墓地の出現が、父系出自原理に基づく資産相続を行う社会の登場と同一視できることを示している（例えば Morris 1991）。無論、このモデルを適用するにあたっては、考古学的データに基づく検証作業が必要なことは言うまでもないが、墓地遺跡が考古学的に顕著に視認可能となったというその一点に着目すると示唆に富む指摘である。というのも、ユーフラテス川中流域における墓地遺跡の顕在化は前期青銅器時代に始まった可能性があるからである。この点に関しては、フランス隊によるユーフラテス川中流域（現在のデリゾール市－アブ・カマル市間の範囲）の遺跡分布調査（Geyer and Monchambert 2003）が参考になる。この調査ではユーフラテス低地部と台地縁辺部に立地する先土器新石器時代B期（紀元前8千年紀）からローマ時代後期（紀元後7世紀）までの集落遺跡と墓地遺跡が体系的に記録されたが、墓地遺跡は前期青銅器時代以降に出現

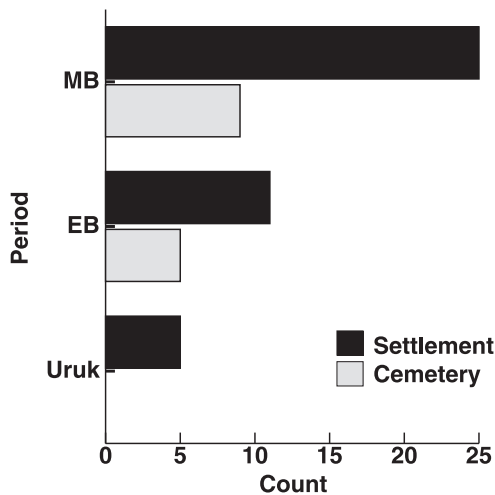


図7：デリゾール・アップ・カマル間の集落遺跡と墓地遺跡の出現数の比較（ウルク期から中期青銅器時代（MB）まで。Geyer and Monchambert 2003 を基に作成）

することが明瞭に示されている（図7）。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡、直近の墓地遺跡及びその周辺から得られた考古学的証拠は未だ十分とは言い難い。しかし、ガーネム・アル・アリ遺跡をはじめとするユーフラテス川中流域の前期青銅器社会が、赤堀が定義した部族社会の特質、すなわち「領域的」、「分節的」、「父系」、「出自」といった諸要素を持ち合わせていたことを、これまでに得られた証拠は暗示しているように見える。ユーフラテス川中流域の前期青銅器社会の特質そのものについて議論することは本稿の目的を超えるが、例えば、西秋ら（印刷中）によって確認された集落と墓地の明瞭な組み合わせとそれが一定の間隔をもって分布している様相は、「領域的」で「分節的」な社会を反映しているかも知れない。また、墓地遺跡の顕在化は、「父系」の「出自」集団の登場と見なしうる証拠となるかも知れない。

### 3) ワディ・シャップート、ワディ・ダバ墓地の墓群内・墓群間関係についての予察

前節までに、まずシスト墓及びストーン・チェンバー墓がシャフト墓に先行する可能性を墓室形態の編年的考察から示した。次に、ユーフラテス川中流域の前期青銅器社会が出自原理に規定された社会である可能性を間接的な考古学証拠に基づいて議論した。これまでの現地調査で得られている考古学的データが盗掘墓の踏査という調査手法上の理由により脆弱である、という事情を考慮した上で、このような二点の想定のもとに墓群内・墓群間関係について、以下予察的に示したい。

シスト墓ないしストーン・チェンバー墓といった石造墓がシャフト墓に先行するという可能性は、墓群構成3において最も重要な指摘である。というのも、石造墓とシャフト墓で構成される墓群構成3内において、その両者に新旧関係を見出すことができるからである。また、上で考察したように、ユーフラテス川中流域の前期青銅器社会が出自原理に基づく集団で構成されているとしたら、一つの墓群内の個々の墓の被葬者は互いに親族集団などの出自関係をおそらく有していたはずである。したがって、時期的に古いと想定される石造墓の被葬者は、シャフト墓の被葬者にとって祖先にあたと仮説的に考えることができる（図8）。しかし、この石造墓の被葬者が必ずしもシャフト墓の被葬者と実際の血縁関係にあったと考える必要はないのかも知れない。いわゆる擬制的親族関係が機能していた可能性もある（図9）。事実、クーパーが暗示したように（Cooper 2006: 243-250）、シスト墓とシャフト墓がそれぞれ異なる民族集団の埋葬施設であるとすれば、一つの墓群内に配置される石造墓とシャフト墓の被葬者の間には、血縁関係を想定することができなくなってしまう。擬制的親族関係は歴史学、民族誌学、考古学の分野ではすでに様々な議論がなされてきた課題ではあるが、ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代の埋葬に関する論考でもすでに取り上げられている（Porter 2002: 6-7, 24-29）。加えて、墓地が時期を違えて再利用される例は時代・地域を問わず各地で報告されており、領有権や出自の正当性を示すと解釈される場合もある（例えば櫻井 2007）。このような点を考慮すると、墓群構成3のシャフト墓の被葬者は、石造墓の被葬者の直接の子孫であった可能性と他地域から新たに入植した人々であった可能性の二つを想定しておかなければならない。

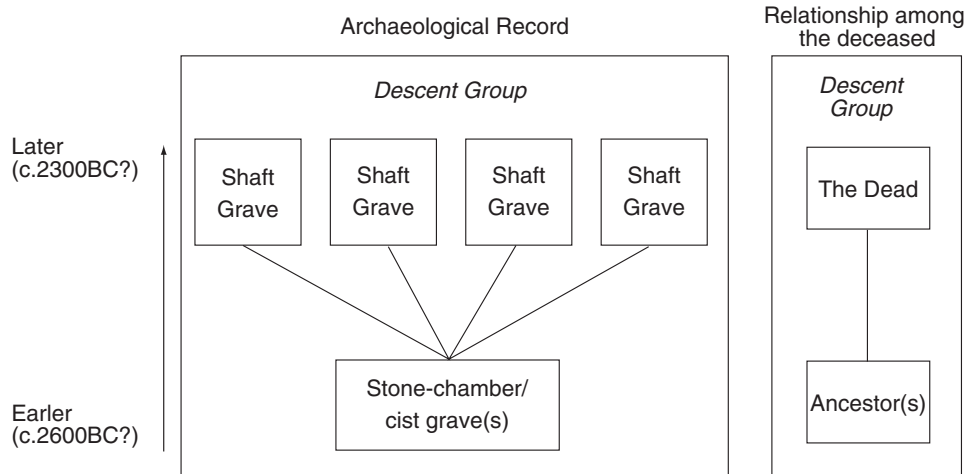


図8：墓群構成3における考古学的記録と被葬者間関係の対応状況概念図

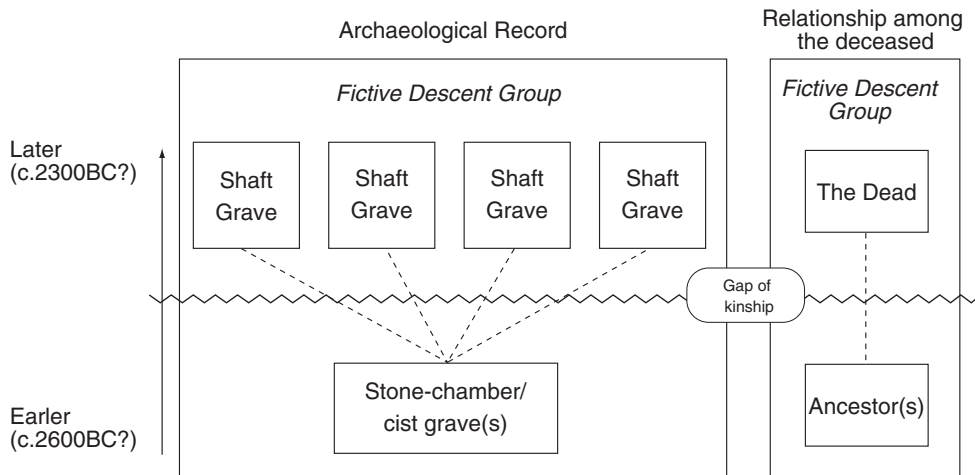


図9：墓群構成3における考古学的記録と被葬者間関係の対応状況概念図（擬制的親族関係による想定）

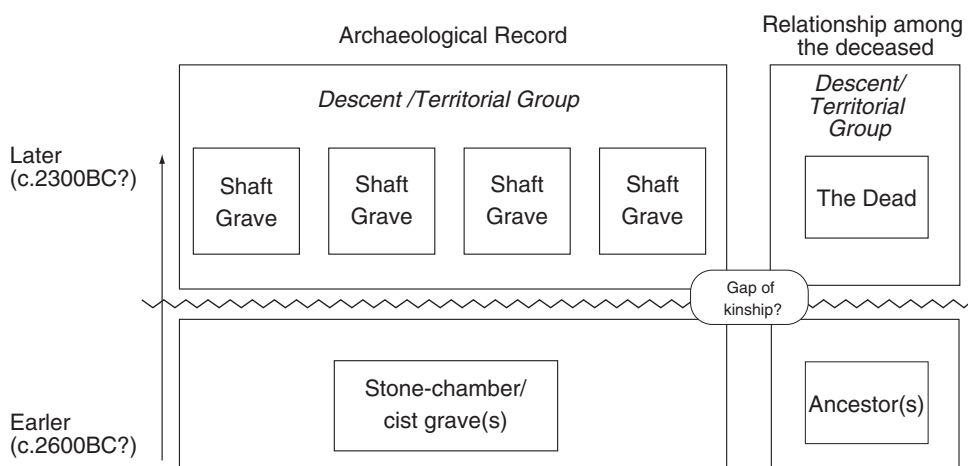


図10：墓群構成4における考古学的記録と被葬者間関係の対応状況概念図

一方、シャフト墓のみで構成される墓群構成4は、墓室形態の編年的見地から、石造墓を含む墓群構成3より若干遅れて、新たに造営された墓群であった見なすことができる（図10）。これらの墓群は、や

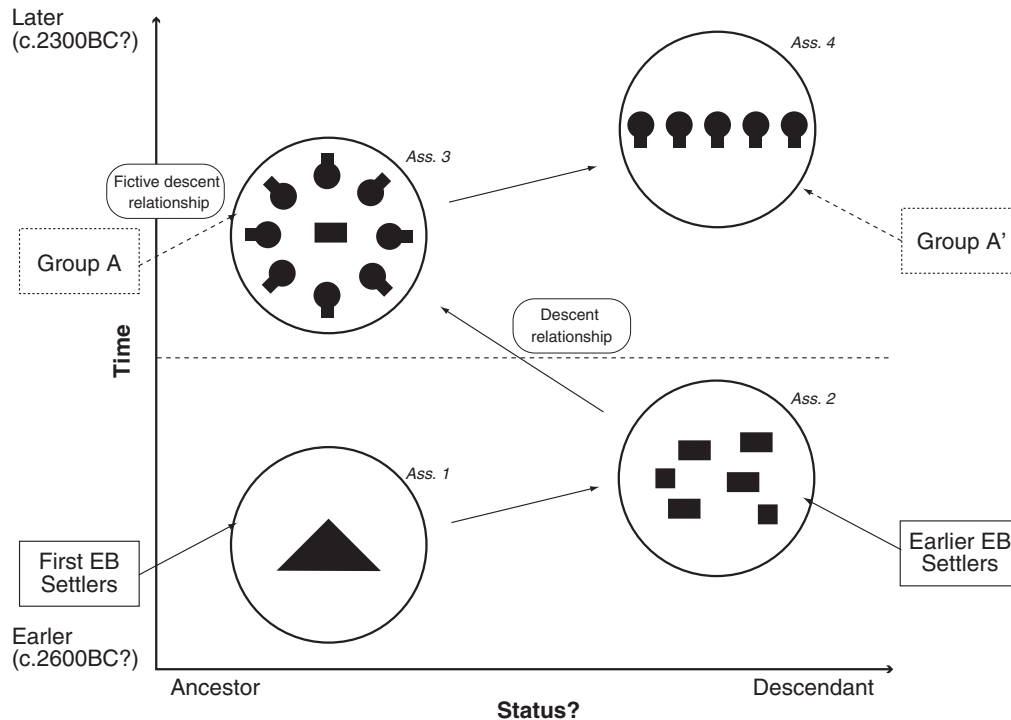


図11：各墓群構成の構造に関する動的見通し

や古い石造墓の被葬者である祖先とのつながりを有さない人々、有することができない人々、あるいは有する必要がなかった人々であったかも知れない。その意味で、墓群構成4の被葬者もまた、墓群構成3から分岐した人々であった可能性と他地域から新たに入植した人々であった可能性の二通りが想定可能であり、かつ墓群構成3のシャフト墓の被葬者との階層差も考慮に入れておく必要がある。

次に、シスト墓ないしストーン・チェンバー墓のみで構成される墓群構成2については、少なくとも墓群構成3及び4よりも古い時期に年代付けることができる。その点において、ワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地の造営主体としては初期の入植者として位置づけられるのかも知れない。

最後に、ケルン墓1基で構成される墓群構成1もやや議論に窮するが、ガーネム・アル・アリ遺跡を見下ろすビシュリ台地の崖際の立地を考慮して、ここでは最初期の入植者により造営されたものと仮定しておきたい。

以上、四つの墓群構成の墓群内・墓群間関係について、現在想定しうる範囲で予察した。それを図11にまとめてある。無論、ここで述べてきたことはあくまで今後の調査を進めていく上での見通しであることは言うまでもない。ただし、この予備的な議論において最も示したかったことは、例えば、墓群構成3のような異なる形態の墓が混在する墓群の個々の墓に時期差を積極的に見出すべきではないか、という問題提起である。クーパー (Cooper 2007: 65-66) は、前3千年紀のユーフラテス川中流域においてシスト墓がシャフト墓に先行して出現することは認めつつも、異なる形態の墓が時期差を反映しているという見方には消極的な姿勢を示している。この背景には、彼女の持論である個々の墓室形態が当時の民族集団の異同を反映している可能性を強調するため、という理由も一つにはあるだろう。その一方、今回調査したワディ・シャブート及びワディ・ダバ墓地遺跡同様、ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代墓地遺跡の多くが盗掘墓であり、精緻な年代同定が困難であることも大きく影響しているように見える。今後、より保存状態の良い墓の多角的な分析を通じて今回示した見通しを検証していく必要があることはもちろん、

ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代墓地研究が当時の「部族社会」を動的に解明する潜在性を有している一方、良質な考古学的データの不足という問題点が今なお存在していることを最後に指摘しておきたい。

## まとめ

本稿では、まず2008年度から2009年度にかけて実施されたワディ・シャップート及びワディ・ダバ墓地遺跡の調査結果について概略し、調査地において異なる形態の墓の組み合わせから成る4種の墓群構成が定義できること、そしてそれらの墓群には固有の立地特性があることを示した。また、その4種の墓群構成が生成された背景には、祖先を通じた生者と死者との変わりゆく関係性と多様な集団的アイデンティティの存在があることを暗示した。

本稿はこの研究を取り組むきっかけとなった「セム系部族社会の形成」プロジェクトへわずかでも貢献できればと企図して、敢えて不十分なデータに基づいて予察した。本研究はまた、盗掘墓という損傷の激しい考古学的データをいかに研究資源として有効活用できるか模索する試みでもあった。その試みが果たして方法的に有効であるかどうかは、はなはだ心許ない。しかし、より良好な考古学的データを収集する努力は徐々に成果を収めつつある。調査が終了したばかりのため本稿において直接取り上げることはできなかったが、2009年秋の第4次シーズンにおいて、ワディ・ダバ墓地遺跡において保存状態の良いシャフト墓が一基確認された (Numoto, Kume and Ohnuma in press)。調査地点には同様の墓が複数存在している可能性が高い。この地点の調査の継続することにより、より具体的な考古学的証拠に基づいた議論を行う環境が今後整えられることを付記して本稿のまとめとしたい。

## 謝辞

本稿は2009年4月18日に、池袋サンシャインシティ文化会館にて行われた文部科学省科学研究費補助金による特定領域研究「セム系部族社会の形成」若手研究者研究成果発表会で口頭発表した内容を修正したものである。ユーフラテス川中流域の前期青銅器時代の埋葬という新たな研究課題に取り組む機会と未だ不十分な論旨の本稿を発表する機会とを与えてくださった本プロジェクトに参加する先生方に深くお礼申し上げたい。また、現地調査において様々な便宜を図ってくださり、自由な研究を認めてくださった計画班代表の沼本宏俊先生（国士舘大学）には、特にお名前をあげて感謝申し上げたい。

なお、最後に個人的なことになり恐縮だが、本稿を木内智康君（東京大学大学院博士課程）の御霊前に捧げたい。木内君は本特定領域研究のメンバーであり、ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査に大活躍であった。しかし、2008年9月、突然の病に襲われ、ついに帰らない人となった。本稿の一部は彼への追悼の趣旨で編まれた論集に投稿する予定のものであったが、それが果たせなかった。生前の彼ならきっと筆者の怠慢を笑って許してくれるかも知れないが、心からお詫びを申し上げるとともに、この場を借りて謹んでご冥福をお祈りさせて頂きたい。

## 引用文献

Carter, E. and A. Parker 1995 Pots, people and the archaeology of death in northern Syria and southern Anatolia in the latter half of the third millennium BC. In S. Campbell and A. Green (eds.) *The archaeology of death in the ancient Near East*. Oxbow, Oxford. pp. 96-116.

- Cooper, L. 2006 *Early urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge, New York and London.
- Cooper, L. 2007 Early Bronze Age burial types and social-cultural identity within the northern Euphrates Valley. In E. Peltenburg (ed.), pp. 55-72.
- Falb, C., K. Krasnik, J.-W. Meyer and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal. 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarbrücker Druckerei & Verlag, Saarbrücken.
- Geyer, B. and J.-Y. Monchambert 2003 L'histoire de l'occupation du sol. In B. Geyer and J.-Y. Monchambert (eds.) *La basse vallée de l'Euphrate Syrien du Néolithique à l'avènement de l'islam, Vol. 1*. Institut Français du Proche-Orient, Beirut. pp. 233-282.
- Hoshino, M., T. Tanaka, T. Nakamura, H. Yoshida, T. Saito, K. Tsukada and Y. Katsurada 2008 Geological and geographical field survey. In K. Ohnuma and A. al-Khabour (eds.), pp. 171-176.
- Morris, I. 1991 The archaeology of ancestors: the Saxe/Goldstein hypothesis revisited. *Cambridge Archaeological Journal* 1/2: 147-169.
- Numoto, H. and S. Kume in press Soundings of hilltop burial mounds near Tell Ghanem Al-'Ali. In K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the ninth working season. *Al-Rafidan* 31.
- Numoto, H., S. Kume and K. Ohnuma in press Cleaning and survey of Early Bronze Age shaft graves at Wadi Daba cemetery near Tell Ghanem Al-'Ali. In K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.) Archaeological research in the Bishri region: report of the eleventh working season. *Al-Rafidan* 31.
- Ohnuma, K. and A. al-Khabour (eds.) 2008 Archaeological research in the Bishri region: report of the fourth working season. *Al-Rafidan* 29: 170-190.
- Orthmann, W. 1980 Burial customs of the 3rd millennium B.C. in the Euphrates Valley. In J.-C. Margueron (ed.) *Le Moyen Euphrate. Zone de contacts et d'échanges. Actes du colloque de Strasbourg (10-12 mars 1977)*. E.J. Brill, Leiden. pp. 97-105.
- Peltenburg, E. 2007 New perspectives on the Carchemish sector of the Middle Euphrates River valley in the 3rd millennium BC. In E. Peltenburg (ed.), pp. 1-24.
- Peltenburg, E. (ed.) 2007 *Euphrates River Valley settlement: the Carchemish sector in the third millennium BC*. Oxbow, Oxford.
- Porter, A. 2000 *Mortality, monuments and mobility: ancestor traditions and the transcendence of space*. Ph.D dissertation, the University of Chicago (Published by UMI, Ann Arbor).
- Porter, A. 2002 The dynamics of death: ancestors, pastoralism, and the origins of a third-millennium city in Syria. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 325: 1-36.
- Ristvet, L. and H. Weiss 2005 The Habur region in the late third and early second millennium B.C. in W. Orthmann (ed.), *The history and archaeology of Syria, Vol. 1*. Saarbrücken Verlag, Saarbrücken (<http://leilan.yale.edu/pubs/files/RistvetWeiss2005HAS1.pdf>).
- Tsuneki, A. 2008 A short history of Ganam al-Ali village. In K. Ohnuma and A. Al-Khabour (eds.), pp. 184-190.
- Wachholtz, R. 1996 *Socio-economics of Bedouin farming systems in dry areas of northern Syria*, Wissenschaftsverlag Vauk Kiel KG, Kiel.
- 赤堀雅幸 印刷中「イスラーム期以降のアラブ系部族の特徴」大沼克彦・西秋良宏（編）『紀元前3千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る－』六一書房



- 大沼克彦・長谷川敦章 2009「農耕と牧畜のはざまに。ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落－シリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2008年度発掘調査－」日本西アジア考古学会（編）、76-79頁。
- 久米正吾・沼本宏俊 2009a「ユーフラテス川流域の古代墓を探る－シリア、ビシュリ山系ワディ・シャブール墓域の第1次・2次調査（2008年）－」日本西アジア考古学会（編）、80-85頁。
- 久米正吾・沼本宏俊 2009b「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」『セム系部族社会の形成 Newsletter』14: 11-19.
- 櫻井準也 2007「遺跡・遺物間の系譜－われわれはどのように遺跡・遺物を認識し、利用してきたか－」『金鈴』24: 4-19.
- 西秋良宏 2009「紀元前3千年紀の西アジア－第5回公開シンポジウムの記録－」『セム系部族社会の形成 Newsletter』14: 1-5.
- 西秋良宏・門脇誠二・久米正吾・安倍雅史・仲田大人 印刷中「ユーフラテス河中流域の先史時代－第2次、第3次調査（2009）－」日本西アジア考古学会（編）『平成21年度・考古学が語る古代オリエント－第17回西アジア発掘調査報告会報告集－』日本西アジア考古学会
- 日本西アジア考古学会（編）2009『平成20年度・考古学が語る古代オリエント－第16回西アジア発掘調査報告会報告集－』日本西アジア考古学会
- 長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦 2008「農耕と牧畜のはざまに。ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落－シリア、ビシュリ山系、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2007年度発掘調査－」日本西アジア考古学会（編）『平成19年度考古学が語る古代オリエント－第15回西アジア発掘調査報告会報告集－』日本西アジア考古学会、62-69頁。

# 「シリア・ユーフラテス川中流域の事例に見る『部族』 ガバナンスの様態と『遊牧民』概念の変容」

高尾 賢一郎（同志社大学大学院神学研究科博士後期課程）

## Abstract:

This article, based on the research mainly through interviews in Oct., 2008, aims to outline the transformation of 'tribe' identities and its significances in the villages settled between Bishri and the Euphrates. The interviews, proceeded with the elders of each village, focuses on histories and lifestyles of the village Ghanim al-'Ali and around it, in total 11 villages.

What the article is interested in are below: 1) what has 'tribe' as a unit for the people implicated and does? How is the relation with 'nomad'? 2) How is today's knowledge sharing of the villagers for their 'tribe'? 3) What does 'tribes' or 'nomad' implicate and how the research can proceed?

This article is composed of 4 chapters. Ch.2 indicates the outline of the research and the project. Ch.3 writes down the results of interviews and explores the histories and contemporary lifestyles of each village, and shows their transformations. And ch.4 concludes the article and proposes some points as for the concepts of 'tribe' in the Middle East through this Bishri-Euphrates case.

## 1. 本稿の概要

本稿は2008年10月に特定領域研究全体の調査である第7次調査隊の中で筆者が行なったガーニム・アル＝アリー村（以下GA）周辺の聞き取り調査を元にして、同村を含んだビシュリ山系の北、ユーフラテス川中流域沿いの集落において確認できた「部族」についての住民の意識を、各村の歴史やそこに見られる生活形態の変容との関連から描き出すことを目的としている。筆者が所属する公募研究班「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」（代表：赤堀雅幸氏）の最終的な研究目的は（1）父系出自を基盤とするアラブ系「部族」の原理的一貫性、（2）原理の様々な形での活用によるアラブ系「部族」の形態的柔軟性（地域による多様なあり方と、時代による多様なあり方の双方を含む）、そして（3）部族が機能する現実の場における組織的側面とネットワーク的側面の相補性、という3つの問題意識を人類学と歴史学の2つの分野を中心として共有し、「部族」概念のより明確な規定を探求することにある。第7次調査で行なわれた筆者の調査は第8次以降の公募研究班の調査隊にとっての予備的調査であり、同地域の「部族」に関する基本的な情報を整理する役割を担っていた。

とはいえ筆者は以下のような独自の問題意識を維持してきた。まずは、(1) 調査地域の住民にとって「部族」という構成単位がどのような意味を持っているのかという点である。元来、中東における「部族」は父系出自を基本としてまとまって居住してきた集団という意味から、「遊牧民」と結びつけられてきた<sup>1</sup>。ただし、定住化政策を含んだ新興の近代国家による国民統合政策の過程で、遊牧民がそれを自らの就業機会や子供たちの教育機会として積極的に捉えたこともあり、次第に彼らの「遊牧」という生業形態の性格は弱まってきた。また、中東の部族論において既に言及されてきた、2つの異なるガバナンス様態として拮抗や接合を繰り返すという「部族」と「国家」のあり方に関して<sup>2</sup>、シリアという現代中東屈指の権威

主義的体制が敷かれた国においては、例え地方とはいえ「部族」が拮抗するという事態は考えづらい。こうした背景を受けて、今日の住民にとって「部族」がどのような意味、影響力、拘束力をもったものであるのかという点は、改めて確認される必要があると考えられる。

次に、(2) 調査地域の住民が自分たちの所属する「部族」についてどれほどの知識を有しているのかという点である。カビーラ (qabila) やアシーラ (ashira) といった「部族」を表すアラビア語は今日の中東においても「民族」や「家族」などの単語と混同することなく用いられており、分析概念として一定の安定を保っていると言える。遊牧を続けていた「部族」にとって、系譜知識の共有は現在の自分たちやその居住空間を関係づける要因として機能してきた<sup>3</sup>。しかしこうした、本来相伝されるはずの知識は、インターネットや外国語の書物の流通によって必ずしも純粋なものではなくなってきているのが今日の実況である。場所は異なるが、英語で書かれた第三国のある概説書の内容を念頭に地元住民にインタビューした外国人研究者の質問に対して、インフォーマントが全く同じ概説書をその場に持参し、それを参考に回答するという状況を仄聞したことがある。本稿の調査対象地域ではシリア国内の中でもインターネットのインフラが途上にある場所だが、それでも同地域を管轄するラッカ県の県庁所在地であるラッカ市には首都ダマスカスからの官吏が勤務していることや、またシリア第二の都市であるアレppoとそう遠くない距離に位置することから、そうした自文化についての外部からの情報流入とそれに伴う知識体系の変容から自由なわけではないと考えるのが普通ではないか。中東地域における「自文化の客体化」による文化の再創造の状況は、人類学のトレーニングを積んでいるか否かにかかわらず多くの現地調査者が今日経験するものであろう<sup>4</sup>。そうした点を念頭において調査対象地域での聞き取りを行なうことで、自「部族」に関する知識が現代においてどのように保有されているかに着目する必要があると考える。

そして最後に、(3) 調査地域において聞き取りを中心としてどのように当該調査を行なうことができるのかという点である。今日のシリアを調査対象地域あるいは留学先とする人文社会科学の研究者の出入りを概観すると、考古学と歴史学がその大半を占めているように思われる。考古学と歴史学が活躍するのは近隣国を含めた中東地域全体にある程度見られる傾向と言えるが、シリアの場合に付言されるべきは、「現代」を調査対象とした研究者の出入りが少ないことである。このことは、とくに地方において外国人がインタビューを始めとする各種の社会調査的活動に従事することに対して警戒の目が向けられるという現代シリアの事情に起因しており、近年は現代政治史および政治動向分析を中心とした研究が本邦で増加しているが、それらも大部分は資料分析を主たる方法とし、また都市部を中心としている。また調査地域であるユーフラテス中流域の持つ独特の背景も指摘されうる。サッダーム・フサイン政権時代のイラク (1979-2003) において迫害されたイスラーム・シーア派のイラク難民がシリアに流入し、ダマスカス南部郊外に集住していることは比較的知られているが、2003年からのアメリカ合衆国によるイラク攻撃はシリアへのイラク難民の流入を加速させた。そしてダイル・アッザウル (デリゾール) 県を中心とした、イラクと国境を共有するユーフラテス川 (のシリア国内) 上流域はイラク難民の不法入国の温床の一つとされ、同地域での緊張は近年高まっている。そうした中、考古学の踏査を中心とした本特定領域の一環で行なわれる同地域の農村集落での聞き取り調査に対し、考古庁を中心としたシリア当局の協力体制がどこまで得られるかについて調査前にはあまり見当がつかなかった。以上の状況を受けて、筆者は今日のシリアの地方農村の集落においてどの程度までの聞き取り調査が可能であるのか、また当局とインフォーマントと調査者である筆者との間に、有益な聞き取り調査を目的としてどのような関係を構築することができるのかという点に、筆者は自ずと関心を覚えた。以上の3つの問題意識は、冒頭の3つの公募研究班全体の目的に

必ずしも直接に貢献するわけではないが、手法の点から本研究の継続・進展の可能性を示すことに少なからず関係することが期待される。

本節以降、本稿の構成は以下の通りである。まず第2節において本稿は、筆者が行なった調査の大まかな内容を説明する。ここではとくに先述した筆者の問題意識(3)に関連して、筆者の調査の体制についても詳細を述べる。次に第3節において本稿は、調査の具体的な内容、つまり聞き取りの結果について詳細を記す。ここでは各村の基礎的な情報を整理しつつ、とくに先述した筆者の問題意識(1)と(2)について考察を行なうための情報を選択し、提示する。そして最後、第4節において本稿は、先述した筆者の問題意識(1)から(3)について聞き取り調査の結果から考察を行ない、公募研究班の中で本調査がどのように位置付けられるのかについて見通しを立てる。

## 2. 調査の概要

本節では調査の概要を説明する。

### (1) 調査期間

本調査の期間は以下の通りである。

・調査期間：2008年10月13日(月)～18日(土)

筆者は9日(木)にラッカ市に到着し、11日(土)までの間は市内を散策した。市内の中心部は徒歩で2-3時間も歩けば十分な程度の大きさであり、目抜き通りの真ん中に位置する広場(「時計広場」)から東には2kmほど商店街が続く。広場から南へ進んだ南北の通りに設けられたスーク(市場)では主に野菜、果物、パン、揚げ菓子が販売されているが、東に延びる商店街では調理器具や衣類などの生活用品、また農作業のための用具や家畜に用いる用具(ロバ用の鞍や羊用の鈴など)などを扱う店が多く見られた他、木材工場も幾つか確認できた。道路は土のまま舗装されておらず、かなりの悪路ではあるが人や自転車、自動二輪車や自動車の往来はかなり激しく、賑やかな通りである。

外国人である筆者に対しての行き交う人々の興味はかなり強いものであり、筆者が「ダマスカスにはなくてラッカにあるものと言えど何だろうか?」と通行人に尋ねると、彼は少し考えた後に「…『羊』かな」と答えた。商店街の東の端が見えてくる辺りになると、羊の皮革・毛皮製品を取り扱う店が3、4軒集まっている。それらの店は半分が工房を中心に、もう半分が販売を中心にしており、販売を中心とする店は工房で作られた製品を買い取り、販売しているとのことであった。工房で皮革・毛皮の仕入れ先を尋ねてみると、「遊牧民(ベドウィン、badawi)から買っている」という。それによると、ラッカ周辺に住む遊牧民が時々ラッカを訪れて羊の皮やミルク、チーズなどを町で販売し、そのお金で生活用品や食料などを購入しているという。ラッカ市内の中心部から北西部にタクシーで15分ほど移動した場所に位置するマーガフ(Maghah)と呼ばれる羊専門の市場は、ラッカ市民と周辺遊牧民との商売を通じた定期的な交流の場となっている。

休日が明けて12日(日)になると第7次調査隊隊長である大沼克彦氏を含む調査隊全員でラッカ市内の博物館を訪れ、本調査における当局側の責任者を紹介される。なお調査期間中の17日(金)は休日のため調査を行わずラッカ市内に滞在した。



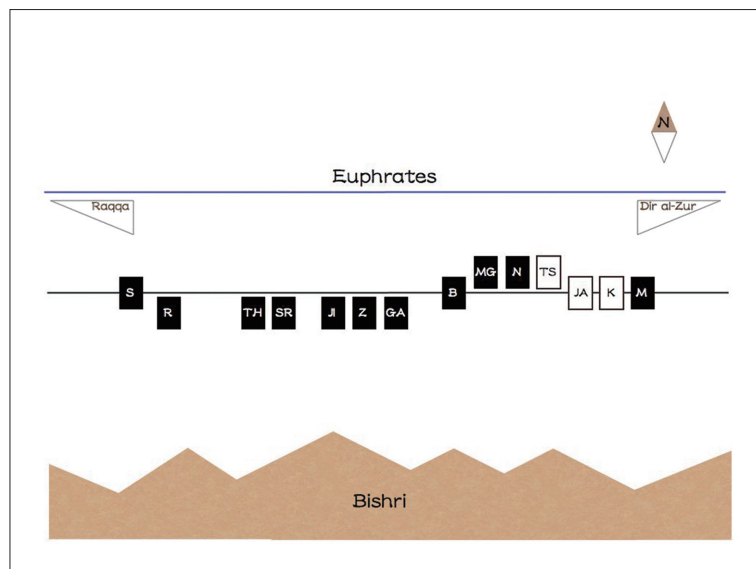
※羊毛製品を販売する商店（写真左）と市場から綿花を運ぶ商人（写真右）

## (2) 調査地

本調査の場所は以下の通りである。

- ・調査地：シリア・アラブ共和国ラッカ県ガーニム・アル＝アリー村周辺

調査地には、宿泊しているラッカ県の県庁所在地であるラッカ市内のホテルから小型ワゴン車（セルビス）で移動した。調査地域の範囲はラッカからダイル・アッザウルまでの東西の間にある、ビシュリ山系の北側、ユーフラテス川中流域の南北に集まった14の村である。中心となるガーニム・アル＝アリー村を含め、以降調査対象の各村を以下のように記す。



なお、上の図に記したのは調査対象地域の全ての村であり、実際に訪れ、聞き取り調査を行なったのはガーニム・アル＝アリー(GA)村を中心とした西方7つと東方4つの村、黒色で塗りつぶした合計11の村である。全ての村を訪れなかった理由は何よりも調査期間全体の短さによるものだが、運転や通訳補助といった調査協力を行なってくれた現地協力者が、幾つかの村を訪れることに関しては避けたがったという理由もある。その事情については次項で述べる。

### (3) 調査体制

本調査は以下のような形で行なわれた。まず筆者は、大沼克彦氏を隊長とする考古学調査班とともにガーニム・アル＝アリー村に8時00分から8時30分の間に到着し、その後考古学調査班が各踏査地に赴いた後、運転を務めてくれた現地協力者と通訳補助を務めてくれた現地協力者、そして筆者の、最大3名で村内をまわった。筆者の調査に関する現地協力者の内訳に関しては以下の通りである。

O氏：セルビスの運転を務めてくれた人物、S村育ち

P氏：通訳補助を務めてくれた人物、ラッカ育ち

Q氏：通訳補助を務めてくれた人物、ダマスカス大学で考古学を学んだ後、ラッカの博物館の長として赴任

P氏とQ氏は不定期に交代して通訳補助に努めてくれ、聞き取り調査は「筆者+O氏+P氏あるいはQ氏」という3人体制で進められるのが基本であった。なお通訳補助といってもP氏とQ氏では少し役割が異なり、英語によるある程度の会話が可能なP氏は聞き取り調査の際にインフォーマントが話す方言の混じったアラビア語を筆者が理解できなかった際に筆者に英語で通訳を試みてくれた。一方で英語による会話が可能ではないQ氏は方言の混じったアラビア語を標準に近いアラビア語で通訳を試みてくれた。とはいっても、P氏あるいはQ氏が考古学調査班に同行することもしばしばあり、その際はO氏が標準に近いアラビア語で筆者に通訳の補助を試みてくれた。したがって聞き取り調査はしばしば「筆者—O氏」の2人体制で進められた。

しかし筆者あるいは本調査にとってのP氏とQ氏の二人の通訳補助者の差異は以上のような語学運用に関する問題に限らなかった。地元官吏の口利きをきっかけに調査班に加わったP氏と中央からの派遣官吏であるQ氏の違いの一つは、聞き取りの際の筆者の「思いつき」を許すか許さないかという点にしばしば見られた。ガーニム・アル＝アリー村周辺での調査を始める前日、12日（日）に考古庁を訪れた際に調査班は聞き取り調査の質問項目などを確認したが、同庁に所属していないP氏がそこで確認をとっていない質問や世間話を筆者が聞き取り調査の際にすることに対して寛容というか、むしろ無関心であったのに対して、同庁の責任者であるQ氏は12日（日）に確認をしたこと以外の話題を筆者がインフォーマントと話すことを訝しがった感がある。「次に〇〇について聞きたいので、伏線として今△△について尋ねているのだ」というふうに筆者が事後説明をすると大概納得してくれるのだが、その説明を省くと「何故その話題に触れるのか?」、「その質問は今回の調査とは関係ないのではないか?」と筆者を牽制することもしばしばあった。もちろん、Q氏はP氏よりも本調査の目的をしっかりと意識してくれているのだというふうに考えると大変有り難い存在であり、以上の点はP氏とQ氏のいずれが現地協力者として望ましいかという判断をするためのものではない。

またO氏に関して言えば、彼はS村の出身であり、調査地域の土地勘についても非常に強いため、移動中の世間話の中でも興味深い話を幾つかしてくれる存在であった。P氏とQ氏のいずれもが筆者と同行しない時には、積極的とまでは言えなくとも筆者の聞き取り調査に協力を試みてくれ、時には地元のネットワークを使って聞き取り調査がスムーズになるべく尽力してくれた。

ところで3人の現地協力者に終始共通して言えた点は、筆者の聞き取り調査の同行を少しでも早く終了させて、考古学班と合流したがるということであった。第7次調査隊の隊長が大沼氏であり、そして本調

査隊の本流が考古学班であると認識していた彼らにとっては、若輩の筆者が一人で行なう聞き取り調査に同行することにはどうも「貧乏くじ」を引いたような印象を覚えたらしく、考古学班の一日の作業が終了する時刻が近づくと、「大沼氏がもう作業を終えているかもしれない」と言い、合流地に戻らねばならないと筆者を急かすことがしばしばあった。実際にはかなり早い時刻に踏査現場で考古学班と合流し、何をするわけでもなく考古学班の作業が終了するのを待っていたこともある。

そうした様々な思惑が混じっていた体制ではあったが、現地協力者に同行してもらったことが有益だと筆者が思えた点は、3人それぞれが筆者の認識や推考にそれぞれの期待を持っていた様子が窺えたということであった。少し大雑把な言い方をすると、O氏は調査地を故郷とする地元出身の立場から、P氏は調査地を「郊外」とする「都市」(ラッカ)出身の立場から、そしてQ氏は調査地を「地方農村部」とする「中央」(ダマスカス)の立場あるいは「国家」(シリア・アラブ共和国)の立場から、聞き取りの結果によって筆者が調査地にどのような印象を抱くかそれぞれ異なる期待を寄せていた様子を感じ取ることができた。

#### (4) 聞き取り調査の項目

聞き取り調査の項目は以下を基本とする。

- ・村の名前、人口
- ・村を構成する部族の名前とその系譜
- ・村を構成する部族の歴史(村の成立史)
- ・村の生業についての基本情報(農業と牧畜の割合、家畜の種類と数など)

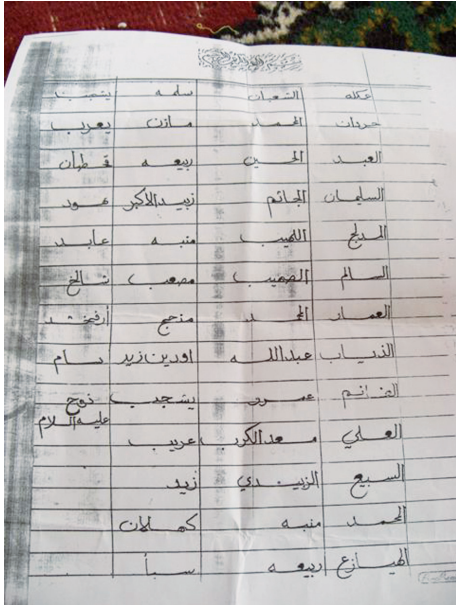
また、インフォーマントは各村で「ムフタル(Mukhtar)」と呼ばれる人物である。ムフタルは壮年以上の男性が務める行政職であるが、村では長老としての役割を持っていることもあり、本稿では便宜的にムフタルを以下、「長老」と言い表す。またムフタルは一つの村に複数居る場合もあるが、今回の調査では概ね一名であり、その人物特定はそう難しくなかった。とはいえ実際のインタビューの際にはその長老の家族や村役場の官吏が加わるなどして、多くの村民が集まることもしばしばあった。村役場の官吏が加わる場合には彼が長老の発言を牽制することもあったが、上記の項目についての聞き取り自体を拒まれることはなかった。なおインフォーマントの名前(アルファベット表記)の後の丸括弧の中に記載されている年齢は、全てインフォーマントの自己申告によるものである。

### 3. 聞き取り調査の結果について

本節では聞き取り調査の結果を村別に紹介する。紹介する村の順番は調査の時系列に沿っており、またインフォーマントの表記については村名のアルファベット表記を小文字にして対応させている。インフォーマントが複数の場合は、表記の後に算用数字をつけて区別する(GA村:ga氏、ga2氏・・・)。

#### (1) ガーニム・アル=アリー村

ガーニム・アル=アリー村は本調査の対象地域における東西の中間に位置し、地域の中では比較的大きな村だと言える。ガーニム・アル=アリー村では長老に会う前にガーニム・アル=アリー村に至近のテルの管理を務めているX氏から、現在の長老の家系へと至る村の家族系図を見せてもらった。これによる



とガーニム・アル=アリー村の起源となる家系は聖書の箱舟で有名なノア (Nuh) を長とするものであり<sup>5</sup>、そこから48代目の者が今日の長老の家系である。この系図のコピー (写真) を X 氏に渡した人物は他ならぬ今日の長老、即ち ga 氏であった。

ga 氏 (80 歳) によると、ガーニム・アル=アリー村の人口は約 8,000 人で、現在の村の部族の名前はブー・スピーウ (Bu al-Subi<sup>6</sup>、スピーウの子孫) だという。スピーウは家系図でいうと 38 代目、つまり ga 氏の 10 代前の家族であり、それは更に 3 代前 (つまり家系図の 35 代目) のシャアバーン (al-Sha'ban) 家から派生したものであることが強調される。しかしそれよりも重要なのが、父系出自という意味での直接の祖である家系、つまりブー・スピーウの起源である。それは家系図の 19 代目、つまり ga 氏から遡ること 29 代前にあ

たる、ズバイド (Zubayd) である<sup>6</sup>。彼は 3 世紀ほど前にイエメンに住んでいた人物とされ、そのズバイドという名前はイエメンにあるワーディー・ズバイド (wadi Zubayd) に由来する。彼は水資源を求めて息子たちとともにワーディー・ズバイドを去り、その後イラクのハッダージュ、続いてダウリーンに移り住んだ。その後彼らはより広い流域を求めてユーフラテス川を西進し、系図で言うところと今から 14 代前、つまりズバイドの 16 代後のシャアバーンの時に現在の場所で定住を始めたという<sup>7</sup>。

それでは、現在の村名である GA という名前はどこから来ているのか。その点については長老とは呼ばれていないが村の長老格である ga2 氏 (75 歳) と ga3 氏 (55 歳) から似通った聞くことができた。それによると、系図の 38 代目にあたる先述のスピーウの 3 人の孫、ハマド (Hamad)、ガーニム (Ghanim)、ムハンマド (Muhammad) の内、次男であるガーニム・アリーがその直接の由来であるという。系図ではスピーウの後にアリー ('Ali)、そしてその後にガーニムが名を連ねており、その後はガーニムの彼の五男であるズィヤブ (Ziyab) へと続いている。なおスピーウの孫の内、長男ハマドに関しては情報を得られなかったが、ga2 氏によると三男のムハンマドの子孫は JI 村、SH 村、MG 村などに分散して住んでいるとのことである。

さて、ga 氏は今日のガーニム・アル=アリー村にベドウィン、つまり遊牧民はいないと述べるが、村の生業について一番多くを語ってくれたのはやや若い ga4 氏 (47 歳) であった。それによると、この 50-100 年間くらいにガーニム・アル=アリー村において遊牧民 (badawi) と農民 (rifi) との区別が設けられたという。今日の村の部族構成の中心となるブー・スピーウは、50-100 年以上前の時点までは生業を牧畜業に依存していたが、それ以降今日に至るまでは農業に依存した生活を送っている。ここで注目したいのは、ブー・スピーウにとっての遊牧民と農民との区別の感覚が、200 年程度前と推測できるシャアバーンの時代の定住化にはなく、一つに牧畜と農耕との間の依存度のバランスの変化によって生まれたと考えられることである。勿論後述する他の村の例に見られたように、この 50-100 年間で同時に農業技術の向上の時期にあったことを考えると、その区別の誕生の背景は一樣ではないだろう。しかしそれでもこの点は、現在のブー・スピーウにとっての部族についての理解の一部を示すものと言える。

今日のガーニム・アル=アリー村では全ての世帯が農地を持っており、それは自給用であると同時に商



売のための作物生産を目的としている。一方で家畜は全く所有していない世帯もあり、また所有していてもそれらの数は多くなく、乳製品の生産は自給用に留まっている。それでは家畜を所有していない世帯は乳製品をどこで調達するのか。各世帯にとって家畜は自給用のためであるので、ご近所にとはいえども販売するほどの量の乳製品を所有しているわけではない。したがって家畜を持たない世帯は、大量に乳製品が必要な際はラッカまで足をのばし、そこで調達する。家畜の数と種類はおおよそ一世帯あたり羊あるいは山羊が10-20頭、鶏が5-10頭、また一部の世帯ではロバが1-2頭、といった具合である。ビシュリ山系奥地にいる遊牧民は1,000-2,000頭の羊を所有していると言われており、その数は比較にならないほど離れている。

## (2) Z村

z氏(68歳)によると、Z村の人口は約12,000人で、現在の村の部族の名前はシャンマール(qabila Shammar)である。彼らの起源はサウディ・アラビアのナジュド(アラビア半島中央部広域を指す)にあったが、彼らのほとんどが水、畑、家畜などをわずかしかなかったため、約400年前にそれらを求めてテントとともに移住を開始した。初期に定住したのはイラク北部のシンジャールであり、そこで現在のZ村の部族名の由来となるシャンマールという家族が現れる。その後シャンマールの孫であるワハブ(Wahab)とファッダーガ(Faddagha)が、シャンマールを共通の祖先とした2大家系(アシーラ)として頭角を現し、その内ワハブの一族の一部が更に西進しビシュリ山系付近に到着したという<sup>8</sup>。そして彼らは今のガーニム・アル=アリー村との境にあるワーディーの周辺でユーフラテス川や羊を見つけ、そこで定住を開始した。つまり彼らはガーニム・アル=アリー村の場合と同様にアラビア半島を北上し、イラクを経由して現在の場所へ西進してきたのであるが、ガーニム・アル=アリー村の場合はユーフラテス川沿いの移住であったのに対して、Z村の場合はむしろビシュリ山系側、即ちユーフラテス川の南部の砂漠を西進し、ビシュリ山系に到着した後でユーフラテス川と「合流」したということである。移住の間、彼らはわずかな数の家畜とともにテントでの遊牧生活を続けており、300年前に現在の場所に到着して以降、初めて家屋を建て、農地を所有した。したがってz氏はここ一帯ではZ村だけが「遊牧民」であると述べている。

なお300年前に現在の土地に到着してから、ワハブは3つの家系に分かれた。Z村の村名であるZ、後に一部がアレppo付近へと移ったバーブ(Bab)、そして後にラッカの南方に移ったリサーファ(Risafa)である。リサーファは今日も完全に遊牧民として生活しているといい、農地を所有せずにテントで暮らし、ラッカに時々家畜や乳製品を売りに訪れるという。

現在のZ村の人口約12,000人の内、約3,500人はバーブであり、また4,000人がリサーファだという。今日では全ての住民が農地と羊を中心とした家畜を所有しているが、家畜は一世帯で3-5匹程度であり、自給用である。そのためガーニム・アル=アリー村と同様、商業的農業と自給用牧畜業といった形態を取っている。

## (3) JI村

筆者がji氏(57歳)宅を尋ねた際、ji氏はちょうど農作業から帰ってきたところであった。ji氏によるとJI村は人口約3,000人とこれまでに比べると小規模な村であり、ガーニム・アル=アリー村と家系を同じくするブー・シャアバーンの一族だという。彼によるとブー・シャアバーンの起源はイスラームの布教

(7世紀前半)以前からイエメンのワーディー・ズバイドに住んでいた部族であり、その地名から彼らはズバイディー (Zubaydi、ズバイドの人々) と呼ばれていたという。その起源はガーニム・アル＝アリー村の家系図にも19代目の族長として現れるズバイドであり、その本名をムアード・ブン・ヤクラブ (Mu'ad bn Yakrab) という<sup>9</sup>。時期は不明だが、ズバイドはイエメンのワーディー・ズバイドから家族とともにまずサウディ・アラビアのタイマへと移り住んだ。タイマではジブリール (Jablil)、ジャービル (Jabil)、ジュブール (Jubur) という彼の3人の息子がそれぞれ家族を作ったが、その内次男のジャービルの家系が、ブー・シャアバーンやブー・スピーウにつながる周辺部族の直系だという。そしてその部族の移住史はこれまでの2つの例とは異なり、サウディ・アラビアの後にイラクを経由せずに北上したというものである。タイマで3人の息子が家庭内で仲違いが起きたことが原因で、まずは長男のジブリールがラッカから西へ100kmほど進んだアレppo近郊に移り住んだという。移り住んだ先の地名は不明だが、今はかれの名前に因んでジブリールと呼ばれているという。なおこの移住はイスラームの布教以前の話であり、ジブリールは当時のアレppo近郊に存在していた王国で家族とともに定住を開始した。ここで突然、物語的な経緯が加わるのだが、その王国の当時の王が長男ジブリールの娘との結婚を希望したのだという。娘とジブリールはそれを嫌がり、他の娘の一人がサウディ・アラビアに残っている次男ジャービルに手紙を送った<sup>10</sup>。手紙には自分たちが今シリアで非常に困った状態にあることが記載されており、それを知ったジャービルはシリアに来てその王を殺したのだという。三男ジュブールは後からそれについて知り、「自分がその王を殺したかった。なぜ自分に手紙をよこさなかったのか」と兄たちに対して腹を立てた。ジュブールとその家族はその後シリア北東のハサカ (ハッサケ) に移り住み、その内の半分が後にイラクへと移り住んだ。それは今日に至るまでイラクではかなり大きな部族として残っているという。そして王を殺したジャービルは今のII村付近へと移り住み、家族は次第に大きくなって、シャアバーンもその中に含まれる。したがって今日この近辺に住んでいる人々は全ていと同土であるのだという。ji氏によれば、今のII村の人々のほとんどはブー・シャアバーンであるが、それ以前にはアシーラ・ジャービルと呼ばれうるのだという。

さて、今日のII村の生業は、これまでと同様に農業への依存度が強い。つまり住民の皆が広い農地を所有しており、家畜に関しては所有していない人もおり、所有しているとしても自給を賄う程度の少数である。農産物に関してはラッカや役所に販売することもあり、逆に乳製品に関してはハサカからきた遊牧民から買ったり、またラッカの市場で遊牧民から買ったりしているという。遊牧民に対しては、彼らの家畜のための飼料を売っている。そのため彼らは「農民」だという自意識しか持っておらず、かつては「遊牧民」だったというような言い方もしない。II村が今の場所に移住した時期やその生業形態がどのような変遷を経てきたのかについては不明瞭な点が多いが、ji氏によれば彼らの祖先が今の場所に到着した際はガーニム・アル＝アリー村やZ村はなかったという。彼によるとこの土地に最初に着いたのはシャアバーンの祖父とされるスピーウであり<sup>11</sup>、おおよそ200年間くらいの話だと推察できるが、そうなる则彼らの歴史のほとんどはアレppo近郊ということになる。そうだとすると、II村の部族はこれまでの例と異なり、イスラームの布教以前に移住したアレppoに在住していた時点で既に農業を生業の中心としていたのか、あるいはそもそもそうであったのかとも考えられる。

なお余談めいた話であるが、ji氏は周辺地域では珍しく馬を所有していた。しかしそれはあくまで「趣味」で血統書付きの馬を購入した、とのことであり、労働力としての家畜ではない。II村はこれまでの村と比べると人口は少ないが、その分一世帯が所有する農地が広く、裕福であると言われている。

#### (4) SR 村

SR 村では残念ながら村の移住史が伝え残されておらず、200 年前に現在の場所で定住を開始してからの歴史に関する情報しか得ることができなかった。sr 氏（58 歳）によると SR 村の人口は約 6,000 人／170 世帯であり、自分たちの部族はブー・シャアバーンだという。SR 村の部族は 200 年前の定住期から農地を所有しており、sr 氏曰く「Z 村は遊牧民だが、自分たちは農民だ」とのことである。SR 村の住民はこれまでの村同様に皆が農地を所有しており、家畜もまたほとんどの世帯が所有している。各世帯が所有する家畜の数は比較的多く、例えば羊に関しては一世帯で 25-500 匹を所有しているという。遊牧民との関係は II 村と全く同じであり、自給用の家畜を所有しているので彼らとは家畜飼料の販売や稀に乳製品の購入を通して接触する機会がある。逆に言うとして食用としては家畜を所有していなくてもそれほど問題にはならないといった感じで、sr 氏自身も昨年に農産品の不作が原因で所有していた 10 匹の羊の全てを売り払ったとのことである<sup>12</sup>。

#### (5) TH 村

TH 村は調査地域、ラッカとダイル・アッザウルとの間で最も賑わった村であり、衣類や食料品を取り扱う多くの商店が立ち並び、ユーフラテス川中流域を往来する人にとっての中継地点となっている。この村では今回の調査で唯一、「長老は誰か？」と尋ねてみても何人かから「知らない」という返事が返され、少し迷ったあげくに行き着いた長老である th 氏（90 歳）によると、TH 村の人口は不明であり、村の成立の歴史も明らかではないという。村を成立させた部族の名前はブー・シャアバーンであるが、この村自体はジャズイーラ地方やトルコ、サウディ・アラビア、ヨルダン、レバノンからの多くの移住者によって作られたため、今日の部族構成や TH 村の名前の由来も不明である。th 氏自身の家族は 100 年前に父がジャズイーラ地方から来たといい、移住当初は現在の場所には数軒の家しかなかったという。

#### (6) S 村

現地協力者の O 氏の故郷である S 村は、TH 村から西へ 5km ほど進んだ場所にある。s 氏（79-80 歳）によると S 村の人口は不明であるが、住民の大部分を構成する部族の名前はブー・ダバシュ（Bu Dabash）だという。その起源は新しく、200-250 年ほど前のダイル・アッザウルだという。それによると、ダイル・アッザウル付近に母を異にする兄トゥルキー（Turki）と弟アリー、兄バダラーン（Badaran）と弟ハーブール（Khabur）という、2 組 4 人の兄弟が住んでいた。ブー・ダバシュの直径はその内のアリーであり、ダバシュとは「多くの羊」を意味するとされる彼の別名である。アリーは現在の S 村の場所に移って定住を開始し、彼の子孫はその後ブー・ダバシュと呼ばれた<sup>13</sup>。S 村の名前はブー・ダバシュに属する人物で 150 年ほど前に亡くなった人物の名前に由来し、現在も S 村に墓があるという。

アリーはその別名の通り多くの羊を所有しており、逆に農地は所有していなかった。現在の S 村の場所に移り住んでからアリーとその子孫は単純な農作業に従事するようになったが、強く農業に依存するようになったのは灌漑設備が向上したこの 50-100 年間ほどの間であり、つまりアリーの後の時代である。そうした歴史によって s 氏はブー・ダバシュが長い間「遊牧民だった」と述べ、その間は貧しい暮らしをしていたと語る。

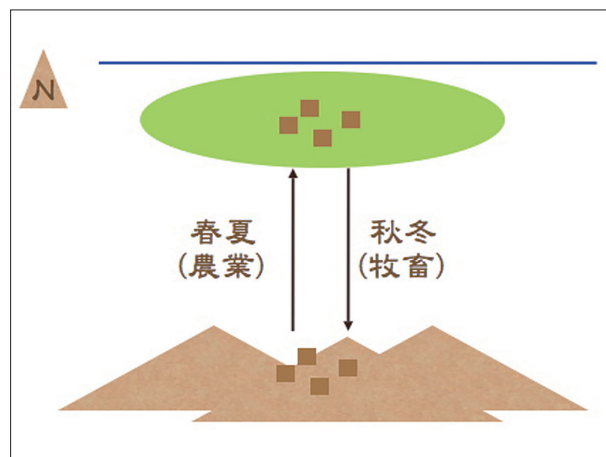
S 村の中には一部 TH 村を起源とする人たちもおり、またその他の一部は R 村を起源としているという。今は全ての人たちが同様の生活をしており、全ての住民が農地を、ほとんどの住民が自給用の家畜を所有

しているというが、先述のようにS村が農業に強く依存するようになったのは周辺の村々と比べて比較的遅くであり、s氏が幼少の頃は農業よりも牧畜業に強く依存していたという。

#### (7) R村

R村はS村の南東に位置しており、調査地域の村の中ではやや南寄り、ビシュリ山系に近い場所にある。r氏によればR村の生活はS村と同じで、彼は自分たちをこの1世紀の間に農業を開始したという理由で「新農民」(rif jadid) だと言いつづ。村の人口は約1,300人と少なく、その起源はイラクのワーディー・ウバイド(wadi 'Ubayd)であり、それによってr氏は村を構成する部族の名前をウバイド('Ashira 'Ubayd)だと述べる<sup>14</sup>。ワーディー・ウバイドからどのような経路で現在のR村の場所に移ったかについては不明瞭だが、「ビシュリ山系の南方50kmほどに位置する砂漠を通して、現在の場所に到着した」(r氏)ということを見ると、Z村同様にユーフラテス川沿いではなく、純粹に遊牧生活を送りながら移住を繰り返してきたのであろうことがうかがえ、「新農民」という自意識の背景とも矛盾しない。

しかし「新農民」とは言っても、R村の住民は農地を所有しておらず、逆に羊を中心とした家畜を皆が10-20匹程度は少なくとも所有している。実は、彼らの農業形態は主に夏の収穫期に農地を借りて農作物を収穫するという小作農であり、それ以外の主に冬(12月から5-6月)の間は、現在の場所より南方に15kmほど進んだビシュリ山系の麓に住んでいるのだという。彼らが収穫期にユーフラテス川流域の農業地帯に住む目的は所有している家畜の飼料を得ること(栽培、収穫、または購入)であり、収穫期を過ぎた後の半年ほどの間はビシュリ山系の麓で遊牧生活に「戻る」<sup>15</sup>。



#### (8) B村

B村はガーニム・アル=アリー村を挟んで東西の反対側に位置する最初の村である。b氏(58歳)によれば村の人口は約20,000人と多く、その内訳は村名の由来になったブー・ハマド(Bu Hamad)という1つの部族(アシーラ)と、マタル(Matar)とサーリム(Salim)という2つの家族だという。しかしアシーラよりも大きいとされることが多い「部族」概念であるカビーラの名前について尋ねると、「我々はブー・シャアバーンではなく、ウバイド(Qabila 'Ubayd)だ」という。ウバイドの起源はイスラームの布教以前のイエメンに遡る。イエメンのハドラマウトに住んでいた彼らの祖先はイラクを経由し、ブー・ハマドの時代に現在の場所に移り住んだ。そのブー・ハマドの祖父がウバイドである。それによるとウバイドはシャアバーンの兄弟であり、その意味でシャアバーンの直系であるガーニム・アル=アリー村とB村とは

部族が異なる、と考えるのである。

ブー・ハマドには5人の息子がおり、上から順番にムハースイド (Muhasid)、ムハーファザ (Muhafada)、アリー、そして順番は分からないがサーリム、マタルと続く。B村を構成するのは最後の2者であるサーリムとマタルの子孫であり、今日ではb氏を含めてそのほとんどがマタルの子孫だという。マタルが生きていたのはイスラームの布教直後だとも言われ、その曾祖父であるウバイドの兄弟であるシャアバーンをガーニム・アル＝アリー村のシャアバーンと照合するのは無理があり、部族「ウバイド」の時代考証は困難である。

ウバイドの生業に関しては、イエメンを出発する際には羊のみを所有して牧畜業に依存するものであったが、イラクに滞在した際には農地を所有したという。それ以降は羊と農地の両方を所有しており、b氏はウバイドが遊牧民ではなく農民であると述べる。今日の生業はこれまでの村同様に商業的農業に強く依存しており、とくに綿花は家畜の飼料にすることもあればラッカの市場で大量に売りさばくこともあるという。農地は住民全員が多く所有しており、同時に住民の皆が自給用の羊を10-15匹程度は少なくとも所有している。また全ての人々が1-2匹の牛を自給用あるいは労働力として所有している。

しかし住民の皆が農地を所有しているにもかかわらず、75%ほどの人がR村と同じ移牧を行なっているのだという<sup>16</sup>。それについて先述の農民としての自意識とは矛盾しないのかと筆者が尋ねたところ、b氏は「(確かに)我々は遊牧民だが」とやや納得しないような表情をする。むしろ筆者の問いかけに見られた「遊牧民か農民か」、という筆者の二者択一的な考え方自体に納得していない様子であった。

なお、B村は調査地域の中でもかなり大きめの村であり、b氏やインタビューの場所に居合わせた彼の近親者は、周辺(ガーニム・アル＝アリー村の東方)の中では最初に定住を開始したのがB村であることや、B村が周辺一帯の中で最も多くのモスクとモスク専属の説教師(ハーティブ、Khatib)やムアズズィン(礼拝を呼びかける人)を擁する村であることを誇りとしていた。b氏自身が自宅の裏にあるモスクの説教師であり、聞き取り中にそうした雑談にも花が咲いた。「昼食をごちそうしたいので他の村での用事が終わって昼になったら戻ってきてほしい」と言ってくれたので後で現地協力者であるO氏、Q氏とともにb氏宅に戻るとb氏の親族が一同に集まっており、遊牧民の最高のもてなしの一つと言われる若い羊の丸焼きを用意してくれた。彼らの対応や食事の会話から窺う限りでは、日本から考古学班を中心とした研究チームがユーフラテス川中流域に滞在し、筆者が調査の一環でB村を訪れたことをある種の表敬訪問のように彼らを感じ取っているようで、それだけに、研究チームの同地域での拠点がガーニム・アル＝アリー村だということを聞くと少し残念そうな表情を見せた。



※昼食として用意された若い羊の丸焼き(写真左)。写真右は通常の昼食。

## (9) MG 村

mg 氏 (55 歳) によると MG 村の人口は約 20,000 人であり、その部族はブー・スピーウである。彼によるとブー・スピーウの起源は時代に関しては不明であるが、イエメンからイラクのウバイド、シリアのハラビーヤ・ザラビーヤ (Halabiyya Zalabiyya) を経由して現在の場所に移ったという。MG 村のブー・スピーウに関してはガーニム・アル＝アリー村の話と系図に限って言えば照合が可能であり、それによるとスピーウの孫の三男、つまりガーニム・アル＝アリー村の直系の祖であったスピーウの孫の次男であるガーニムの弟であるムハンマド・アリー (Muhammad al-'Ali) を MG 村は直系の祖としており、ガーニム・アル＝アリー村とはいとこ同士の関係にあたることになる。アリーには 9 人の息子がおり、それぞれの家族は JI 村や K 村にも移り住んだが、MG 村もその一つとして加えられる。アリーの息子の内、MG 村の直系となるスライマーン・フサイン (Slaiman Husayn) は mg 氏の 16 代前にあたる長老であり、彼は 150-200 年前に逝去したとされる。今日の MG 村の場所に人々が移ったのはアリーがハラビーヤ・サラビーヤで逝去した後としか知られていない。なお、MG 村の名前は過去の部族長あるいは重要人物などではなく、「多くの木々」を意味するアラビア語に由来するという。

さて、ここまで mg 氏と話したところで、突然 mg2 氏 (50 歳) が mg 氏宅に現れた。mg2 氏は MG 村周辺一帯の村役場の官吏であり、「MG 村についての正しい歴史を私が教える」と言ったので、それ以降 mg 氏は全く話さなくなってしまった。mg2 氏の語りは mg 氏、あるいは他の村々の長老の語りとは全く異なり、時にあまりにも史実的で、また時にあまりにも物語的であり、結論から言うと筆者はそれに「教科書的」だという印象を強く覚えた。mg2 氏によれば、紀元前 114 年にイエメンのマアラブ (Ma'arab) で河川が氾濫を起こし、そこに住んでいた MG 村の祖先であるズバイドは北に向かって移住を開始したという。ズバイド自身はサウディ・アラビアの南部に移り住んでまもなくで逝去したが、その後彼を祖とする部族がマッカ (メッカ、Makka) でイスラームの預言者ムハンマドに出会い、そこでイスラームに改宗したという<sup>17</sup>。

その後ズバイドの子孫はイランに移り住んだが、630 年にそこで族長が逝去したこともあり、移住後の生活はあまり上手いかなかった。そこで預言者ムハンマドの 2 代目後継者 (カリフ、Khalifa) であるウマル・ブン・ハッターブ ('Umar bn al-Khattab) がズバイドの子孫たちにイラクの土地 (クーファ、Kufa) を与え、彼らはそこに移り住んだ。その後彼らの子孫の一部がイラクのウバイドに移り住んだが、1516 年にオスマン帝国の支配が同地に及ぶと、彼らの一部は更にトルコに移り住んだという。なおこの時点でズバイドの集団は、ブー・シャアバーンと呼ばれうるものとなっていた。トルコに移り住んだブー・シャアバーンにはシャアバーン自身も居たが、彼は 1520 年に現在のカーミシュリー (カミシリ、Qamishli) 付近にあるアザラ山系 (Jabal 'Azala) で逝去し、その後残されたブー・シャアバーンはテントで生活しながらユーフラテス川沿いを西進し、ハラビーヤ・ザラビーヤを経由して現在の MG 村に辿り着いたという。

また mg2 氏は、ムハンマド・アリー以降の系譜についても修正を行ないつつ述べた。mg2 氏によるとスピーウにはアリー、ハマド、イルシャード (Irshad) の 3 人の息子がおり、その長男のアリーにはムハンマドとガーニムの 2 人の息子がいた。弟のガーニムはその後ガーニム・アル＝アリー村のブー・スピーウへと至る系譜を作っていくが、兄のムハンマドは 7 人の息子がおり、その 6 男であるガツナーム (Ghannam) が後の MG 村を作っていくことになる<sup>18</sup>。そのガツナームには 10 人の息子がおり、MG 村の直系の祖となるのは 6 男のスライマーン (Slaiman) である<sup>19</sup>。つまりそれに倣えば、ムハンマド・アリー、

ガッナム、そしてスライマーンを経由した人々が今の MG 村の人々だということになる。なお MG 村の名前の由来については 850 年にアレppoにあったハムダーニー王国 (Dawla al-Hamdani) の王、サイフ・アッダウラ・ハムダーニー (Sayf al-Dawla Hamdani) がそう名付けたのだという。これは恐らく、9-11 世紀にかけてシリアおよびイラク北部に存在したハムダーニー朝と、その国王アリー (サイフ・アッダウラ、「国家の剣」) のことを指していると思われる。そのような歴史を持つ MG 村の人々を、mg2 氏は「セムの子孫」と言い表した。

さて、今日の MG 村の住民は皆が商業用に農地を持っており、また自給用に羊や牛を所有している。羊を始めとした家畜は現在の場所で定住を開始するよりも前から所有しているが、住民の生業は 16 世紀から今日に至るまで農業に依存したものであり、所有する家畜の数も徐々に減ってきているのだという。

#### (10) N 村

MG 村の mg2 氏によると、MG 村は「大 MG」、そして N 村が「小 MG」と呼ばれるという。確かに人口約 2,000 人の N 村は、n 氏 (50 歳) によると部族とその系図、今日的生活形態などが全て MG 村と一緒にだという。具体的には N 村の情報は、mg 氏と mg2 氏が話してくれた MG 村の情報と大体の点で似通っており、部族の名前はブー・スビーウ、その系図はムハンマド・アリー、ガッナム、そしてスライマーンを経由したものである。そして彼らが農業を開始したのは、初めて農地を所有した約 400 年前からであるが、ただしその場所は現在の場所と同じだという。つまり、農業を開始した時期は MG 村と同じであるが、現在の場所で定住を開始した時期には 200 年前後のずれが生じている。

今日の N 村の生業は、MG 村と同様にバランスのとれた商業的農業と自給的牧畜業によって成り立っている。住民の皆が農地、羊、牛を所有しており、羊と牛の所有数にはそこまでの差がない。70 年ほど前にはラクダも所有していたというが、n 氏によると「牛を所有しているのはガーニム・アル＝アリー村よりも東側の集落の特徴だ」とのことである<sup>20</sup>。またその他に MG 村との類似点としては、わずかではあるが、一部の住民が春に羊を伴ってビシュリ山系周辺にテントを設け、そこに移り住んでいるという。彼らはもちろん N 村に自分たちの家屋や農地を所有しているが、限られた期間に遊牧 (移牧) 生活を送っている。



#### (11) M 村

N 村と M 村の間にある TS、JA、K の 3 つの村は、n 氏および現地協力者の O 氏によると全て「N 村の

一部あるいは完全に同様の状況」だという。言葉通りに受け取るわけではないが、調査期間の都合上、その中であえてN村には含まれなかった、調査地域の東端に位置するM村へと足を運んだ。M村で「長老」として紹介されたのはm氏(37歳)であり、かなり歳の若い人物であったが、これはむしろTH村のように村全体の規模によって歴史の語り部としての「部族長」という立場の特定の人物がいないのではないかと思われた。m氏によればM村の人口は約88,000人と言われ、その部族はB村と同様にイエメンのハドラマウトに住んでいたズバイドを祖とするブー・シャアバーンだという。それによるとズバイドの子孫はイラクのウバイドを経由して800年以上前に現在の場所に着いたという。その当時、現在の場所に到着した子孫たちの長はマアド(Ma'ad)という人物であり、彼の名が現在のM村の名前の由来となっている。

マアドという人物はズバイド(Qabila Zubayd)の子孫であり、シャアバーンの直系にあたる。彼が現在のM村の場所についた時は周辺に村落はなかったが、しかし彼らの部族が農地を所有して農業を開始したのはイラクに住んでいた時である。それによると、彼らはイエメンからサウディ・アラビアに至るまでは農地を所有しておらず、家畜もただ羊だけを所有していた。しかしイラクにおいて農地を所有し、今日では農地と羊を全ての住民が所有し、また一部の住民は牛も所有しているとのことである。家畜の数としては全体的に減少の傾向にあり、農業と牧畜業の依存度のバランスが農業に傾いたのはこの1世紀の間である。m氏によるとイエメン、サウディ・アラビア、イラクの時代は乳製品を周囲に販売するほど家畜の数に余裕があったという。今日ではそのバランスは逆転し、周囲の村々と同様に商業的農業と自給的牧畜業という生業形態をとっている。またm氏によると、「遊牧民」と「農民」の区別は山に住んでいるか畑／農地に住んでいるかが境であり、したがってM村の部族ブー・スビーウは、イラクに住んでいた時から「農民」であると言える。

## (12) ガーニム・アル＝アリー村付近の遊牧民

さて、これまでしばしば「周辺の遊牧民」という存在が現れてきた。インタビューの際にしばしば登場する彼らは、主にビシュリ山系を南に進んだ砂漠地帯に住んでいるという。本調査では残念ながらそれについて多くの知見を得ることはできなかったが、ガーニム・アル＝アリー村の郊外(南東)、ビシュリ山系の麓で遊牧生活を送っている一家のテントを訪れることができた。

一家はガーニム・アル＝アリー村から徒歩で訪れることが可能な場所にテントを構えているがガーニム・アル＝アリー村の住民ではなく、また周辺の村と比べると所有している家畜の数がやや多かった<sup>21</sup>。5男1女と思われる一家の母親は、農地の近くに住んでいるのは家畜の飼料を購入するためだと言い、そのかわりに一家は家畜から生産した乳製品を販売しているという。一家は、これまでの幾つかの村で聞くことができた、家畜飼料と乳製品を交換するという関係にある「周辺の遊牧民」の典型であるが、残念ながら現地協力者のQ氏がこの一家について筆者があれこれと質問するのを嫌がったため、インタビューというほどには会話を続けることはできなかった。なおQ氏が嫌がった理由は、「今回の調査でビシュリ山系付近に住んでいる遊牧民と接触することには許可が出ていない」というものであった。





※一家のテント（写真左）、パン（ホブズ）を作るかまど（写真中）、所有する羊の群れ（写真右）。

### (13) 聞き取り調査の結果の総括

各村、及びそれを形成する各部族の起源と歴史に関しては、概ね似通った内容が各村に口頭で伝承されていることが分かった。祖先が住んでいた場所は概ねアラビア半島南部であり、特にイエメン（ハドラムウトなど）のケースが多い。彼らがイエメンを去ることになった理由は多様であるが、その大半がより豊かな牧草地、水源を求めての移動である。イエメンを出た各部族はサウディ・アラビアやイラクを経由し、その後はユーフラテス川沿いに移住を続け、現在の場所に落ち着いた。部族の起源をサウディ・アラビアやイラク、またダイル・アッザウルとする場合もあったが、いずれも上記の移住経路上であるため、アラビア半島から北進、その後（ユーフラテス川を）西進、という経路はほとんどの村落で共通している。例外はII村であり、起源はイエメンだが、その後サウディ・アラビアから直接今の場所に移り住んでいる。

移住の経緯と同様に、部族の家系も概ね似通っている。家系図に登場する人物（家族）としては、イエメン時代のズバイド、イラク時代のシャアバーン、ウバイドなどが代表的である。今日、各村で自称される部族名の多くは、近縁か遠縁かの違いはあっても、上述の人物を何らかの形で経由した子孫の名前から来ている。そのことを理由に、どの村においても他の村に対して全くの他人であるという強い意識は持っていない。例外はZ村である。同村は、村名の由来であるイラクのシャンマールという人物の子孫であるという強い自覚を持ち、「周辺の村々は全てブー・スビーウであるが、ここだけはシャンマールである」と述べる。また各村の名前の由来に関しては、その部族名に由来するもの（B村、Z村など）、その部族に属する、今の土地に定住した最初の人物名に由来するもの（ガーニム・アル＝アリー村など）、土地の景観などその他に由来するもの（例：「木々豊か」を意味するMG）、の3種類である。

以上のように、その歴史に関しては共通点の多い各村であるが、その移住期に関してはかなりの幅がある。現在の場所に到着した年代だけ見ても、イスラームの布教以前（B村）、800年前（M村）、400年前（N村）、300-200年前（R村、Z村）、200-150年前（ガーニム・アル＝アリー村、MG村）といったように、多様である。勿論、同一の村の定住期に関して異なった見解を聞くこともあれば、部族の系譜上重要な過去の人物に関しても、彼がいつの時代の人物であったかということに関する証言は複数聞くことができる。以上の点については、今回の調査で得られた各村の家系の情報を整理し、より綿密に照らし合わせることで、今後その幾らかを明確にできるかもしれない。

その多くが緑や水を求めて故地を飛び出した各村の部族は、どのような生活をしながら移住を続けてきたのか。シリア、そしてアラビア語の文脈では、人々をその生活形態に基づいて「農民（リーフィー、rifi）」、「遊牧民（バダウィー＝ベドウィン、badawi）」、そして「都市民（ハダリー、hadari）」という3つに大別できる。調査地周辺では農民と遊牧民という区別が用いられ、都市民は存在しない。以下、当該の

2つの分類に関する調査地の住民の意識について整理を試みる。

これまで各村の歴史を「移住」と表してきたが、彼らの多くは、遊牧を行ないながら農業にも携わるといふ、半農半牧の民である。しかしその詳細は、イエメンやサウディ・アラビアに居た時から農業に携わっていたケースもあれば（例：J村）、移住の途中、例えばイラクに居た時に初めて自分の農地を持ったというケースもあり（例：B村）、様々である。とは言っても、イラク到着後、ユーフラテス川沿いに移住を続ける過程で、ほとんどの部族は農地を保有し、生活における農業への依存度を高めていった。そして遅くとも数世紀前までには農業を始め、それに依存する生活を行ってきたことを理由に、彼らの多くは農耕部族としての自覚を持つに至った。逆に、例えばR村では、農業を始めたのがわずか100年前であることから、自分たちを「新農民」と称する。そして「起源」や「伝統」という点では自分たちは「遊牧民」であると述べる。同様にS村でも、農業を開始したのがわずか150年前であることを理由に、自分たちを「遊牧民だった」と述べ、農業に携わる以前と以後の、自分たちの生活や意識における変容を強調する。

R村に関して言えば、他の村とは異なる半農半牧の形態をとっているため、同村をやや特殊なケースと見ることも可能である。R村は今回の調査対象の中では最も住民の数が少ない村であるが、住民の誰も農地を所有していない。しかし住居は保有しており、春から夏にかけてはそこ（今回の調査の時点の、彼らの居住地）で、近隣の村の住民が所有している農地を借り、小作人として農業に携わっている。そして秋から冬にかけては、彼らの直近の故地であるというビシュリ山系に「戻り」、そこで放牧を行なう。なお彼らはビシュリ山系にも住居を所有しており、春から夏にかけてはその住居は空き家になっている。このような、冬期に山へと移り住む移牧形態を、R村では全ての住民がとっている。この生活形態はB村においてもあるが、同村でそのような移牧を行なっているのは住民の75%であり、全てではない。

歴史的に半農半牧を続けてきた彼らにとって、「農民」か「遊牧民」か、という自己規定の別は存在することはするが、その二つは決して矛盾、相容れない関係とはならない。「起源」や「伝統」に基づいた自己規定を語ったZ村の例を除けば、全ての村が「あなた方は農民か？」と尋ねると「そうだ」と答え、「では遊牧民ではないか？」と尋ねると、少し困った顔をする。また、ダマスカスやアレppoのような都市の住民の一部が持っている、遊牧民に対する蔑視を、彼らは全くと言っていいほど持っていない。そして、そんな彼らの全員が、最も適当だと感じる自己規定は、「放牧をしている農民」なのである。

それでは何故「農業をしている遊牧民」ではないのか。以下に調査者の推測を踏まえ、その可能性を列挙してみる。一つに、移牧の例はあっても、彼らは最早遊牧はしていない。更に言えば、これまで彼らの部族が続けてきた数世紀間の移住にしても、概ね彼らはその土地毎で住居を所有し、農業にも携わってきた。従って、彼らにとってその移住は遊牧というよりはむしろ、「引っ越し」の繰り返しと言う方が適当かもしれない。そしてもう一つに、現在、全ての村が、その家計を牧畜業ではなく農業に頼っているという事実がある。遅い村では100年前、それ以外の村は殆どが、イラク移住時、あるいはそれ以降、農業主流の生活形態をこの3-6世紀の間には確立している。確かに、現在に至っても全ての村で、大概の住民が一世帯毎に最少で5匹程度の羊の他、世帯によっては山羊や鶏、また労働補助用に驢馬を所有している。またガーニム・アル＝アリー村の東方の幾つかの村では、同村西方では見られない牛を、羊と同数程度所有している村もある（MG村、B村、M村など）。しかしそれらはいずれも自給用の家畜であり、商業的畜産業は行っていない。商業的農業として行っているものとなると、とうもろこしや綿花栽培に代表される農業のみであり、R村やB村に見られる小作農の場合はあれども、周辺一帯の住民は基本的に農

業に生計を委ねているのである。

ビシュリ山系には今も、土地を持たず、放牧のみで生計を立てている遊牧民が存在する。しかし今回の調査地の住民は概ね自給用の家畜を確保しているため、例えば乳製品の売買を目的とした付き合いをその遊牧民と持つことは無い。遊牧民の側からしても、チーズやミルク、毛皮や肉などの畜産物を売る際は、一度に大量に取引する方が効率も良いので、近くの小村よりはラッカなどの都市を商売相手として好む(現にラッカの市場には、ビシュリ山系の遊牧民が家畜や畜産物を売りに訪れている)。しかし、家畜用の飼料の購入を目的とする場合に限って、彼らはガーニム・アル＝アリー村やJI村を訪れており、調査地の村々とビシュリ山系の遊牧民との接触が見られるという。

#### 4. 調査結果と本稿の問題意識について

前節の最後に取りあげた遊牧民の一家に関して、Q氏が筆者の聞き取りを嫌がった理由を考慮すれば、Q氏の視点では一家が完全に「遊牧民」だということになる。ここで再度、本稿第1節で述べた筆者の問題意識を振り返ってみたい。

- (1) 調査地域の住民にとって「部族」という構成単位がどのような意味を持っているのか
- (2) 調査地域の住民が自分たちの所属する「部族」についてどれほどの知識を有しているのか
- (3) 調査地域において聞き取りを中心としてどのように当該調査を行なうことができるのか

前節の調査結果を踏まえて、上記の問題意識に関連した点を以下に取り上げよう。

##### (1) 「部族」と「村」のガバナンス

まず(1)調査地域の住民にとって「部族」という構成単位がどのような意味を持っているのかに関してだが、各村でのインタビューの中で「部族」という構成単位の持っていた意味を整理したい。まず「部族」は本稿冒頭で述べたように典型的な「遊牧民」の形態の一つであり、「国家」を最終形態とはせず、むしろ国家とは異なるガバナンスの様態の一つであることが指摘されたが、「遊牧」という性格は定住化によって失われている。それによって「部族」がガバナンスの対象とするものはその「部族」に所属する人々というよりはむしろ、その「部族」が多数派となる空間、即ち本調査の場合では「村」にあたる。そして一つの「村」をガバナンスの対象とする今日的「部族」は、上位空間である「(周辺)地域」の中で、他の「部族」が多数派となっている「村」と自分たちの「村」とがどのような関係にあるか、その自他規定を説明するための原理の一つとなっている様子がうかがえる。

これはとくにガーニム・アル＝アリー村以西においてはガーニム・アル＝アリー村を基点として、MG村以東においてはMG村を基点として見られる関係状況であるが、注意しておくべきはその自他規定が一つの「村」あるいは「部族」の、他の「村」あるいは「部族」に対する排他的な姿勢を促すものではない点である。Z村やM村などの例を除けば、多くの場合、村を構成する部族の故地や系譜を周辺の村々と共有しているという点は各村のインタビューの中でインフォーマントによって強調され、村々間に見られるその親近性は概ね好意的に語られる。ただそうは言っても、その好意の源泉は交流や結束といった今日の具体的な何かではなく、むしろ「過去」を共有することを通じた時間軸とでも言えるものである。

## (2) 職種としての「遊牧民」

続いて(2) 調査地域の住民が自分たちの所属する「部族」についてどれほどの知識を有しているのかに関してだが、前述した「過去」を共有することがまさに自分たちの部族についての知識の量や確かさと密接に関係していると言える。そして先述したように、各村の住民にとっては「遊牧」という性格を失った今もなおその共有が彼らの時間と空間を関係づける機能を果たしている。あるいは定住化し、行政区分としての「村」というガバナンスの様態を受け入れているから今日であるからこそ、そうした機能が明瞭なものとなっていると言えるかもしれない。

そうした中、各村であまり共有されていないのが、「遊牧民」についての理解である。元来、遊牧民は部族組織を概ね有するが、「遊牧民であるかどうか」という発想は先述した「遊牧民」、「農民」、「都市民」といった3つの区分に後続することが前提となっており、各村のインフォーマントにもほとんどの場合、その区分が共有されている。調査地域は「都市」と見なされていないため、ここではとくに「遊牧民」か「農民」か、という区分が重要になる。調査地域で「遊牧民」、つまり「ベドウィン」であるかどうかという一つの大きな基準は、聞き取り調査の結果から分かるように、住民＝部族＝村の生業形態のバランスにあった。つまり「牧畜業と農業のどちらに強く依存しているか」、更に具体的に言えば「牧畜業と農業のどちらが商業目的で、どちらが自給目的か」という点に、住民が「遊牧民」であるか「農民」であるかという境目があつた。ここから分かる彼らの「遊牧民」概念の特徴は、一つはその基準が「遊牧を行なうこと」よりはむしろ「商業的牧畜業を行なうこと」にあるという、定住生活を前提とした今日的な理解の上に成り立っているという点である。そしてそのことによって導き出されるもう一つの特徴は、依存度の強弱バランスの変化によって一つの部族が「遊牧民」から「農民」へと移行してきた歴史を通して、牧畜業に従事する任意の部族Xを含む「遊牧民」が、任意の部族Xの選択可能な生業形態として現れている、つまり「遊牧民」は「部族」に後続する概念となっているという点である。例えばR村の「新農民」やS村の「遊牧民だった」といったような、今日農民であることを自称する旨の発言は、「遊牧民である」ということが自分たちの「部族」を拘束するものではなく、むしろ柔軟に変化する自分たちの生活形態の選択肢の一つであることを示唆している。その意味で調査地は、「部族」という遊牧民の特徴を有する農耕民である、と言えよう。

ただし注意しておきたいのは、その「遊牧民」から「農民」への移行を、彼らが必ずしも進化的なものとは捉えていない点である。とくに都市部における「遊牧民」即ち「ベドウィン」への視線はしばしば非常に強い蔑視を伴っており、そのことは遊牧民自身を含め広く知られていた傾向である。しかし水資源や農地を求めてその多くがユーフラテス川沿いに移住してきた彼らにとっては、農業への依存度を高めるのはむしろ自然な変化であったと言え、「遊牧民であった」過去を振り返った際に自分たちの生業の変化を否定はしないものの、かといってとくに前向きに捉えているわけではない。また何よりも、「遊牧民」から「農民」への移行はその上位概念である彼らの「部族」やその集団意識の根幹に関わるものではなく、あくまでも生活形態が「牧畜業」から「農業」へと「変わった」に過ぎないのだとも言える。

## (3) 「遊牧民」概念の変容と現代シリア

そして最後に(3) 調査地域において聞き取りを中心としてどのように当該調査を行なうことができるのかに関してだが、恐らくその「遊牧民」概念の変化、つまり歴史を遡って「部族」を包含してきたものとしての概念から、今日の「部族」の生業形態をリアルに浮かび上がらせるものとしての概念への変化は、

本調査において現地協力を仰ぐにあたって一つの逆風になっていたのではないかと筆者は考える。「部族」事情について聞き取りを行なうことは、調査地域の住民の悠久の歴史について知解を得るという性格だけではなく、今日のシリアの地方・農村の職業に関する統計調査としての性格を結果として強く備えることになり、そのことが本調査に「現代シリア社会」を対象とするという特徴を強く備えさせた。「現代」を対象としてシリアでインタビューを含めた調査を行なうことの難しさについては冒頭で触れたが、現地協力者、とくに考古庁の官吏であるQ氏が筆者の「現役」の遊牧民との接触を避けたがったことには、歴史的「部族」の分布が社会的「職業層」の分布と無関係ではない点にあるように思われた。そうしたQ氏の現地協力者としての特徴は、他の現地協力者であるO氏とP氏が以上の点にそう頓着していなかったことによっても浮かび上がっていた。

とは言っても、今日の状況についての情報を聞き取るという作業は最初のガーニム・アル＝アリー村でのインタビューから行なっていたことであり、逆に言えば「元遊牧民」で現在「農民」である住民との接触に関しては、本調査は概ね問題なく行なえたと言える。Q氏が筆者の聞き取り項目やインフォーマントとのやりとりをやや神経質になってきたのは本調査の後半であることも併せて考えると、先述したような「部族」事情についての聞き取りが現代シリア社会の事情を浮かび上がらせるということには、Q氏自身も筆者と同じく調査を進めていく過程で気付いていったのではないだろうか。

#### (4) 公募研究班全体との関係

以上のように、筆者は本調査の結果に基づいて従来の「部族」概念と比べた場合の幾つかの特徴を述べた。公募研究班の研究目的の達成に関連するものとしては、本稿は以下の点を挙げておく。

まず(1) 父系出自を基盤とするアラブ系「部族」の原理的一貫性に関してだが、「遊牧民」ではなく「農民」だとは言っても、調査地域の住民が所有している系譜、出自についての知識は、通常の農民では考えられないほど高い場合もあった。したがって彼らの生業形態や「遊牧民」という概念あるいは意識の変化にかかわらず、「部族」についての理解は父系出自を基盤として継承されているという点においては、その一貫性を傍証することができた。

続いて(2) 原理の様々な形での活用によるアラブ系「部族」の形態的柔軟性(地域による多様なあり方と、時代による多様なあり方の双方を含む)に関してだが、形態的柔軟性はまさに本稿が調査結果を元に取り扱ってきた主要な論点の一つだと言えよう。地域性に関しては、調査地域の村、部族が部分的に系譜を共有していたという点でそう多様性をもったものとは言えないかもしれないが、共有している系譜の歴史の中に時間軸のずれが見られることによって、各部族が今日備えている「遊牧民」や「農民」といった意識についての、時代による形態的变化を確認することができた。

そして(3) 部族が機能する現実の場における組織的側面とネットワーク的側面の相補性に関してだが、この問題については「部族」意識の持つ自我意識の関係づけという機能が今日において確認できるということを筆者は述べた。一つの村での調査に多くの時間を割けなかったという点においては、その組織的側面とネットワーク的側面が相補性という意味ではどのような影響、効果をもたらすかは不明瞭な点が多いが、それらがユーフラテス中流域、ビシュリ山系北部という地域の中で、少なくとも肯定的に捉えられている様子が窺えた。

最後に、人類学と歴史学との共同による「部族」概念の洗練に関してだが、聞き取り調査の結果、とくに移住の過程についての説明の中で聞くことができた史実の幾つかは、行政区あるいは王朝名、またその

君主名が確認できたことから、時代考証を行なうに値するだろう。またより直接的な考証を試みるにあたっては、系譜を中心としてアラブ広域の幾つかの部族を取りあげているアラビア語版の Max Freiherr von Oppenheim, *Die Beduinen* (vol.1-5, London, 1939) や<sup>22</sup>、『アラブのアシーラとカビーラ』(アラビア語)なども参考になろう<sup>23</sup>。いずれもベイルート出版であるが、資史料に関しては近隣のアラブ諸国にまで収集の対象地域を広げることも今後必要になると思われる。

付記：

本稿の調査の実施前後は、とくに公募研究班の代表である赤堀雅幸氏が筆者と特定領域全体および第7次調査隊考古学班との連携に尽力下さった。また調査期間中は、とくに第7次調査隊考古学班のメンバーである大沼克彦氏(隊長)、赤司千恵氏、久米正吾氏、長谷川敦章氏から多くの示唆を頂いた。また隊長である大沼氏を通して、O氏、P氏、Q氏を始めとする多くの現地協力者に調査への助力を頂いた。心から御礼申し上げる次第である。

註

- 1 赤堀雅幸、「部族と遊牧民」(小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』、2008年)、353-358頁。
- 2 eds. P.S. Khoury & J. Kostiner, *Tribes and State Formation in the Middle East* (Berkeley, 1990), 赤堀雅幸、「アスルーエジプト地中海沿岸のベドウィンに見る祖先と自己との関係の表現」(『民族学研究』58巻4号、1994年)。
- 3 G.W. Murray, *Sons of Ishmael: A Study of the Egyptian Bedouin* (London, 1935).
- 4 大塚和夫、『イスラーム的』(日本放送出版協会、2000年)、161頁。
- 5 「ノア」(アラビア語でヌーフ)の名前の下には、彼が神に選ばれた優れた預言者であることの証である「彼に平安あれ」という語句が記載されている。
- 6 系図には「ズバイド・アクバル」(Zubaid al-akbar、偉大なるズバイド)とある。ズバイドはハムヤル(Hamyar)の息子であり、25歳の時にアムラ('Amra)を妻とし、その後11人の息子を授かった。
- 7 シャアバーンはムハンマドの6人息子の長兄であり、弟は順にラマダーン(Ramadan)、ラジャブ(Rajab)、サファル(Safar)、カーミル(チャーミル、Kamil)、ジャバル(Jabar)である。彼らは後に、それぞれの部族を作っていったとされる。
- 8 しかし当のワハブは子孫の一部を率いてアレppo付近(Tell al-Babなど)に移り住み、そこで家畜を売り払って農地を所有したという。またファッダーガについては、後にマラク(Malak)という族長とともにワハブを追って現在のZ村の場所に移り住んだが、その後一部はワハブの家系の一つであるバーブ(Bab)とともに生活を始めた。なお、ワハブのわずかな一部はイラクに残っているという。
- 9 なお、ji氏はズバイドの祖父の名はカフターン(Qakhtan)で、息子の名前がハムヤルだと述べており、これはハムヤルをズバイドの父と述べるガーニム・アル=アリー村での情報とは異なる。
- 10 少なくともアレppo近郊への移住の際、ジブリールには息子がおらず、多くの娘とともに居たとされる。
- 11 ガーニム・アル=アリー村の家系図と比べると順番が逆になっている。
- 12 sr氏によると売り払った羊は1匹20kg程度で、肉は1kgあたり150シリア・ポンド(約360円)だ

- ったという。売った場所はラッカの羊市場（先述のマーガフ）であり、同市場では遊牧民以外の出入りがあることも確認された。
- 13 現在の S 村の場所に移る前にアリーとその家族はシリア中央部のハマーやホムスにも立ち寄っていたという。
  - 14 ちなみに r 氏は、今回のインフォーマントの中で最もカビーラとアシーラの語の区別に対して頓着していない人物であった。「部族」に関して両語が指す内容の違いについて筆者が尋ねた際にも、「カビーラとアシーラは同じではないのか？」と逆に尋ね返されたほどである。
  - 15 家屋自体は両方の場所にそれぞれ所有している。類似の例を取り扱っている論文を紹介しておく。O. Aurenche, “Villages d’été, villages d’hiver: un modèle peu connu d’occupation de l’espace dans la vallée de l’Euphrate” (eds. by O. Aurenche, H. de Contenson, M. Fortin, *Espace naturel, espace habité en Syrie*, Lyon: La Masion de l’Orient et de la Méditerranée, Université Lumière Lyon 2-CNRS, 2000).
  - 16 B 村はかなり大きい村なので、75% というのはにわかに信じがたい数字である。
  - 17 改宗した時期はヒジュラ歴 7 年、つまり預言者ムハンマドが一度マッカを出て、マディーナへと「聖遷」（ヒジュラ、Hijra）を果たした後である。
  - 18 7 人の息子は上から順にサニーフ（Sanif）、フサイン、サーリム、ダーヒル（Dahir）、ガーニム、ガッナム、スピーウである。
  - 19 10 人の息子は上から順にイドリース（Idris）、ナムサート（Namsat）、ザーヒル（Zahir）、アブドゥッラー（‘Abd Allah）、ジャービル、スライマーン、ハマド、イスマーイール（Isma‘il）、ハサン（Hasan）、アッサーフ（al-Saf）である。
  - 20 確かに筆者はガーニム・アル＝アリー村以西で牛を見かけることはなく、MG 村以東ではしばしば見かけた。
  - 21 羊が約 70-80 匹、山羊が約 10 匹、牧羊犬が数匹。
  - 22 *al-Badu* (Arabic Edition, trl by Mahmud Kabibu, Beirut: al-Warrak, 2004).
  - 23 eds. by Bahjah ‘Abd al-Wahid, Muhammad al-‘Aris, Muhammad Salim Ra’uf al-Samira’I, Husain Rimal, *Qaba’il wa ‘asha’ir al-‘Arab* (vol.1-6, Beirut: Dar al-Yusuf, 2006).

# 「南メソポタミア都市文明に貢献したマルトゥ」

堀岡 晴美（研究協力者 国士舘大学大学院博士課程）

HORIOKA Harumi

## Martu: Its Contribution to the Urban Civilization of South Mesopotamia

We know that there exists a derogatory expression and a positive expression for the Martu in the literary texts and letters of South Mesopotamia. In this paper, we focus on the positive expression used to refer to the Martu, we learn that the Martu have been described in the *Enmerkar and the lord of Aratta* as one of the partners who engaged in long-distance trading with the First Dynasty of Uruk. This paper also aims to explore the relation between the Martu and the South Mesopotamian urban civilization

First, on investigating the administrative and economic documents of the Early Dynastic Fara and Mari, which contain the first mention of the Martu, we discover that the people working for the river transportation of the mar-tu.

Further, on examining the documents from the Early Dynastic Ebla, we confirm that there existed a ‘kingdom of Martu’ near Mount Bišri in Syria, and it functioned as an important relay station in the middle Euphrates. References pertaining to ‘the kingdom of Martu’ also informs us about its location.

Next, after investigating the ritual, in which ‘the dagger of Martu’ and wine were used in the Ebla region, the ‘kingdom of Martu’ brought wine and raw materials with smiths from Anatolia and the upper Euphrates to South Mesopotamia. It is therefore believed that regulating control over such transportation was important to the kingship of the First Dynasty of Uruk.

Viewed in this light, it can be said that the river transportation carried out by the Martu supported the development of the urban civilization of South Mesopotamia until the decline of its power.

Martu, Fara, First Dynasty of Uruk, Ebla, middle Euphrates,

### I はじめに

1960年代から継続して mar-tu/MAR.TU/*amurru* の研究調査をおこなってきたブッチェラティ (G. Buccellati) は、2009年の論考でそれまでの成果をまとめ、アモリ人 (=マルトゥ/アムル) を発展段階的におおよそ以下のような7項目にまとめて報告している。①アモリ人 (=マルトゥ) は元来遊牧民だったのではなく、ユーフラテス河中流域の農耕民であった。②前3千年紀前半、人口圧によりかれらは無住地帯であったステップへ進出、牧畜業の経営化を推進。③ステップ内に築いた井戸ネットワークにより都市行政から自立。徴税・徴兵を免れる。④自身の軍人化。⑤遊牧民の定住化ではなく農民の遊牧民化。⑥前18世紀マリの「アモリ人王朝」は、征服王朝ではなくアモリ人が故国に樹立した王朝。⑦アモリ語はアッカド語と同一言語。さらに、アモリ人は都市と職能集団の間を仲介する交易商人でもあったと結論し



た<sup>1</sup> (Buccellati 2009, 142-144, 152-153)。

ブッチェラティの結論は、今後マルトゥを研究するにあたり有益な指針になることは間違いない。しかしかれが扱わなかった事柄もあり、未解決のまま残されている課題もある。たとえば、メソポタミアの住民がマルトゥに抱くイメージには二面性があることについて、まだ十分議論し尽くされたとは言い難い。メソポタミアの歴史上一時期を画したと言われるマルトゥが、メソポタミア世界のなかでどのように位置づけられるかを考える上で、この問題は避けては通れない。

これまではマルトゥを、「穀物を知らず、都市を持たず、家を持たない」、都市民とは対極にある非文化的な野蛮人と捉えがちであった。その一方で、メソポタミアの文献にはマルトゥに対し好意的な表現もあることについて、あまり取り上げることが少なかったように思われる。好意的な表現の一例としてシュメール語文学作品のひとつ『エンメルカルとアラッタの君主』(ETCSL1.8.2.3 Enmerkar and the lord of Aratta)を見てみれば、文中に挿入された「エンキ神の呪文」のなかで「スバルトゥ (Šubur<sup>ki</sup>)・ハマジ (Ha-ma-zi<sup>ki</sup>)、そしてキエンギ (Ki-en-gi)・キウリ (Ki-uri)・マルトゥ (Mar-tu) は、エンリル神に向かってひとつの言葉で話しかける」とある<sup>2</sup>。言語の異なるひとびとが「ひとつの言葉で話す」とあるが、つまりは、『エンメルカルとアラッタの君主』のほかの箇所(506行目)で語られる「楔形文字を記した粘土板の考案」を言いたいのであろう。キエンギ・キウリと呼ばれたメソポタミアの地は、交易ネットワークが縦横に走り、ネットワークはさらにスバルトゥやハマジといった周辺地域へと伸びる土地柄であった。前4千年紀にウルクは、相違する話し言葉の壁を超えて意志伝達を可能にする表意文字を考案し、そのおかげでさまざまな地域との取引を円滑におこなうことができるようになった。都市ウルクの発展が南メソポタミア都市文明の先駆けになったのだとすれば、そのウルクと協力関係にあったマルトゥは、ブッチェラティの言葉を借りれば「都市と職能集団の間を仲介する交易商人」として活躍し、メソポタミア文明の基礎固めと発展の一翼を担ったと言えるだろう。

mar-tuの語がもっとも早く見られるのは前3千年紀半ばのファラ(Fara)文書においてであり、その中にはマルトゥの肩書を持つ人物の名前のほか、「マルトゥ耕地」という耕地名も見られる。南メソポタミアへのマルトゥの移住はすでに始まっており、「穀物を知らない」どころか、かれらは農業経営に従事していたのである。

南メソポタミアのほぼ中央に位置するファラは、その立地上ユーフラテス河を利用した交易の拠点であり、そのような場所に、ウルクは南メソポタミアの主要都市と協力して河川輸送ネットワーク(以下「ファラ・ネットワーク」と呼ぶ)の運営事務所(以下「ファラ行政センター」)を設置した。ファラ文書の大部分はこのネットワークの保管文書が占め、残りのわずかな部分に各地から集まる交易ネットワークの存在が認められる。マルトゥは後者の側にあったが、先にも述べたようにウルクとは互いに協力する立場にあったため、両者はファラで共存することができた。ブッチェラティはマルトゥを、ステップを往来する交易商人として捉えたが、河川との関わりについては言及しなかった。しかし文献史料にまず登場したのは河川輸送の拠点であるファラに移住したマルトゥであり、ユーフラテス河でファラとつながるマリにおいて舟に乗るマルトゥであった。マルトゥの肩書を持つ人物がユーフラテス河を通じて連結するファラとマリ(Mari)に年代的にはほぼ相前後して文書に記録された事実は、ブッチェラティの第1項目を補完することになる。かれはマルトゥの故地を、バリフ河合流点とハブル河合流点の間および下流のマリまでを含むユーフラテス河中流域の河谷一帯と考えたのである。この地域はすなわちビシュリ山麓にあたる。メソポタミア文献資料では往々にしてマルトゥの国とビシュリ山を一括りにして言及する傾向があるが、遠

く離れたメソポタミアの地でもマルトゥの故地はビシュリ山であると認識されていたため、そのような表現になったのだろう。今後マルトゥに関する研究調査を進めるにあたり、ユーフラテス河を通じての遠隔地交易とマルトゥとの結びつきはぜひとも視野に入れるべきである。

以下では、第2章でマルトゥの移住先であるメソポタミア側の文献資料を基に、河川輸送の分野で活動するマルトゥについて調査し、並行してマルトゥの語の意味の理解にも努める。おもにファラ文書内でマルトゥの肩書を持つ人物や集団の活動内容について論じ、その過程でマルトゥが舟運に従事する者であることを明らかにする。第3章ではマルトゥの故地についてシリアの文献資料を扱う。エブラ (Ebla) 文書に認められるマルトゥ王国に関する記述を紹介しつつ、シリアにおいてもマルトゥがユーフラテス河中流域の河川輸送を支配した者として知られていたこと、そして、ユーフラテス河上流域と下流域とをつなぐ役割も果たしたであろうことを前提とし、マルトゥの具体的な活動について探る。そのさいエブラ行政経済文書における記述の解釈だけにとどまらず、神話や古バビロニア期のマルトゥにかんする見も参考にする。

なお本稿では、ファラ文書が出土した土地の呼称として、古代名シュルツパク (Šuruppak) ではなく遺跡名のファラを用いる。その理由は、ファラ文書の内容がシュルツパクの都市行政を反映したものではなく、ファラ行政センターの運営記録と考えられるからである<sup>4</sup>。

## II メソポタミアのマルトゥ

本章では、ファラ文書のなかの mar-tu に言及する1枚の大麦支給文書 WF 78 (EDATŠ 29) の内容に重点が置かれる。交易ネットワークが集まるファラにはさまざまな方面からの交易代理店が設置されていた。そのような状況のなかで、WF 78 に記載される140人の集団はどのように位置づけられるのか、またこの集団がもし移住者であるなら、どのような経路でファラまで到達したのか。これらの疑問を解明するために WF 78 とそのほかの関連文書の内容を考察する。

### II-1 シリア・メソポタミア間交易ネットワーク

現存資料に見られるマルトゥ (mar-tu) への言及としては、メソポタミアでは前25世紀前半／半ばに年代付けられるファラ文書に加え、初期王朝期末からアッカド初期初期にかけて (前24世紀) のキシユ (Kiš) とニップル (Nippur) の文書でそれぞれ言及される。アッカド期にはアダブ (Adab)、キシユ、ニップルに、またウル第3王朝期にはプズリシュ・ダガン (Puzriš-Dagan) に見られる。シリア側ではファラ文書よりわずかに年代が下がるマリ文書に mar-tu の語が1例あり、そのいっぽうでほぼ同年代のエブラ文書には多数の言及がある。

以上挙げたように地名を示す限定詞 ki の有無の違いはありながらも、mar-tu または *mar-tu/tum*<sup>ki</sup> の語はメソポタミアとシリアの両方で見られる。すなわち両地域間の交流があったからにほかならない。

シリアからメソポタミア南部まで、運河を含めたティグリス・ユーフラテス河沿いに帯状に連なる都市をリストアップした文書が、エブラと、そしてニップルの北にあるアブ・ツアラビーク (Abū Ṣalābīkh 前3千年紀半ば) から出土した<sup>3</sup>。リストに挙がる都市の数は289にのぼり、これにより、中継地を経由しながらのシリア・メソポタミア間の交易が当時成り立っていた事を今日知ることができるのである。

ニップルとウルクのほぼ中間にあるファラ遺跡から出土した文書群のなかに、シリア北西部エブラとの交流を証明する語彙リストがある。ファラとは数百キロも離れたエブラで、ほぼ同じ順番で単語が並ぶ

ストが発見されているのである。通説では前 2600 年とされるファラ文書ではあるが (Biggs 1974, 24-26)、アッカド王朝期直前 (前 2350 年以前) のエブラ文書との間にはじつのところ 250 年もの開きはない<sup>4</sup>。年代的にはファラ-エブラの順に並び、両者の間に 50 枚ほどのマリ文書を挿入すると 3 か所の文書は年代的に連続することになり、このひとつつながりは前 2400 年 ± 50 年の間にほぼ収まると筆者は考える。現在知られる 15000 枚以上のエブラ文書は前 24 世紀半ばの短い期間に集中して作成されたものではあるが、文献史料に見られなくてもエブラとメソポタミア間の交易ははるか以前よりおこなわれていたのは確かだ。

前 3 千年紀後半の南メソポタミアでは王室経営の織物業が盛んであったことが、初期王朝期ラガシュ (Lagaš) やウル第 3 王朝期のラガシュ、ウンマ (Umma) の文献史料にあきらかに見てとれる。しかしながら、もともと南メソポタミアには羊・山羊はいなかった。そのためシリアやイラン方面から連れてくるしかなかった。ウル (Ur) 王室の動物税集積地であったズリシュ・ダガンには各地からさまざまな動物が届けられたが、なかでも羊・山羊の数はおびただしく、60 カ月分の合計が 34 万 7394 頭であったという。つぎに多い牡牛の 2 万 8601 頭をはるかに凌ぐ。また、アブ・ツァラビーク出土文書のなかには羊 1 万 4000 頭という数が 1 枚の行政経済文書に挙がっており、メソポタミアにはいかに多くの羊・山羊が連れてこられたかが分かるだろう (Postgate 1992, 161)。こういった羊・山羊は儀礼のさいの犠牲獣として供されたが、それだけではなくメソポタミア沖積平野で営む羊毛加工のための原料でもあったに違いない。シリアからの羊・山羊は、上記の都市リストに記された経由地を経て南メソポタミアへ搬送されてきたと推測される。

ファラとエブラ間の交流については、先に挙げた語彙リストのほかに IB という「役所」の存在が挙げられる<sup>5</sup>。エブラでは IB の役人が手工業者のギルドの経営などをおこなった<sup>6</sup>。ファラ文書ではある種の経営体を表す普通名詞として、大麦受給者などの肩書のなかにのみ見られる。そのためファラにおける IB の活動についての情報はわずかしかないが、ラガシュやウンマの IB-gal (「大きな IB」) がイナンナ (Inana) 女神の聖域の一部であることから類推するに、IB とは女性が「長」を務める組織と考えられる。そして女性が経営する織物工房もここにあったのではないだろうか。エブラ王宮においては商取引の主導権は宮廷女性にあった (Biga 1988, 159)。南メソポタミアでも王妃の館を通じて「女主人」同士の交流があったことが、アダブの都市支配者の妻がラガシュの王妃の館の「女主人」バルナムタラ (Barnamtara) を訪問した事実から見てとることができる (Lambert 1953, 58)<sup>7</sup>。

ウルク古拙文書にすでに「経営体」を表す IB が文献資料に見られる (Englund 1998 70)<sup>8</sup>。ウルクが沖積平野の枠を超えてシリアへ進出したさいに、南メソポタミアで使われていた en (「王」) などの語彙とともにウルクの居留地を通してシリアに導入されたのだろう。しかし初期王朝期以後はイナンナ女神の聖域を表す IB-gal 以外に使用されなくなった。ファラ文書とエブラ文書とでは年代的に差があるので、文書の上からは両者間の直接取引を証明することはできないが、シリアの IB とメソポタミアの IB ないしは IB-gal は、文書が作成される以前からシリア・メソポタミア間の経済的な交流のための施設だったと考えられる。羊・山羊の大群は、南メソポタミアで毛を刈られたのち、食用として消費された残りのすべてが南メソポタミアの都市周辺で飼養されたとは考えにくい。なぜなら、運河が網の目のように走る南部に羊の大群を養えるほどの草地が広がっているようには見えないからである。むしろシリア・メソポタミア間で羊の群れを連れた牧人たちの季節的な移動がおこなわれていたと考えるほうが妥当なのではないだろうか。1 年をサイクルとして往還した場合、シリアと南メソポタミアの双方に羊を受け入れ管理するための施設が必要であり、それが IB であったと推測される。

## II-2 ファラのマルトゥ

ファラ文書中 mar-tu の肩書を持つ人物はアスアグ ( $\text{A}_3\text{-sul}_3\text{-ag}_2$ ) ただ1人で、この名前は不動産売買契約文書2枚と行政経済文書5枚に登場する。しかし大麦支給文書 WF 78 以外では mar-tu の肩書がつくことはない<sup>9</sup>。ファラ文書内でアスアグについて追跡調査をしても「穀物を知らない、生涯家に住まない」と表現されるような野蛮人のごとき姿を見出すことはできない。アスアグが証人として登場する不動産売買取引も2件あり、証人に立つ者は売買取引を保証できる立場でなければならないのであるから、ファラの農耕社会において信用のある人物だったはずである。なによりもアスアグはファラに近いアダブに自身の耕地を所有していた。アダブから出土した粘土板に、アスアグ家が所有する耕地の売買取引が、「ムサブ (Mu<sub>6</sub>-sub<sub>3</sub>) 家」という屋号を持つ別の一族の耕地の売買取引と並んで粘土板に記録されている (OIP 14 51 = ELTS No.32)<sup>10</sup>。この取引の証人にはアスアグ家の妻と3人の息子も名を連ねており、1人は「養子 (mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub>-sa<sub>2</sub>)」と記録されていた。マルトゥであるアスアグの一家が耕地を所有していたこと、したがって農業に携わる家族であったことに疑問をさしはさむ余地はない。ただし、かならずしも農業を専業にしていたと考える必要はない。もう1件の耕地の売主 Mu<sub>6</sub>-sub<sub>3</sub> は職名「羊飼ひ」を意味する名前であり、羊飼養者が一家の食糧と羊・山羊の飼料を自給するために耕地を所有するのはごく自然なことである。また同じ時に同一人に耕地を売却した2人は同業者であったとも考えられる。

## II-3 河川輸送と儀礼

マルトゥの語が南メソポタミアでもっとも早く登場したのがファラ文書であった事実の背景には、ファラが移住者などの外来者が多い土地であったという事情がある。mar-tu の肩書が付されたアスアグは WF 78 の大麦受給者の1人であり、他の受給者のなかには移住者／来訪者と認められる者がいる。

およそ140人の受給者の名前を記すこの文書は4つのセクションに分かれ、第2セクション29番目がアスアグである。1人あたり的大麦支給量は5 gur-mah (以下 gm) から2(bariga) までとさまざま、アスアグは3gmであった。第2セクションの受給者40人のうち、16人は「水夫」か「水夫」の配下と分かる。ほかには監督 (ugula) 1人、酒盃官 (šagia<sub>x</sub>) 1人、歌い手 (nar) 1人、耕作検査官 (engar) 2人、書記 (dub-sar) 1人がいる。残りの18人はみな大麦支給の責任者である耕作検査官たちの名前を肩書代わりにするだけで、職名についての言及はない<sup>11</sup>。「水夫」のなかには、1人のリーダーのもとに配下6人が含まれるチームと、リーダーの下に5人の配下がいるチームとがある。2番目のチームのリーダー (受給者順では第2セクション25番目) のつぎに mar-tu の肩書を付したアスアグが記され、つづいて再び「水夫」の配下たち5人がいる。第1チームも第2チームも大麦量は最少の $\frac{1}{2}$ gmであった。それに対しアスアグは6倍の3gmである。アスアグは「水夫」のチームリーダーと「水夫」の配下たちの間に挟まれた形で記されるので、「水夫」たちと一緒に舟に乗りなんらかの仕事をしたのだろうが、かれだけに与えられた支給量の多さは特殊な任務であったことを物語る。

ここまで括弧付きで「水夫」としてきた語は lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal の訳語で、通常 lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub> は“boatman”などと訳す。しかしここで扱った lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal の第1チーム6人は女性である可能性が高い<sup>12</sup>。lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal は「水夫」ではなく「大型舟に乗る人々」としたほうが良いだろう。第2チームのメンバーは男性であり水夫の仕事もするがやはり「大型舟に乗る人々」である。

支給量の多い者ほど働く現場での地位も高いと予想し、そのような人物の職名から第2セクションの仕

事の内容について探る。支給量の多い順に挙げると、監督 (ugula) の 5gm、酒盃官 (šagia<sub>x</sub>) の 4½gm が 1 人ずついる。監督のビルアンズー (Bil<sub>x</sub>-<sup>(d)</sup>Anzu) はほかの文書では「ギパルの監督」と呼ばれているので、したがってこのセクションの者はみな「ギパルの監督」の指揮する仕事に従事した<sup>13</sup>。アスアグと同じ支給量 (3gm) の者のなかに歌い手 (nar) が 1 人いる。儀礼歌の歌い手が参加しているのであるから、船上でやはりなんらかの儀礼がおこなわれたのである。

歌い手が遠方の都市まで旅行する事例はシリアのエブラ、マリ、キシユ、アダブに見られる。エブラではマリやキシユから歌い手が何人も訪れては滞在し、衣類をエブラ王室から拝領していてもいる。歌い手の長 (nar-mah) と見習い (nar-tur) の集団の訪問もあった。そのため歌い手とは都市内での活動のほか、歌舞音曲の専門集団を連れて他都市を訪問する職でもあると考えたほうがよい (Tonietti 1998, 83-85)。第 2 セクションの者はそのような「歌い手」を伴い河川を移動してきた者たちだ。

河川を移動するマルトゥはマリの文書にも見られる (Charpin 1987, no.9)。50 枚ほどが出土している初期王朝期マリ文書は、その大部分がマリ王イブルルイル (Ip-LUL-il) 治世下で作成されており、エブラの為政者イブリウム (Ibrium)・イビジキル (Ibbi-Zikir) 父子より年代的に若干古いと考えられる。やはりこのころに年代付けられる当文書は、ツアルバト (Šarbat) のイナンナ女神への贈り物、エンキ神への贈り物など 8 項目の穀粉支給を記しており、3 行目に「穀粉 (約) 10 リットルをナニ (Nani) へ、MAR.TU (の任務) に対して (支出した)」とある<sup>14</sup>。その数行あとは前置詞 *is* を用いて船上でおこなう屠畜儀礼への支出も記録する<sup>15</sup>。

このマリの例と WF 78 に記載されるマルトゥの例とを合わせて考えれば、ファラとマリでのマルトゥの仕事とは船上での屠畜儀礼をおこなうことであった。「大きな舟に乗る人々」と行動を共にするマルトゥであるから、河川を無事に下り目的地に恙無く到着することを祈願したのでらう。

ファラにはほかに、個人ではなく集団を mar-tu と呼ぶ例がある。

**TŠ 648 i 1) 25 guruš 2) bala lu<sub>2</sub>-HU-da 3) 3 ninda šu ti 4) 45 guruš ii 1) 1 ninda šu ti 2) 30 la<sub>2</sub> 2 munus 3) 1 ninda šu ti 4) mar-tu 5) (blank) iii (blank) rev. 1) 150 la<sub>2</sub> 2 ninda-gal-gal**

そこには「25 人の男子成年労働者、(かれらは) 河川輸送の賦役に従事 (する者)、食糧支給を 3 回受けた。45 人の男子成年労働者、(かれらは) 食糧支給を 1 回受けた。28 人の女性 (労働者)、(かのじよたちは) 食糧支給を 1 回受けた。(以上は) マルトゥ。」とある。第 1 欄 2 行目を「河川輸送賦役に従事した労働者たち」と訳したが、それは HU を *u<sub>5</sub>* (HU.SI) のヴァリエーションと解したからである。マルトゥが河川を利用した遠隔地交易に従事したと考える根拠として、アッカド期キシユの労働者割り振り文書 MAD 5, 18 を参考に挙げておく。

**MAD 5, 18 (Kish 1930, 170a) rev. 13) 13 DAM.GAR<sub>3</sub> 14) 20 LA<sub>2</sub> 2 ŠU.HA 15) 12 MAR.TU (space) 16) ŠU.NIGIN<sub>2</sub> 180+30+[7 G]URUŠ 17) *zi-me-id* [LUGAL]<sup>?)</sup>**

合計 217 人の労働者が 10 人の監督 (UGULA) と商人 (DAM.GAR<sub>3</sub>)・漁師 (ŠU.HA)・MAR.TU のもとへ割り振られた人数を記録した文書であり、監督へはそれぞれ 10 人か 20 人というように一定の人数が割り振られているが、商人には 13 人、漁師には 18 人、MAR.TU には 12 人となっている。交易商人であり王権の命を受けて物資の輸入や奴隷の買い付けなどもおこなう商人に漁師が加わっていることから、この文書に集められた労働者たちは河川を利用した遠隔地交易に従事する者たちと解される。『アガデの呪い』で家畜の群れを連れてアガデへやってくると描かれるマルトゥも、家畜を舟に乗せて連れてきたのかもしれない<sup>16</sup>。じじつエブラ文書には、羊 260 頭をエブラの役人が売却するためにハラン (Harran) から

マリへ船で移送した記録がある (Astour 1992, 60)。

キシュ文書にはほかに軍事色が強い UGULA MAR.TU がいる<sup>17</sup>。古バビロニア期には漁師を束ねる PA(UGULA) MAR.TU がおり、シュトルが「水兵か？」と疑問符付きで示唆したように、MAR.TU の監督が率いる水軍がいた様子がかがえ、ここでもマルトゥと舟との関わりは濃厚と言えよう (Stol 2004, 821)。

さらに問題にしなくてはならないのが、TSS 648 の第 2 欄で mar-tu と括られる集団のなかに女性たち (munus) がいることだ。すでに mar-tu の語は屠畜儀礼にさいしての役割と推測したのであるから、この屠畜儀礼に女性も加わることを証明しなくてはならない。アナトリアの例であるが、羊の群れを管理し儀礼でも重要な役割を担う女性の一団がいる。しかもその集団が MUNUS KAR.KID と称されたということは、ファラに見られる GENE<sub>2</sub>kar-kid<sub>3</sub> グループの先頭にアスアグがいることについての説明を容易にしてくれる<sup>18</sup>。MUNUS KAR.KID の一団はある女神の祭典で踊りを披露するが、そのリーダー (UGULA. MUNUS KAR.KID) はグループから一人離れべつの儀礼に参加する。ときには羊の屠畜儀礼に臨席し、またあるときは一種の飲料で満たされたプール (ノ桶) のなかで男性道化師がパフォーマンスする間、木製の短剣を持って周囲を 3 回走るといふ。彼女の前には杖を持つ神官が歩く (Yigit 2008, 76)。儀礼に向けて MUNUS KAR.KID の一団が男性たちとともに羊の群れを搬送しており、女性のリーダーは刀剣ダンスを踊る者であった (McGovern 2003, 176)。

ファラでは哀歌歌い手 (gala) 指揮下の儀礼に参加した人々への大麦支給文書 WF 74 のなかに、アスアグが GENE<sub>2</sub>kar-kid<sub>3</sub> グループのリーダーの位置に記される (WF 74 rev. ii 1)。GENE<sub>2</sub> も MUNUS も「女性」であることを示す限定詞であり語義に相違はないので、GENE<sub>2</sub>kar-kid<sub>3</sub> と MUNUS KAR.KID は同義語である。WF 78 の第 2 セクションのなかの「大型舟に乗る人々 (lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal)」が、女性 6 人の第 1 チームと男性 5 人+マルトゥ (=アスアグ) 1 人の第 2 チームで編成されており、アスアグが GENE<sub>2</sub>kar-kid<sub>3</sub> と呼ばれる女性たちのリーダーであることは WF 74 で明らかなので、第 1 チームのリーダーであったアスアグがチームを離れ、第 2 チームへ移りそこで行動を共にしたように見える。舟には羊の群れが伴われていた。おそらく羊を連れた女性と男性のグループが参加したアナトリアの儀礼と同じような形式で船上の儀式が執り行われたのだろう。GENE<sub>2</sub>kar-kid<sub>3</sub> がアナトリアの MUNUS KAR.KID と同義語であると推測されることで、アナトリアとファラには共通する儀礼の存在があったと言えるのではないだろうか。

ここまでの調査で、mar-tu/MAR.TU の語は河川輸送と結びつき、ファラとマリでは船上での屠畜儀礼をおこなうかまたは参加する者を指す語であること、しかもその儀礼はユーフラテス河上流でおこなわれたと同種の儀礼であるらしく、マルトゥと呼ばれる人が関与していたことが確かめられた。

#### II-4 移住その 1 — 「女主人 (NIN)」 —

シリア・メソポタミアでとられた移住政策には 2 種類あったと考えられる。ひとつは王族の女性が他国へ嫁ぎ、その地で「女主人」として自身の家を構え故国の交易代理店の役割を務める。それとは異なる方法として、ある国の当主が後継者を故国に残し、一家 (=王家) を挙げて移住することもあった<sup>19</sup>。

ファラでは有力な女性が耕地や家屋を購入した記録があり、また耕地割り当てでは女性が先頭に置かれる文書も数枚ある<sup>20</sup>。女性が当主となり運営する経営体があった証拠で、彼女たちがファラに設けた交易代理店の当主であったことは十分に考えられることだ。ファラの地に移住 (ノ輿入れ) してきた「女主人」が自身の不動産を購入した例として、ファラ遺跡から出土したことが確かな耕地売買契約文書 WF 33 が

ある。そこには GAN-girim<sub>x</sub> という名の女性が 2 イク (≒ 7200 平方メートル) の耕地を購入したとある。人名の構成要素 girim<sub>x</sub> は河または運河の名称で、<sup>4</sup>Nin-girim<sub>x</sub> という名で神格化されている。ニンギリム女神の神殿がアラフトゥム (Arahtum) 運河沿いの都市ムルム (Murum) にあり、ウルクにも聖所があった (Frayne 1992, 97)。またニンギリム女神はエブラでも崇拝されている (Pomponio-Xella 1997, 291-292)。アラフトゥム運河はイリプ (Ilip) でユーフラテス河と分岐しマラダ (Marad(a)) へと通じ<sup>21</sup>、ムルムはマラダの上流にあたる (Frayne 1992, Map 2)。ギリム河とはアラフトゥム運河の一部であったのか、あるいはアラフトゥム運河を経由する長距離の河川ルートを指したのか不明であるが、いずれにしてもユーフラテス河も経由するギリム運河でウルクとムルムはつながり、さらにはエブラにまで通じる交易ネットワークとして機能していた。その交易代理店を営むためにガンギリムはファラで耕地を購入したのである。この時ファラに隣接するシュルツパクにはすでに E<sub>2</sub>gime<sub>2</sub> (王妃の館) が営まれていたが、ガンギリムはシュルツパクの王妃の館とは無関係であり、ウルクを宋主に戴くファラ行政センターと関わりを持っていた。

前節で第 2 セクションの 40 人が舟で移動する人々であることが確かめられたが、WF 78 全体の仕事内容を知る鍵は第 1 セクションにある<sup>22</sup>。ここでは、ギビル神 (Gibil<sub>6</sub>) の羊飼 6 人、ギビル神殿所属員 (またはギビル神の儀礼をおこなう者)、そして<sup>4</sup>Nin と<sup>4</sup>Gibil<sub>6</sub> のペア、というようにギビル神に関わる者が多い点に注意しなくてはならない。ギビル神は「火の神」「明かりの神」であることから、レンガを焼く火、鍛造の火も連想され、都市や家の基礎造りを司る神となった (Frankena 1971, 384-385)。そのようなギビル神ではあるが、<sup>4</sup>Nin、<sup>4</sup>Gibil<sub>6</sub> という名前は女神と男神のカップルを表しており<sup>23</sup>、したがって WF 78 が神々の聖婚を祝う祭礼に関係しているのではないかと推測しがちだ。しかしのちにギビル神と習合した神ヌスク (Nusku) は、シュメール語神話『エンリル神とスドゥウ女神』(ETCSL 1.2.2 Enlil and Sud) のなかでは、エンリル神に花嫁を迎えるために乙女の母親と交渉する役割を務める神として描かれる<sup>24</sup>。この役割はもともとギビル神も備えていたであろうから、<sup>4</sup>Nin、<sup>4</sup>Gibil<sub>6</sub> の一対とは、輿入れしてきた異国の王妃とその介添え役という関係なのだろうか。神を表わす限定詞が付いてはいるが、王妃<sup>4</sup>Nin はやがて自身の家を経営する「女主人」になるのだろうか。「女主人」の婚礼相手が誰であったのか。WF 78 ではその答えが見つからないばかりか、ファラに王がいた形跡すらない<sup>25</sup>。ウルク主導のファラ・ネットワーク行政センターが設置された地であるから、ウルクの支配者が婚礼を挙げるためにファラへやってきたとも考えられるが、しかし<sup>4</sup>Nin と<sup>4</sup>Gibil<sub>6</sub> に関してはこれ以上の考察は困難である。

むしろ、ファラ遺跡には市壁が発見されていないこと、したがってこの地は都市としてはまだ建設途上であり、そのような状況下で「女主人」が都市の基礎造りを司るギビル神 (の具現者) とともにやってきた事実のほうが重要である。マルトゥの肩書を持つアスアグが「女主人」とともにユーフラテス河を移動していることも看過できない。かれは先に挙げた WF 33 で耕地売買取引の証人として名を連ねているところを見ると<sup>26</sup>、耕地購入者ガンギリムはアスアグが同行した WF 78 の「女主人」と同一人物と見なしたとしても、あながち間違いとは言えないだろう。アスアグ家はファラに比較的近い郊外に耕地を所有していたのであるから、すでに南メソポタミアでの入植に成功した一家といえよう。アスアグが「女主人」に従い河川を移動してきたのは確かだが、WF 78 の時点ではじめてファラへ移住してきたのではなさそうだ。そこでつぎのような経緯が考えられる。アスアグ家も自身の代理店を営んでおり、一家の成員はユーフラテス河と支流を往来しながら異国の王族の移住にさいしては手助けし、かれら自身でもマルトゥの故地のあるシリアとの交易をおこなっていた。

「女主人」は王妃の館を設立し織物工房および交易代理店を営む意図のもとに移住してきたのであ

るから、施設建設のためには南メソポタミアには産しない建築材料も入手しなければならない。ラガシュのグデア (Gudea) がニンギルス (Ningirsu) 神殿建設のために木材・石材をシリアやイラン方面から輸入したように、ファラも輸入しなければならなかった。グデアの碑文に見られる石材のなかでも na 石 (= 玄武岩) は、ビシュリ山とそれに隣接する Menua 山から運んだというが (Astour 2002, 82-83, Potts 1994, 188)、ファラの場合も同様であったろう。WF 78 がユーフラテス河を利用した輸送に関わる文書であることは、第 2 セクションにユーフラテス河を神格化した人名要素を含む <sup>4</sup>KIB.NUN-ur-sag が記載されていることで明らかだ<sup>27</sup>。嵩も重量もある船荷を乗せて蛇行するユーフラテス河を安全に航行するには、高度な造船技術と操舵術とが要求される。そのような技術を携えた一団が目的地に無事に到着した時には神に感謝の祈りと犠牲獣を捧げるだろう。そのさいの儀礼形式か、あるいは捧げる役割の者を「マルトゥ」と称したと筆者は考える。

## II-5 移住その2 - 養子縁組 -

上記 (II-2) で取り上げたアダブ出土の耕地売買記録に見られるアスアグ家の養子は、実子と並んで売買契約の証人の 1 人として記載された 28。証人になるからにはすでに「家」の一員であったはずだが、それでもなお養子として記載されなければならない理由があったようだ。大麦支給文書に受給者として記載されるさいに、養子先の家名が本人の名前代わりに使われることがある。たとえば、本人名は記さず、養子先のムヌスアヌクシュ (Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub>) という名に「養子」と肩書をつけて本人名のかわりに記す例などがそうである。養子になる者はもともと異国からやってきた者であるから、シュメール語やアッカド語ではない名前の者も多いたであろう。そのような場合に養子先の名前で代用したのである<sup>29</sup>。

ところでムヌスアヌクシュという名前は、マラダ出土とされる人名リストにも見られる。このリストに挙がる人名は半数以上がファラにも見られるもので、ファラとマラダの間に人的交流があった証となる<sup>30</sup>。両都市に共通して見られる名前の 1 つアクアン (AK.AN) に関しては、ファラ文書では MAR (マラダを表わす) の肩書がつくので、両都市間の結びつきは疑いようもない<sup>31</sup>。アクアンに MAR とわざわざ肩書として付すところを見ると、アクアンはファラでは外来者である。ファラで移住者を迎えたムヌスアヌクシュ家も、アクアンとおなじようにマラダのほうに本籍があると理解したほうが良いのかもしれない。ムヌスアヌクシュ家の一部がマラダからファラへ入り、その後入植に成功し、「家」の所属員を殖やすために移住者を養子として迎え入れるようになった、とそのような経過が想定される。人名 Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub> が「婦人は休みなく (働く)」を意味することから、ムヌスアヌクシュ家の当主は女性であろう。かのじよの家が精力的に養子を迎え、一家の人員を殖やしていった様子が窺える。

マラダはイシニートゥム (Isinnitum) 運河で古代都市シュルツパクに隣接するファラに通じており (Frayne 1992, 40)、またギリム河を通じてもマラダ経由でシリアや北メソポタミアから人がつぎつぎとファラへ移住してきた。上流からだけでなくウルクからも多くの人や役人がファラにはやってきている。そのような状況であるから、ファラ文書には外来要素が多く含まれる。

アスアグは、WF 78 ではトゥ女神神殿の耕作検査官アクトゥ (AK-<sup>d</sup>Tu) を通じて大麦を支給された。しかし他文書では「アマルグラ (Amar-<sup>d</sup>Gu<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>) の子」と明記されるので、トゥ神殿の所属員ではないようだ<sup>32</sup>。さらに mar-tu の記載がある語彙文書 SF 63 には、mar-tu <sup>d</sup>Tu (iv 18-19) とあるだけで人名は一切記されていない。mar-tu <sup>d</sup>Tu という表現からは、トゥ女神の儀礼のなかで果たすなんらかの役割 (function) が mar-tu と呼ばれていたと推測される。



ポンポニオとクセラの説明によると、エブラ文書に現われる Tu という神はシュメール語圏のニントゥ (<sup>d</sup>Nin-tu) 女神と同一の神で、出産と結婚を司る典型的な地母神であるという (Pomponio - Xella 1997, 331-333)。南メソポタミアの中央に位置するファラでありながら、文書で言及されるのはシュメール・パンテオンのニントゥ女神ではなく、トゥ女神のほうであった。後者はあきらかにシリアから北メソポタミアにかけての女神であるから、mar-tu と呼ばれる行為ないしは役割を含むトゥ女神の儀礼は、南部にとっては外来の文化と言える。WF 78 の場合だけではなくファラ出土の神名リストにも、また行政経済文書に記載される人名要素としても、Nin-tu 女神は見られず Tu 女神のみが現れる<sup>33</sup>。このほかにも外来の神や女神の名が随所で認められるファラの状況とは、南メソポタミアにおける河川輸送の拠点へ交易ネットワークが代理店を設置したさいに、それぞれの神を勧請した結果生じた。ファラの地はそれだけ外来要素が占める割合が大きいということである。ファラ遺跡には 30 基以上のサイロがあり、それらは遺跡のなかに無秩序に散在しているように見える。その状況から判断して、独立した経営体が所有者として多数存在したと見るべきであり、各地からの交易代理店が自身の耕地を耕し穀物をサイロに蓄え、家人や労働者の食糧と家畜飼料を賄ったと推測される。シリア・北メソポタミア・イランからの交易ネットワークがファラへ集中したことはすでに述べたが、この地が南部の広大な開墾地の北端にあたり、飼料や食糧を十分供給できる土地だったことに加え、ユーフラテス河を通じて外来者が流入しやすかったことも外来要素が多い土地柄の原因の一つと考えられる。マルトゥと呼ばれる人々以外にも多くの移住者がファラには定着していたのだが、外来者がみな養子縁組であったのかとの疑問にいまは答えることができない。

異邦人マルトゥが市民として都市に迎えられるまでの過程を物語る『マルトゥの結婚』のなかにも、都市へ外来者が取りこまれてゆく過程が窺える<sup>34</sup>。この作品では、神格化されたマルトゥがカザル (Kazallu) へやってきてから都市支配者の娘と結婚するまでの経緯を物語る。郊外で母親と暮らしていたマルトゥ神は、都市支配者の家と縁組したことで都市市民になることができた。つまり血縁社会から抜け出して、マルトゥ神にとっては血縁も地縁もない都市社会の一員になったということである。メソポタミア南部でおこなわれていた大規模灌漑農耕は膨大な労働力を必要とし、そのため労働力の確保と管理を徹底させるため、灌漑農耕の長である都市支配者 (エンシ (ensi<sub>2</sub>) = 灌漑農耕の長) に多数の労働集団が接続する形で従属させられた。労働集団は都市支配者の権力が及ぶ土地から徴集された者たちで構成されていたため、労働集団の内部では地縁関係があるものの、従属する都市支配者とは血縁・地縁の結び付きはいっさいなかった。あらたに都市市民に加わろうとする外来者は、『マルトゥの結婚』の主人公マルトゥ神やアスアグ家の養子のように都市市民の娘と結婚することで養子となり、他方都市内の「家」はその方法で構成人員を殖やし、勢力を増すことも可能であったが、その場合も血縁関係はなかったと思われる。

## II-6 マルトゥとウルク

ウルク第 1 王朝の創設者であるメスキアガシエル (Mes-kiagašer) は「父」になり」ウルクの町を出てステップ地帯 (hur-sag) へ行ってしまったらしい<sup>35</sup>。『シュメール王名表』 (ETCSL2.1.1 The Sumerian King list) の 100 行目を ETCSL では「メスキアガシエルは海に入り消えた」と訳す<sup>36</sup>。つまり ETCSL は ab-ba を「海」と解釈した。ところが『シュメール王名表』のギルガメシュの項では ab-ba を「海」とは訳さず「父」と訳している。その箇所は「ギルガメシュの父は Lila である」であって「ギルガメシュの海は Lila である」とは読めないからだ<sup>37</sup>。ab-ba はむしろ「父」や「長老」を意味する語であろう。AB の文字を「海」にあてるときは AB の前に ab と読ませるための gloss として文字 A を付加する例が多い<sup>38</sup>。また hur-sag-še<sub>3</sub> ed

を ETCSL は「姿を消す」の意味にとるが、この箇所は文字通りに「hur-sag へ上る／出てゆく」と解釈したほうが良い。

「父」になる」ということは「名祖になる」ということだろう。ウルクの基礎を初代メスキアガシェルではなく 2 代目のエンメルカルが確立したと伝承する背景には、シリアや北メソポタミアでおこなわれていた交易のための移住政策があったと思われる。メスキアガシエルの一族は、ウルクを出てステップへ居留地を築き、ウルクに残留した者たちと連携して交易をおこなった。ウルク側ではそのおかげで財力を蓄え、確保した交易ルートを使って運んだ材料を用いて壮大な神殿を営んだ。

交易路開拓を目的とした移住政策がシリア・メソポタミアでよくおこなわれていたことはすでに述べたが、シリアの強国エブラが、かなり遠方にまで居留地を築いた様子が地名調査で明らかになりつつある。そのなかのひとつカクミウム (*Kakumium*) はヴァン湖の南であるにもかかわらず、この地の王・王妃・長老・証人についての記述がエブラ文書にしばしば見られる。ここにはエブラから任命された LUGAL とその一族が移住していた。キシユの領域のなかにもエブラの交易センターがあり、その LUGAL はエブラが任命したというのがペッティナートの考えである (Pettinato 1986, 116)。このような政策が Uruk IV 期にはすでに始まっていたといえよう。

マルトゥとウルクとの結びつきを明らかにするつぎのような材料もある。文学作品であるため扱いには注意しなければならないが、なんらかの歴史的事実を伝える意図があったからこそ物語化されたのである<sup>39</sup>。アッカド王朝第 4 代ナラム・シンの時、メソポタミア全土の都市が反乱の狼煙を上げた。南部の首謀者であったウルクの支配者アマルギリド (*Amar-girid<sub>2</sub>*) はナラム・シンに対して 7 回兵を挙げたが、数千人の常備軍を備えたアッカド軍に敵うわけもなく、ついにはアマルギリドは捕らえられてしまう。アマルギリドがナラム・シンと最後に戦ったのがビシュリ山であった。アマルギリドは 6 回目の戦いのあとで、スバルトゥとトランス・ティグリスの支配者たちと手を組もうとしたが断られ、ビシュリ山へ逃げこんだという。スバルトゥはかつては協力関係にあったのだが、その後関係は破綻していたのだろう。それに対しビシュリ山にはウルクと連携する勢力があったということになる。だが Uruk IV 期にシリアへ進出したウルク勢力は、ビシュリ山周辺に居留地を築くことができなかったことも確かである (Astour 1995, 1405)。そこにはウルクと親和性のある現地勢力が存在したということだろう。

### III マルトゥ王国

メソポタミアでは *mar-tu/amurru* を方角の「西方」を指す語としても用いた。しかしホワイティングが述べるように、この語がエブラよりもさらに西を指すことはない (Whiting 1995, 1232.)。メソポタミアの西方にマルトゥという国やマルトゥと呼ばれる人々がいた事実が、方角の「西方」と関連付けられたのである。

エブラ文書では *Mar-tu<sup>ki</sup>* のように地名を表す限定詞 *ki* を付して都市名ないしは地名として言及し、ファラ文書をはじめとしてメソポタミア側では、*mar-tu* または *amurru* (MAR.TU) のように地名を表す限定詞が付かない (Astour 1992, 54)。メソポタミアで使われた *mar-tu* の呼称は特定の都市や地域を指すのではなく、漠然とした広い地域を指し示すかのような印象がある。他方、エブラ文書で言及される限定詞 *ki* の付く *mar-tu/tum<sup>ki</sup>* は、ユーフラテス中流域のビシュリ山麓にあった「国」を特定する呼称である。前章で述べたように南メソポタミアの *mar-tu* はユーフラテス河を下ってきた。本章では、その人々とシリアの *mar-tu/tum<sup>ki</sup>* との関わりを考察し、シリアでのマルトゥたちの活動を紹介する。

以下では日本語で書き表すさいには、エブラ文書の *mar-tu*<sup>ki</sup> と限定詞 *ki* の付かない *mar-tu* とを区別するために、前者を「マルトゥ王国」、後者を「マルトゥ」と書き表す。

シリア北西部に位置するエブラは、前3千年紀半ばに交易の拠点都市として絶頂期を迎えた。エブラから出土した文書のなかに30箇所ほど *mar-tu/tumki* への言及が見られる。1985年にアルキがこれらを紹介し手短かに論じた (Archi 1985)。その結果前3千年紀中葉のマルトゥ王国に関する情報が、間接的にはあるがわれわれも得られるようになった。ただし上記II-1でも触れたように、初期王朝期エブラ文書の大半は行政・軍事を掌握した「大臣 (minister)」のアルルム (Ar-ru<sub>12</sub>-LUM) と、それに継ぐイブリウム-イビ・ジキル父子の治世下に集中するため<sup>40</sup>、エブラ文書から知られるマルトゥ王国の姿は時期としては前25～24世紀に限られる。

およそ80の *en* を頂く「王国」のうち *Arugu*, *Arukatu*, *Binaš*, *Ebla*, *Kiš*, *Mari*, *Martu*, *Tub* の8ヶ国には LUGAL もいた (Pettinato 1986, 116)。*mar-tu/tumki* に「王 (*en*)」がいたことは明らかなので、本稿ではペティナートに倣い「マルトゥ王国 (kingdom)」の呼称をとりあえず用いるが、その領域の規模や行政組織についてはまだ確定されていない。

*MEE 7 Testo 46* に「マルトゥの王 (LUGAL) アムティ (*A-mu-ti*)」が見られ、同じ文書内でアムティは「ビナシュ (*bi<sub>2</sub>-na-aš<sub>2</sub><sup>ki</sup>*) の王」としても言及される。つまり「ビシュリの王」である (Archi - Biga 2003, 25)<sup>41</sup>。

*MEE 7 Testo 46 (TM.75.G.1769) obv. 1)1 tug<sub>2</sub>-NI:NI 1 ib-2-tug<sub>2</sub>:dar 2)mu-tum<sub>2</sub> 3)A-mu-ti 4)LUGAL 5)bi-na-aš<sub>2</sub><sup>ki</sup> ..... vii 7)1 tug<sub>2</sub>-NI:NI 1 ib-2-tug<sub>2</sub>:dar 8)mu-tum<sub>2</sub> 9)A-mu-ti LUGAL Mar-tum<sup>ki</sup>*

「NI:NI 服1枚と2等級腰衣1枚、ビナシュの LUGAL 職アムティの貢納。・・・ NI:NI 服1枚と2等級腰衣1枚、マルトゥ王国の LUGAL 職であるアムティの貢納。」

アムティはイブリウムの子であった (Astour 1992 55, fn. 335)。エブラの実力者の子息の1人がマルトゥ国とビナシュ双方の行政を担当したということは、両者が同じ地域内か、すくなくともごく近い距離にあったはずで、その上1人の人物が支配することができたというのであるから、マルトゥ国とビナシュは文化的に同質と意識されたのだろう。アッカド王朝4代目のナラム・シンが「*Ba<sub>11</sub>-sa-al* の山地でマルトゥ (MAR.TU<sup>ki</sup>) を討った」と謳い、おなじく5代目シャル・カリ・シャリが「*MAR.TU-am* を *Ba<sub>11</sub>-sa-ar* 山 (／国) で討った年」と年名にした表現に通じるところがあり、それゆえマルトゥ王国はビシュリ地域内か近隣にあったと考えられる。エブラ文書でマルトゥ王国は URU<sup>ki</sup> (「都市」とされるが、ビナシュのほうは URU<sup>ki</sup> とは書かれないので、ビナシュは国名であるより地域名である<sup>42</sup>。

エブラが交易上接触する都市にはかならず商取引を担当する *abba<sub>2</sub>* (「都市の長老」) がおり、エブラはかれらに衣類や布を贈る習慣があった。マルトゥ王国の王 (*en*) と長老に対してもエブラが布地を贈っていることから、マルトゥ王国がエブラの交易相手であったことは明らかである。

*ARET 1 5 obv. xi 3-6: (1+1+1 織物) en Mar-tu (12+12+12 織物) abba<sub>2</sub>-su<sub>3</sub>.*

「マルトゥの王へ3種類の布1枚ずつを贈った。(さらに)長老たちへ3種類の布12枚ずつ(を贈った)。」

エブラが長老たち (*abba<sub>2</sub>*) へ贈った3種類の衣類の数は、たとえば12枚、11枚、9枚というようにその時々で異なるため、贈られた衣類の枚数から長老の人数を割り出すことはできないのだが、エブラ文書に挙がる地名のなかで今日同定できる数少ない都市についてみれば、エマル (*I<sub>3</sub>-mar<sup>ki</sup>*) の長老たちには3種類の衣類を4枚ずつ (ii 14- iii 2)、ハラン (*Ha-ra-an<sup>ki</sup>*) の長老たちへは6種類を2枚ずつ (iv 5-6) となっ

ている。エマルの長老へ贈った衣類は合計 12 枚で、マルトゥ王国の 36 枚よりかなり少ない。マルトゥ王国にはエマルやハラシより多くの長老たちがいたということになる。

マルトゥ王国は重要な祭祀センターでもあった。エマルの王がマルトゥ王国の神々へ贈り物 (nig<sub>2</sub>-AN.AN.AN.AN) をもたらし、(神々の前で) 羊を屠った、という記述がある。儀礼のさい捧げられた贈り物は複数の神に対するものであった。ということは複数の神がマルトゥ王国には祀られていたということで、複数の神殿ないしは神祠が建ち、儀礼をおこなうために人が集る施設を備えた都市と言えよう。

Archi, 1985, no.9 (TM.75.G.1317) obv. xi 3 – rev. i 1 : (1+1+1 衣類) *Ar-šum I<sub>3</sub>-mar<sup>ki</sup> nig<sub>2</sub>-AN.AN.AN.AN Mar-tu<sup>ki</sup> TIL wa udu-su<sub>3</sub> GIN<sub>2</sub>.ŠE<sub>3</sub> (1+1+1) Ba-lu-zu<sub>2</sub>I<sub>3</sub>-mar<sup>ki</sup> in u<sub>4</sub> Mar-tu<sup>ki</sup> TIL.*

「エマルのアルシュムは贈り物(を携えて)マルトゥ王国へ到着し、そしてかれの羊を(奉納した)、(そのかれに衣類 3 種類を 1 枚ずつ支給した)。(衣類 3 種類を 1 枚ずつ) エマルのバルズがマルトゥ国へ到着した日に (バルズへ支給した)。」

アルキは TUN<sub>3</sub>.ŠE<sub>3</sub> を「武器により」と解釈し「エマルがマルトゥを破った」と読んだが、アストゥールは udu-su<sub>3</sub> TUN<sub>3</sub>.ŠE<sub>3</sub> を「羊屠畜(儀礼)を行った」とする。ここは文脈から「かれの羊を貢物として(捧げた)」と読むべきだろう。

さらにマルトゥ王国には交易用の港 (kar) があつたと 1 枚の文書が伝える。

Archi 1985, no. 21 (TM.75.G.10079) rev. ix 2)(1 衣類) *Gur-da-LUM 3)maškim 4)A-mur-Da-mu 5)nig<sub>2</sub>-AN.AN.AN.AN 6)nu-KA 7)udu-udu 8)Mar-tu<sup>ki</sup> 9)kar*

「弁務官のグルダルムとアムルダムが… 神々への贈り物として(数頭の)羊をマルトゥ王国の港へ(もたらした)(その 2 人へ)衣類 1 枚を(支給した)。」

マルトゥ王国に運ばれ保管されたワインをエブラのイビ・ジキルがマルトゥ王国で受け取ったという記録もある。

Archi 1985, no.18 (TM.75.G.249) rev. iv 12) (1+1 衣類) *Iš-ma<sub>2</sub>-Da-mu A-ba-um<sup>ki</sup> šu mu-“taka<sub>4</sub>” ġešt<sub>in</sub> I-bi-Zi-kir in Mar-tum<sup>ki</sup> šu ba<sub>4</sub>-ti*

「アバウム(地名)のイシュマダムはワインを(イビ・ジキルのために)運んだ。イビ・ジキルはマルトゥ国で受け取った。(そのイシュマダムへ) 2 種類の衣類 1 枚ずつを(支給した)。」<sup>43</sup>

前 3 千年紀にはエブラとキシユ・アクシャク (Akšak)・マリとの間で戦いがつづき、前 24 世紀前半にはとくにエブラ～マリ間の抗争が激化した。エブラとマリの勢力圏の境目はエマル (Tell Meskene) とトゥトゥル (Tuttul Tell Bi'a) の間にあつたとアストゥールは推測する。エブラがマルトゥ王国でトゥトゥルと同盟を結んだことを考えれば、マルトゥ王国はトゥトゥルに近い位置にあつたに違いない。

*ARET 8 Testo 12 (TM.76.G.533) rev. iv 6)(1+1+1 衣類) nig<sub>2</sub>-ba 7)Tu<sub>3</sub>-tu<sub>3</sub>-lu<sup>ki</sup> 8)tuš:lu<sub>2</sub> 9)in 10)Mar-tu<sup>ki</sup>*

「衣類 3 枚の贈り物をマルトゥに滞在するトゥトゥルの人 (に贈った)。」

*ARET 8, Testo 17 5) 1 ha-da-um-tug<sub>2</sub>-1 1 sal-tug<sub>2</sub> 1 ib<sub>2</sub>-3-tug<sub>2</sub> dar 1 gu<sub>2</sub>-li-lum a-gug<sub>2</sub>-gug<sub>2</sub> ku<sub>3</sub>-gi sa-ha-wa-2 6) ba-ba 7) tu<sub>3</sub>-tu<sub>3</sub>-lu<sup>ki</sup> 8) ku-LU<sub>2</sub>×BAD 9) in 10) mar-tu<sup>ki</sup>*

「3 種類の衣類 1 枚ずつと黄金製装飾品 1 個を、トゥトゥルのババとマルトゥ王国に居留する ku-LU<sub>2</sub>×BAD (人名) へ(支給した)。」<sup>44</sup>

「大臣」アルムはマリの王イプルル・イル (*Ip-LUL-il*) に勝利し、次代のイブリウムするときには絶頂期を迎え、エブラの影響力はシリアのみならずアナトリアにまで及んだ。このころエブラはマリ遠征に向けてマルトゥ王国と同盟を結んだのである。ある文書に、マルトゥ王国の監督 (ugula) 6 人がエブラで油

を注ぐ清浄儀礼に与り、エブラの主要な神クラ (*Kura*) の神殿で誓約をしたとあり、この誓約が同盟締結の証と考えられる。

Archi 1985 no.10 (TM.75.G.1755) vi 13-vii 1: (6+6+6 織物) *Zi-da-um Sa-a-nu U<sub>9</sub>-a-nu Puzur<sub>4</sub>-ru<sub>12</sub> I-ku-tu-a-bu<sub>3</sub> Ru<sub>12</sub>-zu-ru<sub>12</sub> ugula Mar-tu<sup><ki></sup> lu<sub>2</sub>-du-du nidba<sub>2</sub> i<sub>3</sub>-ġiš wa nam-ku<sub>5</sub> e<sub>2</sub><sup>d</sup> Ku-ra*

「マルトゥの監督 PN<sub>1,6</sub>、(かれらは) やって来た者たち、屠畜儀礼と油を注ぐ儀礼 (を授かり)、クラ神殿で誓約 (をした、その6人に) 3種類の織物1枚ずつを (支給した)。」

エブラはシリアの他の諸都市とも手を結び、それが功を奏し同盟都市の一つトゥトゥルがマリを制圧したときもある。エブラ文書にはマルトゥ王国に滞在するトゥトゥル市民への衣類引渡し記録が見られる。これはエブラ・マルトゥ・トゥトゥル間の同盟関係の証拠となるだろうし、またマルトゥ王国とトゥトゥルとの関係の深さも物語る。

ユーフラテス河が大きく湾曲する位置にあるエマルは、交易品の積み替え地であった。ときおりエマルがマルトゥ王国へ貢物をもたらすのは、下流へ向けて物資を輸送するさいにマルトゥ王国を経由しなくてはならず、そのため良好な関係を築こうとしたのだろう。前2千年紀の文献資料には、シリア北部からの木材や農産物を積んだ船がづぎとシッパル(Sippar)に向かった様子が見られる。前3千年紀のマルトゥ王国はユーフラテス河中流域の重要な経由地であった<sup>45</sup>。アルキが示したマルトゥ王国への言及箇所から、LUGALであるアムティも含め16人の高官や役人の名前が今日明らかとなっており、そのうち5種の人名は言語系統が不明といわれている<sup>46</sup>。そのうえ複数の神々がマルトゥ王国に祀られたということは、ここには複数の交易ネットワークが集結していたということだ。言語学的にみても、アムルとアムルに属さない者とが混在する都市であった証拠である。

マルトゥ王国はどのあたりに位置していたのか。この国にはエマルなどより多くの長老たちがいる、規模の大きな港湾都市であったろう。かれらにエブラは一括して衣類を贈ったのであるから、言語系統が異なる者でも区別なく交易の相手として意識していたと言える。複数のネットワークが集まり、また「トゥトゥルの人」が駐在する地でもあるから、ユーフラテス河とハブル河との合流地点付近であるに違いない。ユーフラテス河右岸にある遺跡のなかから探すなら、規模の点では Thadient 遺跡 (現 al-Mansur) が候補に挙がる (大沼克彦 2007, 2, 写真7)。しかしこの遺跡はすでに *Abat(t)um* に同定されているので、周辺の発掘のさらなる成果に期待する (Astour 1992, 36, fn. 223)。

エブラは結局マリによって王宮を徹底的に破壊され、まもなくアッカドに征服された<sup>47</sup>。そのころマルトゥ王国がどのような状況に置かれていたのかは、エブラ側の史料が途絶えたため分からない。だが、のちにナラム・シンやシャル・カリ・シャリを敵に回し戦ったのであるから、マルトゥの本拠地はビシュリ山に確実に存続していたと言えよう。

## IV 交易の担い手

### IV-1 ワインと冶金術

エブラで使用された武器はおもに槍と剣であった。「マルトゥ剣 (*gir<sub>2</sub> mar-tu*)」の名称はマルトゥ王国の名声屠畜儀礼に用いる短剣と結びついたものだろう。マルトゥ剣はメソポタミアでは見られないが、エブラ文書では頻りに登場する。支給品や贈り物として渡された数、取引のさいの価格の表示、製造するための金属材料の購入または材料の支給についてなどの記録がある<sup>48</sup>。黄金、銀、青銅のマルトゥ剣と記されることが多いが、「黄金 (の)」とは黄金の装飾があるということで、贅沢な装飾を施したそれはウル

の王墓から出土した短剣を彷彿とさせる。

神名とともにマルトゥ剣が言及される箇所を調査してみれば、たいていの場合は奉納品だが、ある神々の儀礼ではマルトゥ剣がなんらかの形でじっさいに使われたようである。たとえば「牡羊1頭、牝羊1頭、銀製小板、ワインとモルツ菓子<sup>2</sup>の清浄儀礼<sup>2</sup>のためのマルトゥ剣1振り」をガミシュ (Gamiš) 神と配偶神の（前でおこなわれる）ある人物の屠畜儀礼のために（奉納した）」とある箇所では、このとき奉納されたマルトゥ剣が屠畜儀礼に使われたと推察される (Pomponio – Xella 1997, 113)。ほかに「[裁判官]の別名を持つ<sup>4</sup>Da-i-in/nu 神でもワインを伴う儀礼にさいしてマルトゥ剣が使われたようである (Pomponio – Xella 1997, 125)。ワインを用いただけの清浄儀礼ならほかの神にも見られるが、マルトゥ剣とワインとの組み合わせはガミシュ神とダイヌ神のそれぞれに1例ずつしかなく、しかも2例とも NI-ab<sup>ki</sup> というところで儀礼があった。NI-ab<sup>ki</sup> は、エブラの北にある太陽神ウトゥ (UD) の祭祀の中心地で、エブラ王室にとっても重要な聖地である (Bonechi 1993, 260)。

ここで屠畜儀礼のためのマルトゥ剣とワインを取り上げたのは、この組み合わせから『イナンナ女神の冥界くだり』(ETCSL 1.4.1 Inana's descent to the nether world) の後半に登場するドゥムジ (Dumuzi) とゲシュティンアナ (Ĝeštin-ana) の姉弟神が想起され、さらにワインを用いる儀式が王権になんらかの関わりがあると考えられるからである。冥界から逃げ出したイナンナ女神によってドゥムジ神は身代わりにされたが、結局はドゥムジ神とその姉ゲシュティンアナ女神が半年ずつ交替で冥界へ下ることによりイナンナ女神は冥界から解放されるのである。姉弟神はそれぞれ「破碎されるブドウの実」と「屠られる羊」の神格化であり、2柱をセットにしておこなう儀礼がウルクにはあったのだろう。この物語では羊とブドウがひどい目に遭わされているかのように見えるが、羊は屠られブドウは砕かれて、はじめて人間の糧となるのである。したがってこの祭りの形式は、羊飼養とブドウ栽培（/ワイン交易）を営む地域を起源とすると考えられる。ウルクは前4千年紀にザグロス山中のゴディン・テペ (Godin Tepe) においてワイン製造をおこなったが (McGovern 2003, 47-48)、その後も継続されたという情報を管見にして知らない。ユーフラテス河からの輸入に切り替わったのではないだろうか。

ウル第3王朝のシュルギ王は「ゲシュティンアナ女神の兄弟」を名乗り<sup>49</sup>、「ニンスムン (<sup>4</sup>Nin-sumun<sub>2</sub>) 女神の子」であることとあわせて<sup>50</sup>、ウルク第1王朝の継承者であることを誇った。<sup>4</sup>Ĝeštin-an-na-lugal という神名があるが、これはまさに王権と結びつくワインを表現しており、ワイン交易が王権の一つの要素になっていた可能性は高い。そのためにシュルギはウルク第1王朝の継承者であることを誇示したのではないのか。かれはおそらく羊飼養とブドウ栽培/ワイン交易が結びつく地域と関わりを持つ王である。シュルギは、マルトゥの言葉を理解する者であるとも述べ、友好的な態度を示す<sup>51</sup>。ここでもウルク第1王朝とマルトゥとの良好な関係が窺える。このようなことからシュシンが築いたと年名に残る「マルトゥの壁」とは、マルトゥに対する防御壁などではなく、マルトゥのための居留地だったのではないかとさえ思えてくるのである<sup>52</sup>。上記のマルトゥ剣とワインの両方を用いる儀礼がおこなわれた地が、ウルク第1王朝の守護神ウトゥと同じ太陽神の聖地であることは興味深い。

ここで1つの疑問が生じてくる。羊の屠畜儀礼に使われるマルトゥ剣とワインの組み合わせがエブラの王権に関わっていたとするなら、一方のウルクにはそれがはたしてあるのだろうかと言えばエブラのような「剣」はなく、そのかわりに剣で屠られる羊の象徴ドゥムジ神がいる。モーレイのつぎのような指摘は、この問題におおいに関わってくるだろう。「前4千年紀前半までのメソポタミアの精錬技術は低く、後半になってもトルコ東部のアルスラン・テペ (Arslan Tepe) 出土の金属製装飾品や象眼のある短剣に及ばな

い。またスサ (Susa) の墓群から金属器の出土は多いがメソポタミアは少ない」(Moorey 1999, 256-257)。高度な技術を持った鍛冶職人が、前4千年紀の南メソポタミアにはいなかったということだろうか。

ここで再度ファラ文書 WF 78 に戻り、鍛冶職人について考えたい。WF 78 で大麦をもっとも多く支給されたのは鍛冶職の監督エンリルウンケンア (<sup>d</sup>En-lil<sub>2</sub>-unken-a) であった<sup>53</sup>。当文書に記載の140人のなかには葦加工職人 (Qd-kups)、建築士 (šidim) が1人ずついるが、支給量はそれほど多くない。すでに見てきたように、この文書はユーフラテス河上流から移住してきた「女主人」とそれに付き従う者や儀礼参加者などであり、とくに鍛冶職人の集団がいるわけではない。どのような理由で鍛冶職の監督が140人の頂点にいるのか理解できないところである。ところが、ほかの文書では鍛冶職人が集団となり働いていたことが分かる<sup>54</sup>。したがって鍛冶職の監督 (ugula-simug) と鍛冶職人のチームとは別行動であったことが判明し、エンリルウンケンアは「女主人」とともに西方からやってきたのではないかとの推理が働く。その根拠は、大勢の水夫や職人たちが大麦支給管理役人たちとともに記録された大型の大麦支給文書 WF 76 に、鍛冶職人エンリル (ウンケンア) と「養子 (mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub>)」のサグウトウダが相前後して記載された真実にある<sup>55</sup>。サグウトウダ (Sag-utu-da) はムヌスアヌクシュの養子であるから、マラダからの移住者だろう。サグウトウダがマラダかさらに上流から鍛冶職の熟練工を連れてきたと考えられる<sup>56</sup>。

『ギルガメシュ叙事詩』には、ギルガメシュが遠征へ向けていざ出立というときに急ぎ武器を製造する場面がある。『古バビロニア版ギルガメシュ叙事詩』第4欄 26-29f 行に「『・・・さあ、友よ、わたしは刀鍛冶のところに急ぐ。われらの前で斧を鑄造してくれるだろう。』かれらは出て行き、刀鍛冶のところに急いだ。職人たちは座って、相談し、大斧を鑄造した。」とある (月本 1996, 192)。この行を見るかぎり、ウルクでは日常的に武器を大量に備えておく習慣がなかったようである。

ファラ文書の記述に基づけば、鍛冶職の熟練者がユーフラテス河上流からの移住者とともにやってきたことはほぼ間違いない。そのときワインはどうであったのか。WF 78 の第3セクションで、養子の肩書を持つアマルク (Amar-ku<sub>3</sub>) につづいて、大麦支給量が同量であることから一対と意識されていたと思われるアンウルシェ (AN-ur<sub>2</sub>-še<sub>3</sub>) が見られる<sup>57</sup>。かれには (a)-ġeštin と肩書がある。エブラ文書によれば、モルツ菓子 (GIŠGAL-titab) と ġeštin-a を用いた清浄儀礼があった。ġeštin は「ワイン」を意味する語であり、ポンポニオークセラは儀礼に用いられる ġeštin-a を「薄めたワイン」としている (Pomponio - Xella 1997, 179)。エブラでは「薄めたワイン」そのものを指す a-ġeštin の語が、メソポタミアでは「薄めたワイン」を使用する職名ないしは儀礼の担い手を指す語へと変化し、アンウルシェの肩書に使われたのだろう。たのだろう。養子と a-ġeštin 職との一対は、両者がともに移動してきたことを物語る。ワインは確実にファラへと輸入されていたのである。この遺跡からは「宴会の図」が描かれた円筒印章図や印影が出土しており、そこにはストローで飲むビール壺のほかにワイン用杯も見える<sup>58</sup>。

ワインについてファラではそれ以上の情報が得られないので、前2千年紀のアムル人王朝が群立していた時代のワイン交易に目を向けてみよう。マリはアムル人王朝の下で再び交易の拠点に再び咲き、アムルを名乗るバビロンのハンムラビ (Hammu-rābi) もシッパル経由でワインを手に入れることができた。ユーフラテス河上流から1000リットル入り容器で輸入されたワインは、マリの王宮内で貯蔵され祭祀や宮廷での宴会で消費されたが、交易品としてさらに下流のシッパルへと送られた。シッパルではユーフラテス川上流との取引を一手に引き受ける交易商人のギルドが活動していた (McGovern 2003, 171)。ブドウ栽培がさかんであったパレスティナ方面からではなく、ユーフラテス河上流域よりさらに北のアルメニア方面からワインは運ばれた。マリの王宮での貯蔵形態がアナトリアのそれとよく似ているという (Ibid. 172)。

マリのジムリ・リム (Zimrī-Lim) が勤しんだワイン交易の状況は、そのまま前3千年紀半ば、マルトゥがファラ文書に記された時期のワイン交易にも当てはまるだろう。

マリではワインの値段が3倍に吊り上がった。それはワインそのものの価値よりも、価格における輸送技術の値段の占める割合が大きかったためで (McGovern 2003, 170-171)、つまり輸送距離が増せばそれだけ値段が上がったのである。ユーフラテス河中流域では、とくにハブル河の河口からマリまでの間で蛇行が激しい。この間船荷を積んだ舟を無事に航行させることができるのは、特殊な技術を持った者である。その技術は独占されてもいただろう<sup>59</sup>。ところでエブラの行政組織について見てみると、「王宮 (e<sub>2</sub>-en)」「主要建物 (e<sub>2</sub>-mah)」「車管理所 (gigir<sup>ki</sup>)」「牡牛の家 (e<sub>2</sub>-am)」から成るアクロポリスと、4部署に分かれた「村落行政 (e<sub>2</sub>-duru<sup>ki</sup>)」から成っていた (Arcari, 1988, 125)。構成部門の名称を見れば一目瞭然だが、エブラは河川輸送に携わる部署を備えていない。ワイン交易はもっぱら河川輸送に委ねられていたから、エブラはワイン交易を自身でおこなうことはできず、ユーフラテス川沿いの交易都市から輸入せざるをえなかったのである。ユーフラテス河上・中流域とメソポタミアとの交易を仲介したマルトゥは、ユーフラテス上流域の冶金工房と接触し、鍛冶師を雇いファラまで連れてくることは可能だったろう。メソポタミアで珍重されたワインも重要だったが、金属材料と鍛冶技術も貴重な交易品であった。

#### IV-2 2柱のマルトゥ神

神名リスト AN-Anum には「<sup>d</sup>Ensi<sub>2</sub>-gal-abzu すなわち <sup>d</sup>Mar-tu、<sup>d</sup>Ensi<sub>2</sub>-mah すなわち <sup>d</sup>AN.MAR.TU」とあり<sup>60</sup>、古バビロニア期の神名リストにも、アン神のサークルのなかに <sup>d</sup>MAR.TU、<sup>d</sup>AN MAR.TU とある。あたかも2種類のマルトゥ神がいるようだ (Edzardt 1989, 434. Litke, R.L. 1998)。『マルトゥの結婚』の冒頭にある「(その当時) イナバであったが、キリタブ (Kiritab) ではなかった」との一文も、2種類のマルトゥを示しているように思われる<sup>61</sup>。イナバ (I<sub>3</sub>-na-ab<sup>ki</sup>) とはシッパルの近郊 Ilip を指す (RIA vol. 9, 324)。神名リストにおいて、マルトゥのイナンナ女神とイリブ (NI-lip<sup>ki</sup>) のイナンナ女神が相前後して記されているところを見れば<sup>62</sup>、イリブはマルトゥと関わりが深かったようだ。イリブとは北メソポタミアの都市でアラフトゥム運河の途中にある。上流はシッパルに、下流はマルトゥ神の母神ウラシュ (Uraš) の都市ディルバト (Dilbat) へと通じる。イリブはまた古バビロニア期の一時期マナナ (Ma-na-nā) 王国の都となり、「マルトゥの神殿を建てた」とする年名も残る (Frayne 1992, 6, Edzard 1989, 332)。この都市は Ki-bala-maš-da<sub>3</sub> と呼ばれていた時期もあるが、それについてエツァルトは、キシュとフルサグカラマ (Hursaġ-kalama) のような、イリブとあわせて二重構造になった都市だろうと推測する (Edzard 1980b, 587)。イリブはキシュへ向かうもう1本の運河との合流地点でもあり、運河が二股に分かれる地点に新都市が築かれた可能性はたしかにある (Frayne 1992, 6, 22, MAP 2)。もしそうであれば、その新都市は対岸のイリブと連携して、シッパルからの物資を下流のディルバトともう一方のキシュ方面へ送る積み替え作業をおこなう重要な港として機能しただろう。Ki-bala-maš-da<sub>3</sub> は文字通りには「ガゼルが渡る場所」と読むことができ、動物が渡河する地点と解釈されるが、あるいはマルトゥをガゼルとも表現するので、マルトゥが家畜の群れを舟で対岸へ渡す地と解釈することもできる。

一方のキリタブはカザルからディルバト、さらにマラダへ至るカザル運河沿いにあり、Bara<sub>2</sub>-<sup>d</sup>Nu-muš-da 「ヌムシュダ神の高座」とも言われるように、ヌムシュダ神がその都市神であった (Frayne 1992, 18, 23)。同じくヌムシュダ神を祀るカザルはキリタブの上流にあり、両都市の領域は接していたようだ。『マルトゥの結婚』ではマルトゥ神は母神ウラシュを離れカザルの支配者の家の一員になった。その変化は



dMAR.TU から dAN.MAR.TU への変化を説明しているのではないだろうか。

今日知られるマルトゥ神に捧げる「讃歌」にも 2 種類ある。便宜上『Martu A』『Martu B』とし、『Martu B』は残存部分が少ないためここでは参考として紹介するが、両者の間には明らかに相違が認められる。父は両者ともにアン (An) 神である反面、母は『Martu A』ではニンフルサグ (<sup>d</sup>Nin-hur-sag)、『Martu B』はウラシュ (<sup>d</sup>Uraš) となっている。また、『Martu A』では「ライオンの頭をした英雄であり、戦いにおいて王の助けとなる」と表現され、あたかも王に近侍する近衛兵のようである<sup>63</sup>。『Martu B』は残存部分に姿についての描写はないが、こちらはエンリル神がマルトゥに対しやさしく接する、とある<sup>64</sup>。

<sup>d</sup>Mar-tu と <sup>d</sup>AN.MAR.TU の一対、そして先に触れたニンフルサグ女神とウラシュ女神、キリタブとイリブの関係というように、マルトゥがあたかも双子であるかのように二重の表現が多い。マルトゥに起きたなんらかの変化を反映しているのだろうが、メソポタミアの住民が抱いたマルトゥのイメージに二面性があることにも相通じる特徴である。

## V 結語

ユーフラテス河中流域から木材、石材、ワインを下流へと輸送するためには、それに見合う舟と装備を造り出す造船技術、そして、蛇行する川筋を乗り切る操舵術を備える専門職が必要とされた。このあたりの蛇行の激しさは驚くばかりだ。マルトゥの操舵術を発達させたきっかけは、そのような河で羊・山羊の群れを渡河させるために利用した渡し舟から始まったのではないか。少なくとも河川輸送を支配したマルトゥは、「遊牧民」の枠組だけでは括れない。半農半牧を営むビシュリ山北麓に依拠しつつも、港湾都市マルトゥ王国においてはユーフラテス河の物流を支配し、その上アナトリアからユーフラテス河上流・中流域にかけての一带から金属材料と鍛冶職人を運ぶ役割は、マルトゥが独占したと言ってよいだろう<sup>65</sup>。前 4 千年紀のシリアへ進出したウルクにしても、かれらの操舵術や軍事力を排除することはできず、そのためウルクはユーフラテス上流域・中流域からの物資搬入はマルトゥに頼らざるを得なかった。ウルクは穀倉地帯ではあったが、冶金術、貴金属器製造技術、石材・木材加工技術にかんしてはすべて輸入しなければならなかったのであるから、中流域の河川輸送を支配したマルトゥがウルクの繁栄の一翼を担ったと言っても過言ではないだろう。

## 補記

エブラの即位式関連支出会計文書 MEE 7 Testo 34 では、曲剣は下げるベルトと鞘が必ずセットになっていた。それは曲剣が正装用の飾り物であったからだ。(図 2 正装した新アッシリア王が左手に曲剣を下げる。) この文書にマルトゥ剣と曲剣が並んで記されていることで、マルトゥ剣は曲剣とは異なる形状、すなわち刀身部分が直身タイプであると確信される。またエブラ文書では羊の屠畜儀礼とマルトゥ剣との組み合わせが多いため、たとえば「ウルナンムの建築碑」‘poor side’ の 2 段目に描かれた屠畜儀礼に用いられる短剣の形状に類似するものであろう。(図 1 中央 2 人のうち左側の、家畜の足を持つ人物が腰帯に差した短剣)

\* 本稿執筆にあたり、総括班研究代表者大沼克彦先生から貴重なご助言を賜った。また、岡田保良先生には国士館大学修士課程シリア実習旅行へ参加を許可していただき、ユーフラテス河とビシュリ山を目の当たりにしたことは執筆におおいに役立った。大沼・岡田両先生に謝意を表します。

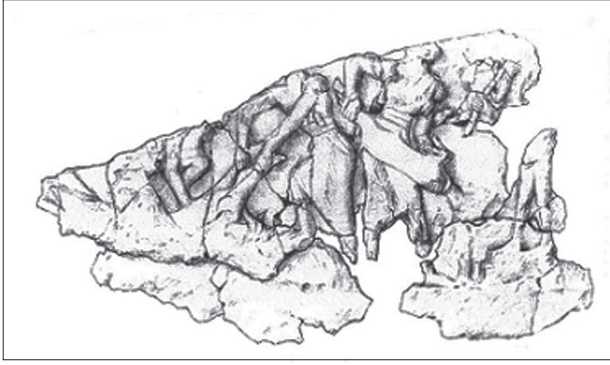


図1 Winter 2001, PL29



図2 Assurnasirpal II of Assyria  
Black - Green 1992, p95

注

<sup>1</sup> これまでの研究の概略についてはたとえば山田 2006 参照。

<sup>2</sup> **141)** ud-ba kur šubur<sup>ki</sup> ha-ma-zi<sup>ki</sup> **142)** eme ha-mun ki-en-gi kur gal me nam-nun-na-ka **143)** ki-uri kur me-te-gal<sub>2</sub>-la **144)** kur mar-tu u<sub>2</sub>-sal-la nu<sub>2</sub>-a **145)** an ki niĝin<sub>2</sub>-na uĝ<sub>3</sub> saj sig<sub>10</sub>-ga **146)**<sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-ra eme l-am<sub>3</sub> he<sub>2</sub>-en-na-da-ab-dug<sub>4</sub> 「その当時、シュブルとハマジの国、言葉が調和するキエンギ、(すなわち) 高貴なメ (divine power) であるところの偉大な国、キウリ、ふさわしきものが (すべて) 備わった国、マルトゥの国、(すなわち) 安寧である、そして天と地すべてにおいて人々が (自身を) 委ねる、エンリル神に対してみな一緒になって一つの言葉で話しますように。」 ETCSL は、142 行の eme ha-mun を 141 行の kur šubur<sup>ki</sup> ha-ma-zi<sup>ki</sup> の形容句としてみなし「多くの言葉が話されるシュブルとハマジの国」と訳すが、筆者はそれよりも eme ha-mun を ki-en-gi の形容句と解するジェイコブセンによる訳 “bilingual Sumer” を参考にした。(Jacobsen 1987, 289.)。ki-en-gi・ki-uri を「シュメールとアッカド」とする解釈についても、筆者は以下の問題が解決されない間は全面的に支持することはできない。そのため「キエンギ」「キウリ」としておく。問題点とは、アブ・ツアラビーク出土の「都市と都市神リスト」に ki-en-gi が 3 箇所あることである。そのうちの 1 つはニサバ (Nisaba) 女神を祀る都市エネギル (Enegir) であるので、3 箇所の ki-en-gi とはニサバ女神の祭祀でつながるネットワークであるのかもしれない。

- <sup>3</sup> Frayne, 1992 参照。
- <sup>4</sup> ファラ文書の年代については研究者の間で紆余曲折があったが、1970年代にビッグスなどによるウルナンシェ以前説（前2550年以前）が主流となった（Biggs 1974, 24-26）。筆者はしかしながら、人名追跡、金属の名称の変遷等々に基づき、ウルナンシェ以降の、エンアナトゥム（En-Anatum）からエンメテナ（En-metena）のころまでと考える。堀岡 2006 参照。初期王朝期マリ文書約50枚をシャルペンが出版した（Charpin 1987, 1989）。
- ファラ遺跡は古代都市シュルツパクに同定されたが、ファラ文書を見るかぎり、これらの文書群はシュルツパクの都市行政文書であるよりは、シュルツパクもその一員であるところの河川輸送ネットワークを管理する行政センターの保管文書である。ファラ・ネットワークはウルクを宋主とし、ニツプル・アダブ・ウンマ・ラガシュそしてシュルツパクで構成されていた。ファラ遺跡と都市シュルツパクの位置関係についてであるが、ファラ文書の時期には、シュルツパクの隣接地に各方面から集まる交易ネットワークがそれぞれの居留地を構えており、そこにファラ・ネットワークの事務所（ファラ行政センター）も置かれていたと筆者は考える。
- <sup>5</sup> ファラ行政経済文書にはIBを肩書として付される者が17人いる。AN-nu-me(AN.IB), AŠ-mah(IB. <sup>d</sup>PA), Dumu×nun.šita(IB), Gur<sub>2</sub>-gur<sub>2</sub>(IB), GIŠ.PI.LA(IB), Ku-li-kalam(IB), Lu<sub>2</sub>-AŠ-sag-da(IB), Lugal-<sup>d</sup>Anzu(IB), Lugal-he<sub>2</sub>-gal(IB), Nigin<sub>3</sub>-diri(IB), Nin-<sup>d</sup>Anzu(IB), Nin-ul<sub>4</sub>-gal(IB abgal), Nin-ur-sag(IB gal-niĝir), <sup>d</sup>Sud<sub>3</sub>-a<sub>2</sub>-mah<sub>2</sub>(IB abgal), <sup>d</sup>Sud<sub>3</sub>-da-mah-di(IB maškim), Ur-Dumu-zi(IB), Zi-zi(IB)。
- <sup>6</sup> Astour 1992, 53 を参照。
- <sup>7</sup> ファラ文書で言及される E<sub>2</sub>-geme<sub>2</sub>（「王妃の館」）が他国の王妃の館と取引したとしても不思議はない。しかしシュルツパクの王妃の館へ他国の「女主人」が訪問したことを示唆するような記述はいまのところ認められない。たとえあったとしても、ファラ文書がシュルツパク市の行政府や王妃の館で作成された保管文書ではないため、残らないのである。
- <sup>8</sup> エングルドはIBに“household?”「経営体」の訳をつけたが疑問符つきである。
- <sup>9</sup> 大麦支給文書 ① WF 78 rev. ii 6)3(gm) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> 7) mar-tu 8)AK-<sup>d</sup>Tu engar ② WF 72 v 2) 2(bariga)4(ban<sub>3</sub>) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> 3) Utu-ur-sag ③ WF 74 rev. ii 1) [2](gm) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> ④ WF 77 rev. iv 6) 2(gm) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> ⑤ TŠŠ 65 rev. iii' 1') [ ] (gm) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> 労働者割り振り CT 50, 1 iii 5) 15(guruš) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> WF 149 iv 1) 2(ma-na) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub>.
- <sup>10</sup> Gelb, I.J.-Steinkeller, P.-Whiting, R.M. 1991, no.32 Adab Clay Fragment I.
- <sup>11</sup> 第2セクションの「水夫」とその配下および mar-tu WF78 viii 7) 1½(gm) 8) lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal ..... rev. i 1) 1½ (gm) PN<sub>2</sub> 2-7) ½(gm) 2(bariga) PN<sub>3,8</sub> 8) lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal ..... ii 3-4) 1(gm) PN<sub>9</sub> 5) lu<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gal-gal 6) 3 (gm) <sup>2</sup>A<sub>3</sub>-su<sub>13</sub>-aĝ<sub>2</sub> 7) mar-t[u] 8) AK-<sup>d</sup>Tu engar 9-10) ½(gm) 2(bariga) PN<sub>10,11</sub> 11-12) ½(gm) PN<sub>12,13</sub> 13) ½(gm) 2(bariga) PN<sub>14</sub> ..... iii 1) ½(gm) 2(bariga) PN<sub>15</sub> 2) ½(gm) PN<sub>16</sub>.
- <sup>12</sup> 6人中 Ama-a-si が明らかに女性名、先頭の Za<sub>3</sub>-ta もおそらく女性名。
- <sup>13</sup> ファラ文書ではギバルを KISAL の文字で表す。ギバルについてはウルのそれがよく知られているが、ウルクにもあった（Sallaberger 1993, 212）。また文学作品『エンメルカルとアラッタの君主』にはアラッタのギバルが登場する。ウルクとアラッタのギバルはイナンナ女神に関わる施設であり、貢納を集める場所である。ファラ文書で言及されるギバルはウルクのギバルであろう。
- <sup>14</sup> Charpin 1987, no.9 3) 0,0.1 še-ziz 4) na-ni 5) iš mar-tu.

- 15 v 2) iš ur<sub>3</sub>:gu<sub>4</sub>:ma<sub>2</sub> “pour la barque sacrificielle” 「屠蓄儀礼のマグル船に対する (支給)」 iš “vers, pour” Charpin 1987,75 および 89。
- 16 ETCSL 2.1.5 The cursing of Agade 46) mar-tu kur-ra lu<sub>2</sub> še nu-zu 47) gud du<sub>7</sub> maš<sub>2</sub> du<sub>7</sub>-da mu-un-na-da-an-ku<sub>4</sub>-ku<sub>4</sub> 「山のマルトゥ、穀物を知らない者。状態の良い牡牛と状態の良い牡山羊を連れて彼女 (イナンナ女神) のところへ入ってゆく。」
- 17 MAD 5, 13 (Kish 1930, 148) 5) 1 DINGIR-GAR<sub>3</sub> X 6) UGULA.MAR.TU.
- 18 WF 78 のアスアグが他文書で <sup>GENE2</sup>kar-kid<sub>3</sub> の肩書を持つ女性グループの先頭 (すなわちリーダー格) に記される (WF 74=EDATŠ 6 rev. ii 1)。<sup>GENE2</sup>kar-kid<sub>3</sub> は「娼婦」「聖娼」と訳されることが多いが、しかしじっさいに売春行為が認められることはないとの意見もある (Yigit 2008 参照)。初期王朝期ギルスでは <sup>GENE2</sup>kar-kid<sub>3</sub> は公的機関から大麦を支給されており (Pomponio, 1986, 63-66)、その状況はファラ文書においても同様である。ギルスでもファラでも「娼婦」であるよりは、ある程度身分の高い祭礼に参加する女性であるが、祭礼での役割は不明。また kar-kid<sub>3</sub> の意味も不明である。
- 19 湾岸ではウンム・アン＝ナル島へ銅をもとめてイランから支配者層が植民した。故国には一族のごく一部を残すのみで、ほとんど一族を挙げて移住したという。以上後藤健氏の私信による。
- 20 耕地 2 イクを購入した GAN-girim<sub>x</sub> WF 33 rev. iv 1。耕地割り当て文書: TSŠ 53 i 1) 10 iku 2) Nin-unken-a, TSŠ 568 i 1) 18 iku 2) Nin-ul<sub>4</sub>-gal. このほか断片的なものがある。1 イク ≡ 3600 平方メートル。ファラ遺跡の発掘報告書から類推するに、ウルに建つギバルのような建物はまだなかったと思われる。ファラ遺跡の発掘に関しては、Martin 1988 を参照。
- 21 イリブ、マラダについて IV-2 参照。
- 22 第 1 セクションの先頭は「貯蔵庫 (責任者) ġanun」の肩書を持つ者であるが、摩耗のため人名は見えない。
- 23 <sup>d</sup>Nin, <sup>d</sup>Gibil<sub>6</sub> が 1 行に取まれば「ギビル神のニンディンギル神官」と解釈することもできるが、わざわざ行を分けてあるので、やはり女神と男神のカップルである。WF 78 vi 2) 3(gm) <sup>d</sup>Nin 4)<sup>d</sup>Gibil<sub>6</sub>.
- 24 ETCSL c.1 .2.2 Enlil and Sud, Streck 2001, 631.
- 25 ポンポニオは、シュルツパク (=ファラ) はかつてキシユの王 (LUGAL) の支配下にあったが、ファラ文書のころにはキシユの影響力は減少した、と述べた (Pomponio-Visicato 1997, 17)。たとえそうであってもキシユの王がシュルツパクにいたわけではない。
- 26 WF 33 v 3.
- 27 WF 78 rev. iii 2) 1½(gm) <sup>d</sup>KIB.NUN-ur-sag.
- 28 上記 II-4 参照。SAL.UŠ を mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub>-sa/sa<sub>2</sub> の省略形と解釈する。mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub> (SAL.UŠ)-sa/sa<sub>2</sub> はある家の娘と結婚してその家の家族になる「婿養子」を意味する。婿養子に入っても、結婚相手の娘とは姉弟 / 兄妹とみなされたようだ。
- 29 家名が肩書になる例: Saġ-utu-da Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub> WF 106 rev. ii 2-3. サグウトウダはムヌスアヌクシュ家の婿養子であることは以下から分かる: Saġ-utu-da mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub> Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub> WF 61 ii 10-12; 76 vi 10-12. 以上の 3 枚はパラレルな文書であり、サグウトウダは同一人物である。婿入り先の家名が本人名として使われる例: Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub> mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub> WF 75 iv 3-4.
- 30 Munus-a<sub>2</sub>-nu-kuš<sub>2</sub> が記された Ashm. 1924-468 は 19(+3) 種の人名中 11 種がファラと共通。
- 31 ほかに AAICAB Pl.1 Ashm. 1924-462 では記載の 44 種 (摩耗がなく完全に読める人名) の人名のうち

- 30種がファラと共通する。A-ul<sub>4</sub>-gal, AK, AK.AN, Al-lum, Amar-šuba<sub>3</sub>, AN-nu-me, Ba-ŠE<sub>3</sub>, *Du-du*, E<sub>2</sub>-ki-ba, E<sub>2</sub>-na, E<sub>2</sub>-šita, Ezen-la-la, Har-tu, Inim-ni-zi, *Lu-lu*, Lu<sub>2</sub>-lum-ma, Lu<sub>2</sub>-su<sub>13</sub>, Lugal-men, Me-hur-saĝ, Me-Utu, Pa<sub>4</sub>-kalam-du<sub>10</sub>, Pa<sub>4</sub>-ur-saĝ, RI.RI, Ša<sub>3</sub>-gu<sub>2</sub>-ba, UD.DI, Ur-e<sub>2</sub>-gal, Ur<sub>2</sub>-mud, Ur<sub>2</sub>-NI, Ur-Utu, Utu-šita.
- 32 *dumu* Amar-<sup>d</sup>Gu<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> WF 33 v 3.
- 33 <sup>d</sup>Tu を含む人名：たとえば AK-<sup>d</sup>Tu, Amar-<sup>d</sup>Tu, Ur-<sup>d</sup>Tu. 神名の例：大型神名リスト SF 1 i 19)<sup>d</sup>Tu, 魚を食す神名リスト SF 6 iii 1)<sup>d</sup>Tu 2)<sup>d</sup>Tu.
- 34 作品の内容は Electronic Text Corpus of Sumerian Literature 1.7.1 The marriage of Martu, 前川 2006 を参照。
- 35 96) meš<sub>3</sub>-ki-aĝ<sub>2</sub>-ga-še-er 97) *dumu* <sup>d</sup>utu en-am<sub>3</sub> 98) lugal-am<sub>3</sub> 99) meš<sub>3</sub>-ki-aĝ<sub>2</sub>-ga-še-er 100) ab-ba ba-an-kur<sub>9</sub> 101) hur-saĝ-še<sub>3</sub> ba-an-ed<sub>3</sub> 102) en-me-er-kar<sub>2</sub> *dumu* meš<sub>3</sub>-ki-aĝ<sub>2</sub>-ga-še-er 103) lugal unug<sup>ki</sup>-ga lu<sub>2</sub> unug<sup>ki</sup> 104) mu-un-du<sub>3</sub>-a 105) lugal-am<sub>3</sub>
- 36 Meš-ki-aĝ-ga-šer entered the sea and disappeared.
- 37 ETCSL c.2.1.1. 112) <sup>d</sup>gilgameš<sub>3</sub> 113) ab-ba-ni lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>.
- 38 ePSD を参照。abba [FATHER] wr. ab; ab-ba; abba<sub>2</sub> “old (person); witness; father; elder; an official” Akk. *abu*; šību, ab [SEA] (Old Akkadian, Old Babylonian) wr. ab; a-ab-ta “sea” Akk. *Tāmtu*.
- 39 Westenholz 1999, 51-54. 古バビロニア期のコピーが残ったもので、同時代史料ではない。
- 40 国政を掌握していたアルムとイブリウムーイビ・ジキル父子について文書ではなんら肩書を記すことはなかった。そのため現代の研究者は3人を便宜上「大臣 “minster”」と呼んでいる。
- 41 Binaš をエブラの北東 20km にある現代の Binas とする見方もある。Cf. Bonechi 1993, 70, もし現代の Binas と *Bi-na-aš<sub>2</sub>* の一致が証明されるなら、筆者はエブラ近くにもビシュリの飛び地があったと解する。
- 42 TM.75. G. 2377 obv.i 2 *Mar-tum<sup>ki</sup>* (... uru<sup>ki</sup>-uru<sup>ki</sup> šu mu-nigin<sub>2</sub> <sup>d</sup>NI-da-bal NI-da-bal 神はエブラの主要な神のひとつ。その聖所がエブラ領内の随所にあった。この箇所でも重要なことはマルトゥ王国にもニダバル神の聖所があり URU<sup>ki</sup> と表現されていることである。
- 43 常木晃氏より、北シリアのエブラからシリア中央部に位置するマルトゥ国へエブラの為政者がワインを入手するために出向くのは実情に合わないのではないかと重要な指摘があった。赤司千恵氏の調査では、ユーフラテス河中流域のガーネム・アル・アリ遺跡周辺からブドウの種子が発見されたとのことだ。ブドウの実が他地域から搬入された可能性もあるので一概に言えないが、ユーフラテス河中流域でブドウ栽培がありエブラはここからワインを入手した可能性が考えられる。しかし前2千年紀にマリのアムル人がワイン取引を独占した事実があるので、いまのところは、前3千年紀にも同様の状況があったと仮定して話を進めたい。
- 44 織物については、Sollberger 1986, 6-8 参照。
- 45 とくにシリア北部産の農産物（穀物・ワイン・香料）の積出港として機能した。クレンゲル 1985, 100.
- 46 *Da-a-nu, Lu-du-ma-nu, Sa-a-nu, U<sub>9</sub>-a-nu, Zu-bu-AN*, Archi 1985, 11.
- 47 これまでは初期王朝期のエブラの破壊はアッカド王によるものとされていたが、アルキによればエブラの王宮を破壊したのはマリ王ヒダール (*Hida'ar*) で、そのマリはエブラ終焉後 13 年たってからサルゴンに制圧されたという (Archi – Biga 2003, 35)。
- 48 gir<sub>2</sub>-mar-tu の支給については言及箇所が多すぎるためここでは逐一引用しないが、たとえば MEE 7

Testo 34 ではいろいろな種類のマルトゥ剣があり相当な数が製造されたことが分かるので、エブラ領内に工房があったと推測される。しかし考古学上の報告を筆者はまだ知らない。

<sup>49</sup> 『シュルギ讃歌 (Šulgi C)』 ETCSL c. 2.4.2.03 93 行目。

<sup>50</sup> Ibid. 94 行目。

<sup>51</sup> Ibid. 121-122 行目。

<sup>52</sup> シュシン治世時の皇太后アビ・シムティ (Abi-simti) はハブル川流域出身と言われる。エブラ文書から類推される居留地建設とは、旧来の都市の近くへ BAD<sub>3</sub><sup>(ki)</sup> を建設する方法。

<sup>53</sup> 鍛冶職の監督であることはロバ貸与文書からわかる。WF 25 rev. iii 1) <sup>d</sup>En-lil<sub>2</sub>-unken-a ugula-simug.

<sup>54</sup> 銅支出文書 TŠ 90 では、奥書き (rev.iii 3) に simug lu<sub>2</sub>-kas-nag (「鍛冶師 (たち)、ビールを『支給された』者」) とある。ビールを支給されるのは比較的身分が高い者で、アッカド期ニップルでは外国からやって来た役人などに支給された。

<sup>55</sup> WF 76 vi 8) <sup>d</sup>En-lil<sub>2</sub>(-unken-a) 9) simug 10) Saĝ-utu-da 11) mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub>.

<sup>56</sup> このサグウトダは上記 II-5 で触れたムヌスマクシュの養子である。都市や施設を建設する道具を製造するために鍛冶職の熟練者が出張してくるのであって、建築士などは別のルートで雇われる。

<sup>57</sup> WF 78 (EDATS 29) rev. iii 15) ½(gm) 2(bariga) Amar-ku<sub>3</sub> 6) mi<sub>2</sub>-us<sub>2</sub> 7) GAR-sanga iv 1) ½(gm) 2(bariga) AN-ur<sub>2</sub>-še<sub>3</sub> 2) ĝeštin 3) E<sub>2</sub>-na-lu-lu 4) engar.

<sup>58</sup> たとえば Martin 1988, 276, no.534, 536.

<sup>59</sup> 蛇行した河で舟を進める方法について、Margueron 2004, 77-78 参照。エマルから上流付近も蛇行が激しいので、このあたりにもマルトゥがいただろう。

<sup>60</sup> AN-Anum II 292f. cf. Edzardt 1989, 434. Litke, 1998. エツァルトはマルトゥ神の2つの相を表すとする。

<sup>61</sup> ETCSL c.1.7.1 The marriage of Martu 1) i<sub>3</sub>-na-ab<sup>ki</sup> i<sub>3</sub>-me-a kiri<sub>8</sub>-tab nu-me-「a」.

<sup>62</sup> Edzard 1980a, 52. エツァルトが Ilip の項で Inap? とするのが NI-na-ab である。

<sup>63</sup> ETCSL c.4.12.1 “A šir-gida to Martu (Martu A) 33) saĝ piriĝ ur-saĝ-ĝa<sub>2</sub>-am<sub>3</sub> me<sub>3</sub>-a a<sub>2</sub>-tah<sup>l</sup>lugal-<sup>l</sup>[la ...].

<sup>64</sup> ETCSL c.4.12.2 A hymn to Martu (Martu B) Segment A 6) mi<sub>2</sub> dug<sub>4</sub>-ga kur gal <sup>d</sup>en-lil<sub>2</sub>-le nam dug<sub>3</sub>-ge-eš tar-ra. 「エンリル神がやさしくいたわり、良き運命を定めた (者)」 『Martu A』 ではエンリル神への言及はない。

<sup>65</sup> ユーフラテス流域はもともと自立的に発展した地域である。南メソポタミアで銅などへの需要が高まり、ユーフラテス流域の住民がアナトリア方面から南へ向けて原料を仲介する役割を果たした。Cooper 2006, 279.

## 略号

雑誌名の略号は Pennsylvania Sumerian Dictionary に準じる。

ePSD The Electronic Pennsylvania Sumerian Dictionary.

EDATŠ Pomponio, F.-Visicato, G. with a contribution by Albri, A. 1994 *Early Dynastic Administrative Tablets of Šuruppak*, Napoli.

ELTS Gelb, I. J. - Steinkeller, P. - Whiting, R. M. 1991 *Earliest Land Tenure Systems in the Near East: Ancient Kudurrus, OIP 104*, Chicago.

ETCSL Electronic Text Corpus of Sumerian Literature.

- SF Deimel, A. 1923 *Die Inschriften von Fara II: Schultexte aus Fara*, WDOG 43, Leipzig.
- TŠŠ Jestin, R., 1937 *Tablettes sumériennes de Šuruppak conservées au Musée de Stamboul. Mémoires de l'Institut français d'archéologie de Stamboul III*, Paris.
- WF Deimel, A. 1924 *Die Inschriften von Fara III: Wirtschaftstexte aus Fara*, WDOG 45, Leipzig.

## 文献

- Arcari, E. "The administrative Organization of the City of Ebla", *Heidelberger Studien zum Alten Orient* 2, 125-129.
- Archi, A. 1985 *Testi amministrativi: Assegnazioni di tessuti (Archivio L. 2769) (=ARET 1)*, Roma
- Archi, A. 1988 *Testi amministrativi registrazioni di metallic e tessuti (Archivio L.2769) (=ARET 7)* Roma.
- Archi, A. 1985a "Mardu in the Ebla Texts", *Orientalia* 54, 7 -13.
- Archi, A. 1985b "Les rapports politiques et économiques entre Ebla et Mari," *Mari—Annales de Recherches Interdisciplinaire* 4, 63-83.
- Astour, M. C. 1992 "An Outline of the History of Ebla, Part 1", *Eblaitica* 3, Indiana, 3 -82.
- Astour, M. C. 1995 "Overland Trade Routes in Ancient Western Asia", in J. M. Sasson ed. *Civilization of the Ancient Near East*, New York, 1995, 1401-1420.
- Astour, M. C. 2002 "A Reconstruction of the History of Ebla (Part 2)", *Eblaitica* 4, Indiana, 57-195.
- Black, J. – Green, A. 1992 *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, London.
- Biga, M.G. 1988 "Frauen in der Wirtschaft von Ebla," *Heidelberger Studien zum Alten Orient* 2, Roma, 2 159-171.
- Biggs, R.D. 1974 *Inscriptions from Tell Abū Salābīkh*, OIP 99, Chicago.
- Bonechi, M. 1993 *I nomi geografici dei testi di Ebla*, *Repertoire Geographique des Textes Cuneiforms – RGTC* 12/1, Göttingen.
- Buccelatti, G. 2009 "The Origin of the Tribe and of 'Industrial' Agropastoralism in Syro-Mesopotamia," Barnard H. – Wendrich W. ed. *The Archaeology of Mobility: Old World and New World Nomadism*, Los Angeles, 141-159.
- Candy, J.V. 2001 Candy, J.V., 2001, *The "Ur-Nammu" Stela*, Philadelphia.
- Charpin, D. 1987 "Tablettes présargonique de Mari," *MARI* 5, 65-125.
- Charpin, D. 1989 "Nouvelles tablettes présargonique de Mari," *M.A.R.I.* 6, 245-251.
- Cohen, M. 1993 *The Cultic Calendars of the Ancient Near East*, Bethesda.
- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*, New York & London.
- D'Agostino, F. 1996 *Testi amministrativi di Ebla* *archivio L. 2769 (= MEE 7)*, Roma
- Edzard, D. O. 1968 *Sumerische Rechtsurkunden des III. Jahrtausends aus der Zeit vor der III. Dynastie von Ur (= SRJ)*, München.
- Edzard, D. O. 1989 "Martu (Mardu)," *RIA*, Band 7, 433-440.
- Edzard, D. O. 1980 "Ilip," *RIA*, Band 5, 52.
- Englund, R. K. 1998 "Texts from the Late Uruk Period," *Orbis Biblicus et Orientalis* 160/1, Göttingen, 15-233.
- Frankena, R. 1971 "Girra und Gibil", *RIA, Band 3*, Berlin – New York, 383-385.
- Frayne, D. R. 1992 *The Early Dynastic List of Geographical Names*, New Heaven.
- Gelb, I. J. 1970 *Sargonic Texts in the Ashmolean Museum*, Oxford (= *MAD* 5), Chicago.
- Green M.W. 1982 "Miscellaneous Early Texts from Uruk," *ZA* 72 163-177.

- Jacobsen, Th. 1987 *The Harps That Once ...*, New Haven & London.
- Klengel H. 1972-1975 “Halab”, *RIA* 4, 50-53.
- Lambert, M. 1953 “Textes commerciaux de Lagash,” *RA* 47, 57-69.
- Litke, R. L. 1998 *A reconstruction of the Assyro-Babylonian God-Lists*, New Haven.
- Margueron, J.-C. 2004 *Mari Métropole de l’Euphrate*, Paris.
- Martin, H.P. 1988 *Fara: A Reconstruction of the Ancient Mesopotamian City of Shuruppak*. Birmingham.
- Martin, H.P. – Pomponio, F. – Visicato, G. – Westenholz, A. 2001 *The Fara Tablets in the University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology*, Bethesda, 2001.
- McGovern, P. E. 2003 *Ancient Wine: The Search for the Origins of Viniculture*. Princeton & Oxford.
- Moorey, P. R. S. 1999 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries, The Archaeological Evidence*, Winona Lake.
- Nördecke, A. Heinrich, E. Lenzen, H. 1939 *Zehnter vorläufiger Bericht über die von der Deutschen Forschungsgemeinschaft in Uruk-Wark unternommenen Ausgrabungen*, *APAW* 1939/2 (=UVB 10), Berlin.
- Pettinato, G. 1989 *Ebla, A New Look at History*, translated by C.F. Richardson, London.
- Pomponio, F. 1986 “gême-kar-kid: The Sumerian Word for “Prostitute””, *OIKUMENE* 5, 63-66.
- Postgate, J. N. 1992 *Early Mesopotamia: Society and economy at the dawn of history*, London & New York.
- Sallaberger, W. 1993 *Der kultische Kalender der Ur III-Zeit, Teil 1*, Berlin & New York.
- Sollberger, E. 1986 *Administrative Texts Chiefly Concerning Texteles (L. 2752)*, *ARET* 8, Roma.
- Steiglitz, R.R. 2002 “The Deified Kings of Ebla”, C.H.Gordon & G.A.Rendsburg ed. *Eblaitica: Essays on the Ebla Archives and Eblaite Language* 4, Winona Lake 2002, 215-222.
- Streck M.P. 2001 “Nusku”, *RIA* 9, 629-633.
- Stol, M. 2004 “Wirtschaft und Gesellschaft in Altbabylonischer Zeit,” Attinger, P. et al, *Orbis Biblicus et Orientalis* 160/4, Freiburg, 643-975.
- Tonietti, M.V. 1998 “The Mobility of the NAR and the Sumerian Personal Names in Pre-Sargonic Mari Onomasticon”, *Subartu* 4/2, 83-101.
- Westenholz, A. 1975 *Early Cuneiform Texts in Jena: Pre-Sargonic and Sargonic Documents from Nippur and Fara in the Hilprecht-Sammlung vorderasiatischer Altertümer Institut für Altertumswissenschaften der Friedrich-Schiller-Universität, Jena (= ECTJ)*, Copenhagen.
- Whiting, R.M. 1995: “Amorite Tribes and Nations Second-Millennium Western Asia,” in J. M. Sasson ed. *Civilization of the Ancient Near East*, New York, 1995, 1231-1242.
- Winter, I.J. 1987 “Women in Public: the Disk of Enheduanna, the Beginning of the Office of En-Priestess, and the Weight of Visual Evidence”, *La Femme dans le Proche-Orient Antique*, Paris, (= Actes de la XXXIII RAI Paris), 189-201.
- Yiğit, T. 2008 “A Study of <sup>MUNUS(MES)</sup>KAR.KID in the Hittite Cuneiform Texts”, *Orientalia* 77/1, 75-78.
- Zettler, R.L. 1992 *The Ur III Temple of Inanna at Nippur. The Operation and Organization of Urban Religious Institutions in Mesopotamia in the Late Third Millennium B.C.*, Berlin.
- 赤司千恵 2009 「ガーネム・アリとその周辺」 特定領域研究セム系部族社会の形成 若手研究者研究成果発表会報告 2009年4月18日.
- 大沼克彦 2007 「第1次ビシュリ調査日誌」 特定領域研究セム系部族社会の形成」 Newsletter No.6, 1-7頁.



クレンゲル H. 五味亨訳 1985 『古代オリエント商人の世界』 山川出版社

月本昭男 1996 『ギルガメシュ叙事詩』 岩波書店.

堀岡晴美 2006 「時代区分名称『ファラ期』を見直す」『特定領域研究セム系部族社会の形成 平成 17 年度研究報告』 63-74 頁。

前川和也 2006 「『マルトゥの結婚』によせて」特定領域研究セム系部族社会の形成 Newsletter No.2, 14-21 頁.

山田重雄 2006 「文書史料におけるセムの系譜、アムル人、ビシュリ山系」特定領域研究セム系部族社会 Newsletter No.2, 8-13 頁.

# テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落変遷に関する一試案

## — 第4次発掘調査の成果を中心に —

長谷川 敦章（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）

### 1. はじめに

シリア・アラブ共和国の北東部に位置するビシュリ山系をフィールドに「セム系部族社会」が形成された経緯を明らかにする総合的研究プロジェクトが2005年度より発足した（文部科学省科学研究費補助金平成17年度発足特定研究「セム系部族社会の形成：ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」領域代表者：大沼克彦）。（Al-Maqdissi and Onuma eds. 2008, 2009）

本プロジェクトの考古学分野における現地調査の一環として、ユーフラテス河の氾濫原に位置するテル型集落遺跡、テル・ガーネム・アル・アリ（Tell Ghanem al-Ali）の発掘調査が2007年より実施され、2009年9月現在で第6次調査まで行われている（長谷川ほか2008, 大沼・長谷川2009）<sup>1)</sup>。2009年3月に実施された第4次発掘調査では、基本層序を確認するため掘り下げていた第2発掘区において、地山を確認することができた。本稿では、第4次調査の概要の紹介と第2発掘区で確認された層序についてまとめるとともに、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落の変遷について若干の予察を加えたいと思う。

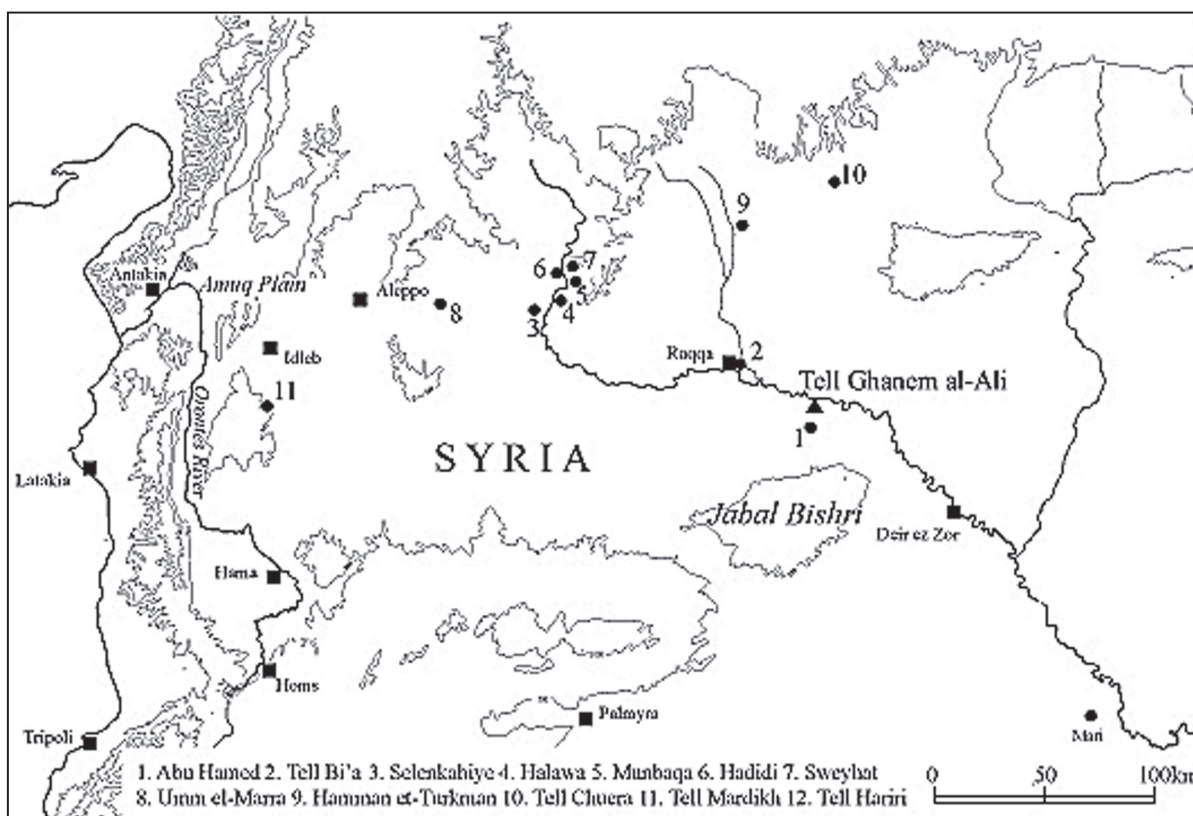


図1 テル・カーネム・アル・アリ遺跡とその周辺

## 2. 遺跡の立地とその周辺

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡は、ユーフラテス河に沿うように東西にのびる幹線道路をラッカ市街から東へ約50km進むと北側に見えるテル型遺跡である(図1)。ユーフラテス河の氾濫原には、当該遺跡と同様のテル型遺跡が複数確認されている(Kohlmeyer 1984)。特に当該遺跡周辺では、青銅器時代の包含層を有するテル型遺跡として、西へ約6kmにテル・ハマディーオン(Tell Hamadin)、東へ約5kmにテル・ムグラ・サギール(Tell Mugla as-Sagir)が位置している(Kohlmeyer 1984, 木内 2007)。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の南方にはビシュリ山から続く台地が広がっている。ドイツ隊により発掘が行われたアブ・ハマド(Abu Hamad)は、この台地の縁辺部に立地している(Falb et al. 2005)。

また、本プロジェクトではテルの発掘と同時に、遺跡周辺の踏査も進めており、台地縁辺部にいくつかの遺跡を確認している。台地縁辺部に流れるワディ・ダバ(Wadi Daba)とワディ・シャブブート(Wadi Shabbout)周辺には、青銅器時代の墓域が確認され(久米・沼本 2009)、ワディの段丘面を利用した長期居住地や小規模な短期逗留地と考えられる遺跡もいくつか報告されている(門脇ほか 2006)。

## 3. 遺跡の概要

テル・ガーネム・アル・アリの規模は、測量調査の結果、南北約250m、東西約290m、周辺の地表面とテル頂上部との比高差が約10mあり、形状は東西に長軸を持ついびつな卵形である(図2)。しかし遺跡は、大規模な地形改変を受けており、旧状を反映していない。1960年代作成の地形図からは、地形改変以前の形状を推察できる。その場合の遺跡の平面規模は、最大長が南北約450m、東西約380mとなり、

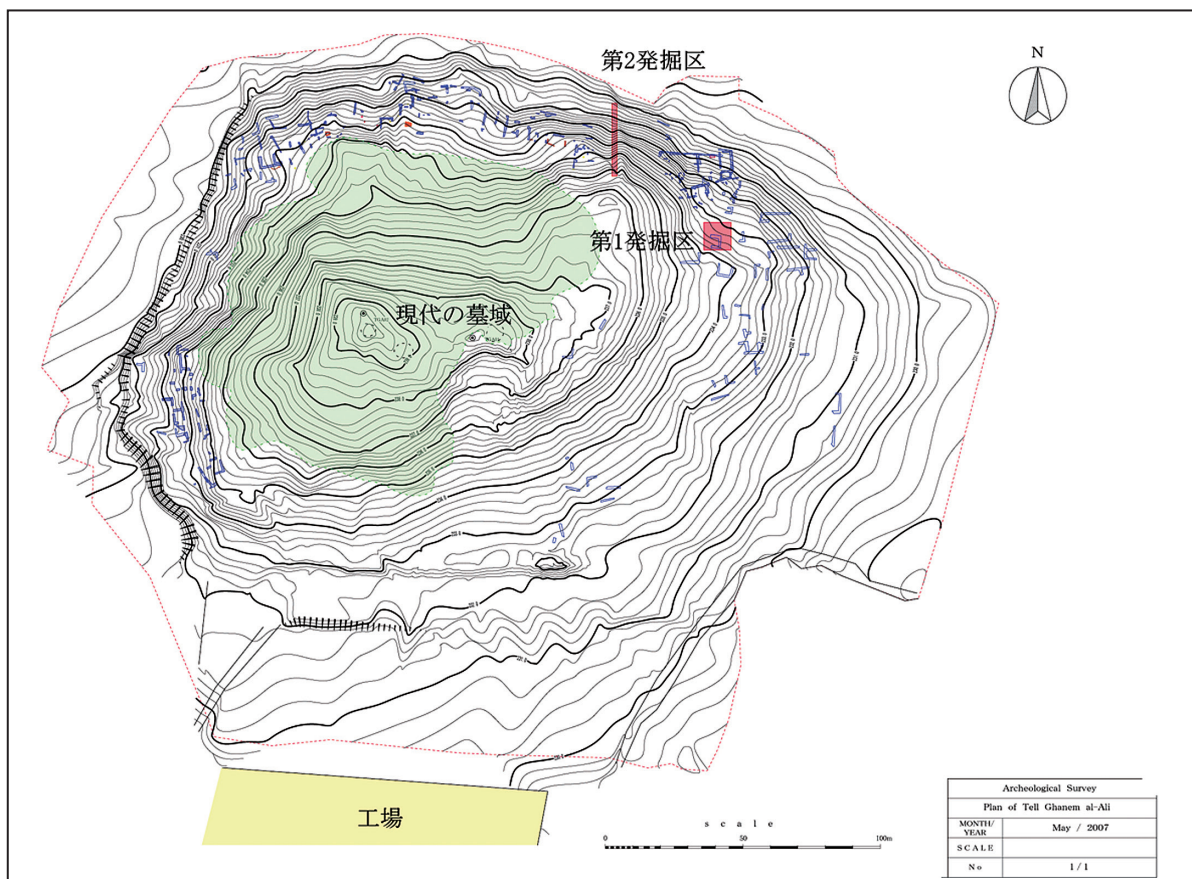


図2 遺跡測量図及び発掘区の位置



図3 第7建築層（南から撮影）



図4 第8建築層（南から撮影）

南に大きく張り出した逆三角形であったと考えられる。このことを考慮に入ると、テル・ガーネム・アル・アリの面積は約12haとなる。ユーフラテス河中流域では、テル・ビーア (Tell Bi'a), テル・ハディディ (Tell Hadidi), テル・エツ・スエイハト (Tell es-Sweyhat) のように、40haを超える規模の遺跡が存在する。その一方で、セレンカヒエ (Selenkahiye) やハラワA (Halawa A) のように10-15ha規模の遺跡もある。テル・ガーネム・アル・アリは後者の規模に属し、小地域における拠点集落であると考えられる。

#### 4. 第4次調査の概要

基本層所を確認する目的で、テル北側斜面に設置された第2発掘区は、第3次発掘調査までに、少なくとも6つの建築層を確認している。第4次調査では、無

遺物層である地山を確認することを主な目的とした。地山に到達するまでに少なくとも2つの建築層を確認した。

##### 4-1 第7建築層（図3）

日干レンガの壁によって区画された3つの部屋を検出した。レンガのサイズは約30×60cmであり、長辺同士が接するように一列に組まれているため、壁の厚さは60cmである。壁は北西から南東方向に向かって伸びている。直上の第6建築層とは異なり、礫による基礎はなく、直接日干レンガを積み上げている。住居の床面には薄く炭化物が堆積していたが、遺構全体に火を受けた痕跡は確認できない。また、住居内で径60cm 深さ50cmのピットを検出した。



図5 第2発掘区西壁セクション（東から撮影）最下層が地山

山であると考えられる。第2発掘区で確認した地山の標高は226.80mであり、発掘区北端の表土から深さ3.4mの所に位置する。

#### 4-4 第7及び第8建築層出土土器（図6, 7, 9）

第7及び第8建築層から出土している土器は、第6建築層までに出土している Plain Simple Ware と比較すると、器壁が厚い。また、注目すべきは、胴部に竹管文や爪形文が施されている点である。これらは上層で出土している Plain Simple Ware では一切施されない装飾であり、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺においても、極めて類例の少ない土器である。これらは、地域色の強い土器であると思われるため、位置づけは慎重に行う必要がある。

一方、煮沸用の土器も多数出土している。第6建築層までに出土している煮沸用土器には、口縁部が外反するものが多いことに対し、第7及び第8建築層から出土した土器は、口縁部が内傾するものが多い。

### 5. テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の基本層序（図10）

上述したように、第4次調査において、地山までの基本的な層序を確認することができた。ここでは、第1から第8建築層までを総括的に検討してみたい。まずは、第1建築層から第6建築層までの概要を簡単に述べておきたい。

第1建築層では、東西方向に伸びる3列の石列を表土直下で検出した。この石列には、砂利を敷き詰め

#### 4-2 第8建築層（図4）

第7建築層より40cm深い地点で、日干レンガにより区画された3つの部屋を検出した。レンガのサイズは第7建築層とほぼ同じであり、磔を利用した基礎も存在せず、地表面から直接レンガを積み上げている。しかし、レンガの短辺が接するように配置してあるため、第7建築層の壁と比べて厚さが30cmと薄くなっている。また、レンガ壁の方向も異なる。北西に位置する部屋からは、石臼の一部やカナンブレードが出土している。石刃の端部にピチュメンが付着した痕跡が確認でき、興味深い（図8）。

#### 4-3 第8建築層以下（図5）

第8建築層の下には、炭化物が多く混じる灰層が40cmほど堆積しており、煮沸用の土器の破片がごく少量出土している。この灰層の下には、少量の炭化物と土器片を含む褐色土が堆積している。さらに掘り下げると、極めて均質で粘性の高いシルト質の暗褐色土が現れる。炭化物等の混入はなく、遺物も一切出土していないことから、地



図6 第7及び第8建築層出土土器（竹管文）



図7 第7及び第8建築層出土土器（爪形文）



図8 第8建築層出土カナンブレード

た床面が伴う。またタンノールなど遺存状態の良い遺構が見られる。

第2建築層では、南北軸をとる石列によって区画された、3つの部屋を持つ住居址が検出されている。いずれの部屋も西側に石列の切れ目があり、出入り口であると思われる。この一連の住居址の南側では、別の部屋が検出されている。石膏プラスターによる床面を持つこの部屋は、石列の一部を上述の建物と共有している。

第3建築層では、大きな礫による大規模な石壁が検出されている。構築部材に利用されている礫は、上述した居住遺構で利用されていた石材とは明らかに規模が異なり、巨大なものである。またこの石壁の一部は第2建築層の遺構構築時に再利用されている。



図9 第7及び第8建築層出土土器（煮沸用土器）

第4建築層では、発掘区西端において日干レンガによる壁を検出している。当該遺構は遺存状態が悪く全体のプランは不明である。またこのレンガ壁の南側には、平行する2列の石壁が検出されている。このうち南側に位置する石壁は、幅約30cmと薄い、残高は約1.8mと高い。一方、北側の石壁は、幅約2mと厚く、残高は70cm程である。また、基礎部分には40cm×50cm程度のやや大きめの礫を使用している。注目すべきは、第1建築層から第3建築層にかけての全ての遺構が、南北軸に沿って構築されているのに対し、上述した2列の石壁は北西・南東方向を軸としている点である。その規模を考慮すると、周壁の一部の可能性が考えられる。

第5建築層は、遺存状態が良くないが、東西方向にのびる石列を検出した。その南側では、調理用土器が直立した状態で出土している。この土器の胴部最大径は50cm程度である。この調理用土器は第1発掘区や、第2発掘区の第2建築層でも複数確認されている。しかし、当該遺構で出土した調理用土器は、他とは異なり底部が欠損している。底部付近には、安定させるために別個体の土器の胴部片を敷いていた。このことから、破損した調理用土器を貯蔵用に再利用したと考えられる。

第6建築層を検出した、発掘区の北端付近では、表土層が厚く、土砂の堆積が1mにも及ぶ。第6建築層に帰属する日干レンガからなる壁は、この表土層の下で確認された。この壁は、約80cm×100cmの大きな礫を利用した、堅牢な基礎を有している。また、この基礎石列の検出面とほぼ同じレベルから日干レンガが複数見つかっている。これは石列周辺に広がっており、上述した壁に対応する床面であると考えられる。この床面で利用されている日干レンガには、壁で使用されているレンガとは異なるタイプのものが含まれる。壁には橙褐色を呈し、粘性が低く、固くしまっている日干レンガが主に使用されているのに対し、床面を形成するレンガには、主に褐色を呈し、粘性が高いものを使用している。第6建築層の遺構は、規模、構造において、これまでの遺構とは異なり、遺跡の性格を考える際に重要である。（長谷川ほか2008, 大沼・



図10 第2発掘区全景（北から撮影）

は言えないが、第6建築層は上述した第1から第4建築層とは異なる特徴を有する。第6建築層では、壁の基礎に礫を利用しその上に日干レンガを積み上げている。壁の方向は北西・南東方向に軸を有している点も異なる点である。基礎に利用されている礫は石膏岩ではあるが、それぞれの規模が大きい。また、基礎として安定させるために、板状の礫を選択的に利用しており、上面がほぼ水平になるように礫を配置している。遺構の規模が大きく、第2発掘区の調査ではその全体像は明らかにすることができなかったが、当該遺構は、上層の遺構とは明らかに規模や性格が異なる建築遺構の一部であると考えられる。以上を第II期としたい。

第7建築層および第8建築層では、居住遺構の構築材が日干レンガ主体となっており、基礎にも礫を使用していない。構築材に石膏岩を全く使用しないことは、第6建築層までと大きく異なる点である。これら第7建築層および第8建築層を第I期としたい。

## 6. テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落の変遷に関する一試案

6次に及ぶ調査の成果と、上述した3時期区分を踏まえたうえで、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落の変遷について、遺構を中心に予察を行いたい。

第I期を構成する日干レンガによる居住遺構は、第2発掘区の北端部分で検出された。つまり、現在のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の北側斜面の北端部分に位置することになる。しかし、遺構のプランか

長谷川 2009)

第4次発掘調査によって、テル・ガーネム・アル・アリには少なくとも8つの建築層が存在していることが明らかとなった。全ての建築層の全容が明らかとなった現時点で、全体を俯瞰することにより、テル・ガーネム・アル・アリの建築遺構の変遷を簡単にまとめてみたい。それぞれの建築層の遺構の構築材やプランなどの諸特徴や層的な関係を考慮すると、以下のような3つの時期区分を想定することが可能である。

第1建築層から第4建築層までの遺構は、その多くが表土直下から検出されている。利用される構築材として石膏岩が主体となっており、日干レンガは部分的に利用されている。また、居住遺構については、プラスターや砂敷きによる明確な床面を有しており、そのプランはほぼ南北軸に沿っている点が特徴的である。また焼成遺構が複数検出されている点も重要である。これらの諸特徴を持つ第1建築層から第4建築層までを第III期としたい。

第5建築層は遺存状態が悪く、明確なこと



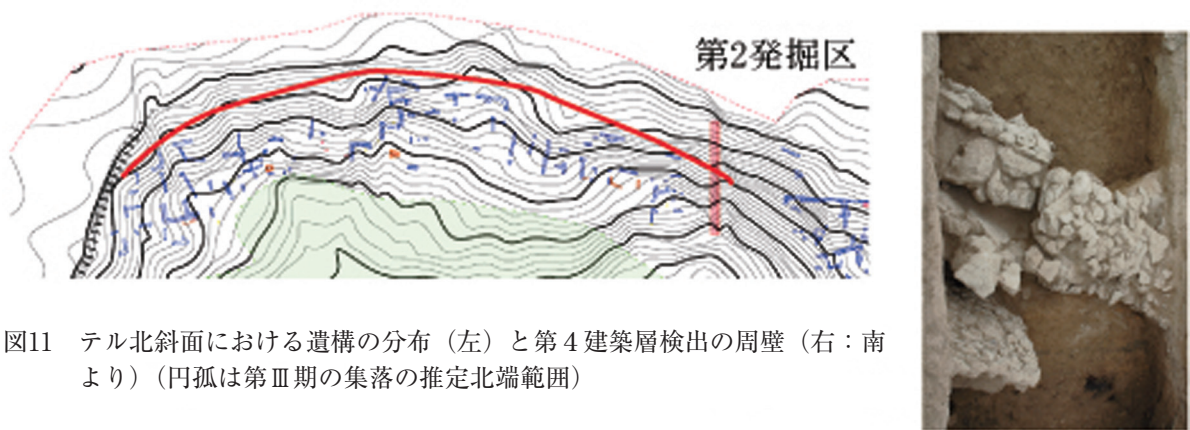


図11 テル北斜面における遺構の分布（左）と第4建築層検出の周壁（右：南より）（円弧は第Ⅲ期の集落の推定北端範囲）

ら考える限り、この遺構はさらに北側へ広がっていると思われる。このことは、現在の遺跡の北端が第Ⅰ期の集落の北端ではないことを示している。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡はユーフラテス河の氾濫原に位置していることから、洪水や流路変更にもない土砂が堆積し、当時の遺跡北端部分は深く埋没している可能性が考えられる。実際に、第2発掘区の北端付近では表土層が厚く堆積していた。第4次調査の際、遺跡の北側を部分的に追加測量したところ、現在の遺跡北端からさらに北へ50mほどまでは、極めて緩やかではあるが、傾斜していることが明らかとなった<sup>2)</sup>。この極めて穏やかな斜面は、現在耕作地として利用されており、遺物の表面採集を試みたが、表土が厚いためか、資料を得ることはできなかった。第Ⅰ期の集落の北限を確認するためには、詳細な測量と踏査、そして発掘を行わなければならないが、少なくとも現在のテルの形状から判断できる北限よりは、北へ広がっていたと考えられる。

第Ⅱ期には、第Ⅰ期のような一般住居址とは明らかに異なる、大規模な建築物が存在していたと考えられる。第Ⅱ期と第Ⅰ期の間では、建築遺構の構造や部材にも、大きな変化がみられる。また上述した第Ⅰ期に帰属する土器の特異性を考慮すると、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間に何らかの画期を見いだすことができるのではないかと考えている。ただし、第Ⅰ期と第Ⅱ期の遺構群の間には時期的な断絶はなく、西壁セクションの観察でも、各建築層の連続した堆積を確認することができる。つまり、第Ⅰ期と第Ⅱ期の間に、集落の廃絶ではなく、継続して居住していた可能性が高い。

第Ⅲ期は、石膏岩を利用した居住遺構が多く、ほぼ南北軸に沿ったプランである。これらの住居址は、第4建築層で検出している北西・南東方向に伸びている石壁より南側に位置している。この石壁は、配置や構造を考慮すると、第Ⅲ期の集落の北端を巡る周壁の可能性が考えられる。また、第Ⅲ期の遺構が表土直下から検出されていることから、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の表土に露出している多くの遺構の「痕跡」は、この第Ⅲ期に帰属すると考えられる（長谷川 2008, 大沼・長谷川 2009）。第3次調査において、遺跡北側斜面で確認できるこれらの「痕跡」を精査した際、その多くがほぼ南北軸に沿った石列による居住遺構の痕跡であった。また、第Ⅲ期とほぼ同規模の焼成遺構がいくつも確認されている（大沼・長谷川 2009）。

こうした「痕跡」の北側斜面における分布を見てみると、標高 230.00m の等高線よりも南側、つまり高い位置に集中している。上述の石壁がおよそ標高 230.00m の等高線付近に位置していることを踏まえると、第Ⅲ期の集落の北限は第Ⅰ・Ⅱ期よりも南側に移動し、周壁で囲まれていた可能性が考えられる（図 11）。

第III期以降は、遺構等を確認することはできなかった。ただし、第3次及び第4次調査において、テルの地表面の精査を行った際、中期青銅器時代の土器片をごく僅かであるが、採集している。また、第5・6次調査で行った土壙墓の発掘では、副葬されていた遺物に中期青銅器時代の土器が含まれていた(Ohnuma 2009a, 2009b)。これらを踏まえると、テル・ガーネム・アル・アリでは、第III期の集落が廃絶されてからは、大規模な集落は営まれず、土壙墓の造成など極めて限られた活動が行われたと推測される。

## 7. 今後の課題と展望

2007年から開始されたテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘調査は、第4次調査において地山を検出したことによって、一つの節目を迎えたと言える。これを踏まえ、本稿ではテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の層序を整理し、そこから描くことができる集落の変遷の一試案を提示した。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の居住時期は概ね3期に区分することができ、第I期と第II期の間に画期を求めることができると思われる。また集落の北限は、第I期から第III期にかけて、南へ移動している。このことは、集落の規模と関連しているのかもしれないが、これを検証するためには、更なる調査が必要である。

本稿で示した試案は、あくまで第2発掘区を中心とする、遺跡北側斜面における調査成果に基づいている。約12haに及ぶテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の集落の変遷を語るにはあまりにも情報が少ないのは明らかである。今後本稿で提示した試案は更なる調査が行われることにより、補足・修正されていくべきであると考えている。

本稿では遺構と層序の解釈から、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の居住時期を3つに区分した。今後の課題としては、遺物の分析に基づく成果との相関関係を明らかにする必要がある。特に土器の分析は、詳細な時期の決定や変遷を考えるためにも急務である。

最後に、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の暦年代に関する問題について簡単に触れておきたい。前期青銅器時代のように粘土板文書が存在し、その分析から所謂「文献史」が存在している時代において、暦年代は考古学と文献史学の双方の成果を紡ぐ重要な要素となってくる。一方で考古学的研究においては、土器の編年の研究を基礎として、ある一定空間についての地域編年を確立し、その相対年代を時間軸として研究を進めていく。前期青銅器時代と呼んでいる紀元前3千年紀には、本来相対年代であるはずの地域編年に、暦年代が数百年単位で付与されている。この暦年代を付与するための伝統的な方法としては、まず文献史学により確認されている「歴史的な事象」とそれを示す考古学的な痕跡の対応関係を定める。そしてその考古学的痕跡を定点とし、そこに文献史学の成果から導きだされた暦年代を付与する。最後にその定点が所属する地域編年に、定点を起点に暦年代をあてはめていく。具体的には、「アッカドのサルゴンの遠征に伴う破壊活動」と「エブラ(Tell Mardikh)のG神殿の崩壊」、「ブラク(Tell Brak)のナラム・シン宮殿」に使われていた「ナラム・シンの名前が刻印された日干レンガ」などである。ここで問題となるのは、「文献史学」の研究上において暦年代が揺れると、それはそのまま考古学の地域編年の暦年代にも影響を及ぼすということである。文献史学の研究成果では、該期の暦年代について「アンミ・ツァドゥカのヴィーナスタブレット」の解釈を巡って、高・中・低年代説があり、さらに、新年代説として超低年代説まで提案されている<sup>3)</sup>。一方で考古学の調査では、暦年代を測定する方法として放射性炭素年代測定法が用いられている。しかし、これまで提示されてきた暦年代が、放射性炭素年代測定法によってどこまで補正されているかは疑問が残るところである。

上述した暦年代の問題点を踏まえてテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の暦年代について問題点を整理し

ておきたい。まずは、土器の研究によりテル・ガーネム・アル・アリ遺跡における土器編年を構築した後、ユーフラテス河中流域の地域編年にその成果を位置づけなければならない。しかし、現在、当該地域では複数の地域編年が提示されている。まずは、伝統的に紀元前3千年紀を4期区分（実際には最後の第4期をさらに2期に細分しているため5期区分）している、Early Bronze 編年、また、ジャジラ地域で提唱されている5期区分の Early Jazirah 編年（実際には、第3期を2期に細分しているため7期区分）がある。この Early Jazirah 編年は提唱者であるフェルツナー（P. Pfälzner）とルボー（M. Lebau）によって若干解釈が異なっており、まだまだ議論の余地があるようである（Pfälzner 1997, Lebau 2000）。これらに加えて、ユーフラテス河中流域の土器を中心として確立された、ポーター（A. Porter）による6期区分が提示されている（Porter 2002）4）。テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の土器編年を位置づけるには、ユーフラテス河中流域の資料を多く検討している、ポーターの編年案が妥当かと思われるが、注意深く検討する必要がある。

一方でテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の各建築層の放射性炭素年代測定が現在進行中である。最終的にテル・ガーネム・アル・アリ遺跡の暦年代を決定するためには、地域編年から得られた年代観と放射性炭素年代測定で提示された年代との整合性についての検討が不可欠となる。これによって、該期の暦年代の議論に一石を投じることができると思われる。

最後に本稿における見解はあくまで2009年11月時点の整理状況から得られた見解であり、今後、整理を進めていく中で、変更が生じる可能性があることを明記しておきます。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、資料の使用を許可していただいた大沼克彦先生および常木晃先生、また執筆の機会を与えていただいた佐藤宏之先生に、末筆ですが深く感謝申し上げます。

## 註

- 1 本稿における調査の次数は、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡における発掘調査の回数を示している。本プロジェクト全体では様々な調査を行っており、全体の調査の次数とは異なる。
- 2 遺跡の北側は現在耕作地として利用されている。遺跡北端から50m程北へは極めて緩やかに傾斜しており、比高差は1m程である。
- 3 文献史学による暦年代の議論の詳細については、『古代オリエント辞典』の「総論 古代オリエントの年代問題」を参照されたい（中田2005）。
- 4 ユーフラテス河流域を概説的にあつかったクーパー（L. Cooper）の著書“Early Urbanism on the Syrian Euphrates”では、ポーターの編年案を一部修正して採用している（Cooper 2006）。

## 参考文献

- Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) 2008 Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological joint research in the region of ar-Raqqa, Syria, 2007. *al-Rāfidān* 29: 117-193.
- Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds.) 2009 Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological joint research in the region of ar-Raqqa, Syria, 2008. *al-Rāfidān* 30: 135-225.
- Al-Khalaf, M. and J.-W., Meyer 1993/1994 Abu Hamad, *Archiv Für Orientforschung* 40/41:196-200.

- Cooper, L. 2006 *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*, New York and London, Routledge.
- Falb, C., Krasnik, K., Meyer, J.-W., and E. Vila 2005 *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*. Saarländische Druckerei & Verlag, Saarwellingen.
- Kohlmeyer, K. 1984 Euphrat-Survey: Die mit Mitteln der Gerda Henkel Stiftung durchgeführte archäologische Geländebegehung im syrischen Euphrattal. *Mitteilungen der Deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 116: 95-118.
- Lebeau, M. et al. 2000 Stratified Archaeological Evidence and Compared Periodizations in the Syrian Jezirah during the Third Millennium BC. In Marro C. and H. Hauptmann (eds.) *Chronologies des pays du Caucase et de l'Euphrate aux IV-III<sup>e</sup> millénaires*, Paris: 167-192.
- Ohnuma, K. 2009a Sondage in Square 6 of the Site of Tell Ghanem Al-Ali. In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Ninth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.
- Ohnuma, K. 2009b Sondage in Square 6 of the Site of Tell Ghanem Al-Ali. In Ohnuma, K. and M. Sarhan (eds.) *Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Tenth Working Season*. The Working Report submitted to the Department of Antiquities and Museums, Damascus.
- Pfälzner, P. 1977 Wandel und Kontinuität im Urbanisierungsprozeß des 3. Jtsds. V. Chr. in Nordmesopotamien. In G. Wilhelm (ed.) *Die orientalische Stadt: Kontinuität, Wandel, Bruch*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei and Verlag: 239-265.
- Porter, A. 2007 The Ceramic Assemblages of the Third Millennium in the Euphrates Region. In Al-Maqdissi, M., Matoian, V. and C. Christophe (eds.) *Céramique de l'âge du bronze en Syrie II, L'Euphrate et la region de Jézireh*. Beyrouth, Institute Français du Proche-Orient: 3-21.
- Pruß, A. 2004 Remarks on the Chronological Periods. In Anastasio, S., Lebeau, M. and M. Sauvage (eds.) *Atlas of Preclassical upper Mesopotamia, Subartu XIII*. Turnhout, Brepols: 7-21.
- Strommenger, E. and K. Kohlmeyer 2000 *Tall Bi'a-Tuttul-III: Die Schichten des 3. Jahrtausends v. chr. im Zentralhügel E*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei and Verlag.
- Wilkinson, T., J. 2004 *On the Margin of the Euphrates, Settlement and Land Use at Tell es-Sweyhat and in the Upper Lake Assad Area, Syria*. Chicago and Illinois, Oriental Institute Publications.
- 大沼克彦・長谷川敦章 2009 「農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落 — シリア, ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2008年度発掘調査 —」『平成20年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会 76-79頁。
- 門脇誠二・久米正吾・西秋良宏 2009 「ユーフラテス中流域の先史時代 — 第1次調査(2008) —」『平成20年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会 57-62頁。
- 木内智康 2007 「表採遺物から見た各遺跡の時代」大沼克彦編『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』1号 18-23頁。
- 久米正吾・沼本宏俊 2009 「ユーフラテス川流域の古代墓を探る — シリア, ビシュリ山系ワディ・シャップート墓域の第1次・第2次調査(2008) -」『平成20年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会 80-62頁。
- 中田一郎 2005 「III-1- (1) 古代オリエントの年代問題 メソポタミア」『古代オリエント辞典』岩波書

店 28-30 頁。

長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦 2008「農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落— シリア, ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2007年度発掘調査—」『平成19年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会 64-71 頁。

長谷川敦章 2008「テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の測量調査」大沼克彦編『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』10号 5-9 頁。

長谷川敦章 2009「紀元前3千年紀におけるユーフラテス河中流域の集落と墓域の関連性 -テル・ガーネム・アル・アリ出土人物形土製品の検討から-」西秋良宏・木内智康編『農耕と都市の発生 -西アジア考古学最前線-』同成社 143-157 頁。

# The Chronological Sequence of the Site of Tell Ghanem al-Ali

Atsunori Hasegawa

Doctoral Course, Graduate school of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

The Site of Tell Ghanem al-Ali is located some 50 km east from the city of Raqqa and some 2.5 km south from the Euphrates. The mound has an irregular oval plan with maximum width of ca. 400m (west-east) and ca. 300m (north-south). It measures ca.10m height. Although the summit of the mound is covered with modern graves of Ghanem al-Ali villagers, on the other part of the mound, it is possible to notice that considerable number of buildings can be found by surface observation

In 2007, the Syrian-Japan Archaeological Joint Research in the Bishri region began the fieldwork, and we carried out trench excavations in six squares at Tell Ghanem al-Ali. The one of main objectives is to confirm the chronological sequence of Tell Ghanem al-Ali. To the objective, we set the step trench which is named square 2, on the north slope of mound and measured 4(east-west) × 27(north-south) m.

In square 2, we have reached the virgin soil of mound and identified several building levels. According to features of structures, it is possible to classify them into three phases. The first phase consist of dwellings constructed of stones. They have a rectangular and the orientation of the walls was mainly along the north-south axis. In some rooms, we found obvious plaster floor.

In second phase, one thick wall using large stones of ca. 80 × 40 cm were identified. The axis of the wall directs from the southeast to the northwest. Both the size and the orientation of wall belong to the second phase are quite different from first phase.

Lastly, as to the third phase, three rooms divided by walls were identified. The walls were constructed by piling mud-bricks, measuring ca. 30 × 60cm. Each walls were ca. 60cm wide and ran north-west and south-east. In contrast to the walls of upper phase, they did not have stone bases. That is to say, mud-bricks were piled up directly on the ground. The axis of the walls directs from the northeast to the southwest. The potsherds found from the third phase contained seem to be unique. Ware. The fabric of them is similar to the Plain Simple Wares found from upper layers, but their walls are thicker. The most important differences from upper layers are the ornament of body. They are incised design of a lot of circles or crescents on the body.

Below the third phase, we encountered the virgin soil of Tell Ghanem al-Ali. It was dark brown color and homogeneous wet silt-like soil. No potsherds and other remains included. The altitude of virgin soil in Square 2 is ca. 226.80m. It is 3.4m deep from the mound surface at the north end of Square 2.

Finally, we could not confirm that any potsherds and structures date to Middle Bronze age at Square 1 and 2. But among potshards collected on the surface, a few potsherds belong to Middle Bronze Age were included. And we have excavated a small pit grave at the north slope of mound. The potsherds we found from grave belong to Middle Bronze Age. They are very rear evidence indicating the existence of Middle Bronze Age cultural layer at Tell Ghanem al-Ali.

The result of our excavation shows that the occupations of tell Ghanem al-Ali mainly belongs to Early Bronze

Age. After extinct buildings we could observe on the surface, It seems that the human activity are restricted at Tell Ghanem al-Ali, for example making the pit graves.

---

---

若手研究者成果論集  
A Collection of Essays on West Asian Studies by Young Researchers

2010年1月30日

January, 2010

編集：佐藤 宏之

Editor : Hiroyuki Sato

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室  
Department of Archaeology, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo  
Hongo 7-3-1, Bunkyo-Ku, Tokyo 113-0033 Email: hsato@l.u-tokyo.ac.jp

発行：文部科学省科学研究費補助金平成「特定領域研究」

「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」総括班（代表 大沼克彦）

Published by Supervising Team of the Research Project "Formation of Tribal Communities in the Bishri Mountains, Middle Euphrates" (Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Area (2005-2009), The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan)

事務局：国士舘大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室

〒195-8550 東京都町田市広袴 1-1-1

Office : Ohnuma lab, The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University,

Hirohakama 1-1-1, Machida, Tokyo, 195-8550 Japan

Tel : 042-736-5489 Fax: 042-736-5482 Email: kaonuma@kokushikan.ac.jp

URL : <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html>

印刷：(有)平電子印刷所

〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内 13

Printed by Tairadenshi Co.,Ltd.

Nihinouchi 13, Tairakitashirado, Iwaki, Fukushima 970-8024 Japan

---

---